

---

# 放課後タペストリー

上葵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

放課後タペストリー

### 【Nコード】

N3060R

### 【作者名】

上葵

### 【あらすじ】

十和森高校の文化祭が、今年行われることはない。

生徒の一人が近隣の山林で首を吊って死んでいるのが見つかったからだ。

長山京の所属する映画研究部は、その文化祭中止によって実質的に廃部が決定していた。陰鬱な気分で、校舎を徘徊していた彼は、『自殺した先輩にはなにかしらのメッセージがある』と主張する女の子と屋上で出会う。

## 0..始原スーサイダル

医療が発達し、死にたくても死ねない時代がやってくる。

近未来の世界では人生の終点に自殺を選ぶようになり、場合によっては、それすらも魔法のような技術で止められるようになるだろう。

人間適当に生きたら適当に死ぬ、それが一番だ。坂井珠希はそう考えていた。

窓の向こうの真っ赤な空を、風に逆らいアカトンボが飛んでいた。その景色はどこか幻想的で、まるで抽象画に迷いこんだかのように錯覚させられる。

沈みかけの太陽に、十和森高校は朱色に染められ、校舎の影がすぐそこまで迫る夜を知らせていた。

古書の香りを漂わせる図書室にも、オレンジ色の光りが緩やかに注がれている。

「なあ、あんたはなんで本を読むんだ？」

制服姿の二人が、本棚を挟んで向かいあって立っていた。互いの姿は蔵書がカーテンの役割を果たしているため、窺うことくらいしかできない。

質問を投げかけたのは、精悍な顔立ちをした青年だった。

「その質問、私にしたのか？図書委員のアンケートでもとっているのか？」

眉間にシワを寄せる少女は、あどけなさが残る容姿とは対照的な大人っぽい口調だった。

「そういうわけじゃない。ただ純粋に興味があったんだ。いつも見かけるこの人は、どんな理由で読書するのか、ってな」

「関係ないな。ほうっておいてくれ」

視線を一度も声の方向にあわすことなく、少女はうざったそうに言い放つ。

姿が本棚で遮られているとはいえ、不機嫌になっているのは容易に想像がつきそうなものだが、少年は全く気にした様子なく、変わらぬ調子で続けた。

「図書委員は後輩に引き継いで、俺は今から部活のほうに行かなくてはならない」

「時間つぶしに私が選ばれた、というわけか？」

「深く干渉する気はないってこと。進路希望調査より軽いレベルの質問だと思ってくれればいい」

彼女は、呆れたような息をつき、脇に抱えていた一冊を本棚に戻した。それがすむとポケットから一口サイズのチョコレートを取り出し口に含む。

飲食厳禁を破った禁忌の甘みが口内に広がった。

「いいだろう。質問に答えてやる」

残った包み紙をくしゃりと手のひらで握りつぶして、ポケットに冷静さを閉じ込めるみたいにした。しまった。

「私にとって読書は暇潰しだ」

「随分投げやりな言い方だな」

「有り余る時間を知識に換算する作業、それ以上も以下もない」  
言い終えて、ずしりとした重みをもつハードカバーを手取る。

「なるほど。なかなか面白い答えだ」

「そう言うお前は？」

「え」

「お前にとって読書とは？」

質問を返された少年は困ったように後頭部を無言でぽりぽりかいた。

「次からは模範回答くらい用意しておけ」

澄ました表情で、開いたページに目を落とし、彼女はぞんざいに

言い捨てた。

嫌みとも取れる発言に、無言のままだった彼は、小さく「そうだな。気をつけるよ」と謝る。

その謝罪に返事をすることなく、彼女は手に持っていた本のペー  
ジを吟味するように時間をかけてめくった。

人気もなくなった室内には紙がめくれる音だけが響いている。

「それじゃ、邪魔したな」

言葉を溶け込ませるように、別れの挨拶をし、彼は足を前にだした。

「大丈夫か？」

遠ざかろうとする気配に、少女はいたって平坦に、声をかけた。

「……なにを指して人の心配をしたんだ？」

「声が震えているぞ」

黄昏は空気を冷たくしていく。その場にいるのは自分たちだけだと、勘違いしてしまいそうになる。

初対面に近い状態の他人に体調を心配されるとは、と彼は自嘲ぎみに額に手を当て、出しかけていた足を戻した。

「そう、だな」

空気は微かに夜の気配を帯び始めていた。

「怖い、のかな」

「怖い？なにが」

「……未来が」

流れ行く時が、ゼリーに包まれたかのようにゆったりと流れていく。それでも夕暮れは過ぎ、気づけば空に紫色が広がっていた。

「将来が不安ということか？」

「違う。俺が恐れているのは未来だ」

話を聞いていた少女は、右手を本から外し顎にあてた。考え事をする時の彼女の癖だった。

「俺が今まで生きてきたのはすべて未来の自分のためなんだ」

「その何がおかしい。未来に備えて今を生きる、当然のことじゃ

ないか」

「今のこの時は過去の自分から見たら未来だ。結局俺はなんのために生きてきたんだ」

「哲学的だな。飛んでいる矢は止まっている、とでもいうのか？自分の努力がどこに流れつくのか解らなくなったか？」

「そうじゃない。今日の次に明日があって、明日の次に明後日がある。このサイクルは誰が決めたんだ」

「……」

「もしかしたらそう認識しているだけで、ほんとは違うんじゃないのか？」

少女は彼の言葉が一段落ついたのを確認すると、その隙間にゆっくりと優しい声で自分の考えを滑りこませた。

「物理や哲学、その他もろもろでも考えられてきたことだ。とはいえ、なにも難しいことはない」

「時間軸が一定かどうか、解明できるのか？」

「根本原理を明らかにするわけではないが、説明はできる。全てはお前が生きているからだ。デカルトしかり、我思う故に我あり」

言いながら顎にあてたままだった右手を背表紙にあて、本を支える。

「悠久の時の流れを意識できるのは、自我あるお前の特権だ。よく時間は川面に浮かんだ一枚の葉に例えられる。川下が未来を表し、流れ行くそれを眺めているのが観測者たるお前だ。人間の脳は知らず知らずの内に時間の流れを観測する機能を保持しているのだよ」

「だからって俺の不安は解消されない」

「そういう不安は無くさなくていい。いつか、気にしなくなる時がくる。時間が腐るほどあるのは思考するための猶予なのだ」

彼はゆっくりと顔を上げて、本棚の向こうにいるであろう彼女を見やった。

そのまま口だけを人形のように動かす。

「でも、……でも、もし思考すらできなくなったら、どうしたらいい

い」

その返答に彼女は困惑ぎみに、眉間にしわを寄せた。

「そのときは、」

考えながら、口を開く。妙に鬼気迫る彼の声音に、真摯に向き合わなくてはならないことを、彼女は頭の片隅で理解していた。

「別の誰かに答えを託すだけだ」

貸し出しカウンターには彼の代わりの二年生が座っていた。図書委員の引き継ぎは、すでに終わっているようだ。

彼は自嘲ぎみに鼻を鳴らしてから、口を開いた。

「ああ、そうか。ありがとう」

「礼の意味がわからんな。思春期特有のパラノイアだよ」

「スツキリした。バカにしないで、話を聞いてくれたこと感謝する」  
和やかな声を発しながら彼は瞼を手のひらで覆った。

「ああ、ほんとうに、救われた」

消え入りそうな調子で言い残すと、一度も振り返ることなく、出口に向かう。

「……」

残された少女は一人なにをするでもなく、本棚を抜け、姿を現した彼の背中を見送った。

視線は活字に落とされることなく、扉をくぐっていった儂げな背中を釘付けになる。

結局、委員会業務もせずに話しかけてきた彼の目的はわからなかった。

まあ、いい。どうせ、これから先関わることもない人物だ。

開いたままだった植物図鑑をパタンと閉じて棚に戻す。

彼の首吊り死体が見つかったのは、週末、その夕暮れ時と同じ穏やかな朝のことだった。





## 1..屋上フォトグラフ

世界が変わる瞬間は、誰の目にも留まらない。

1999年の七の月、破壊の大王アンゴルモアは、僕の知らないどこかに降りて、僕の知らない内に天に帰った。

同じように人生が変わる瞬間も、人気のない場所でひっそり、名も知らぬ星が爆発するみたいに突然起こる。

義務教育を終えた僕たちに訪れる未来はどこまでもシビアで、いつしか世界を変えるナニカが自分たちの目の前に訪れないことを太陽が東から登るのと同じくらい絶対不変な心理にしていた。

だけど人生においての平凡は、ある出会いにより過去のものに変化した。もちろんこの個人的な邂逅が、連綿と続く歴史に対し、ちっぽけな塵に等しいこともわかっているが、ただ無味乾燥な日々を食いつぶす僕にとって、坂井珠希との出逢いは、一種の特異点だったに違いない。

空気はしんとしていて、湖畔のような静けさを保っていた。

7時、登校するにはまだ早いその時刻に、朝日に照らされた廊下を歩く奇特な生徒は、やっぱり僕だけだったようだ。

ビデオカメラ越しにみる光輝く廊下は、それだけで物語の一部分のようだったが、あくまでここは目的地への中間点にすぎない。

「7時11分、B棟廊下」

映像として編集するときに混乱しないよう、その場所を音声で記録する。

僕の所属する映画研究部の廃部が決まったのは、今月の始め、泰礼祭の中止発表がされてすぐのことだった。泰礼祭とは僕が通う十和森高校の文化祭の俗称である。

会議室で通告を受けた時は落ち着いていたが、1ヶ月ほどで、麻痺してたらしい寂寥感が湧き上り、このまま廃部にされるより、何かカタチあるものを残したいと活動することにしたのだ。当初は泰礼祭に向けての活動だったが、中止となった今ではただの暇つぶしだ。

ああ、正確には猶予だったか、と一人ごちたが、存続条件が、来月までに規定部員数三名となにか有意義な活動実績では、どう足掻いたってどうしようもない。事実的に廃部通告だ。

世界が僕に与える変化は、このよう望まぬものばかりだった。

ハンディカメラを回し続け立ち入り禁止のロープが張り巡らされた屋上へと通じる登り階段の前に到着する。

スイッチを一旦切り、ロープをスパイ映画の警報装置を乗り越える主人公みたいにして避け、階段に足をかける。

人に見られたらマズいからこんな早朝に行動しているのだ。

屋上の利用が許可されるのは、非常時限定であり、普段の学園生活で足を踏み入れる機会などまずなかった。だからこそ希少価値があるのだ。

階段を登りきり、異様な存在感を放つドアに半年の学校生活で初めて手をかける。重厚そうな扉だったが、意外にもすんなり僕の侵入を許してくれた。火災の時に閉まっていたは困るからだろうか、鍵もかかっていなかった。

扉を開けた瞬間、爽やかな朝の風が僕を包み込み、見事としか言いようのない景色が迎えてくれた。街が黄金色の曙光に照らされている様は圧巻だったが、見とれているだけでは目的は達成されない。

停止していたビデオカメラを再び起動させて、目元に持ってくる。こうした違反行為も、個人が楽しむ分には許されるだろう。

高揚した気分で撮影開始した僕の背後で、開けっ放しにしていたドアが音をたて勢いよく閉まった。澄んだ朝の空気は、存外大きく震えたが、それを受け取る鼓膜は僕の持つ2つしかない。

あくびが漏れそうになるのを抑えカメラを回す。

穏やかな空気の中で感じる孤独に、僕は確かに“生”を感じていた。吹き上げる風にシンクロするように、身体を構成する細胞の一つが呼吸をしているみたいで、味わったこともない不可思議なノスタルジックが僕の意識を優しく支配する。

だから、次の瞬間、

「何しにここに来た？」

その気分をぶち壊す何者かから声をかけられるなんて全くの予想外で、文字通り心臓がどきんと跳ね上がった。

どうやら先客がいたらしい。

こんな時間に一体誰だ？ 見回りの事務員？ 宿直の先生？ 最悪頭の固い教室陣からの大目玉を覚悟した僕の思いはすぐに思い過ごしと相成った。

視界に捉えた人物は、制服を着用しており、僕と同じ、高校生という身分だったのだ。しかし、緊張感は拭い去れない。

制服以外の要素で、そいつは日本の寂れた高等学校に不釣り合いな容姿をしていたからだ。

彼女はこつちを鈴の張ったような目でジッと睨みつけていた。青い瞳と金色の髪を持つ、スクリーンの向こう側にいそうな女生徒だ。小柄な外国の少女は高いフェンスの壁を背景に、もう一度「何しにここに来た？」と警戒を隠さぬ声音で問う。

「あ、いや」

どもる自らの声が気付け薬になったのか、混乱から脱出し、忘れかけていたカメラを下ろしてから、僕は浅く呼吸を整えた。

彼女は黒くくすんだタイルの上で、その青い双眸を僅かに細めた。「学校をビデオに記録してるんだ。機材を天日干しする意味も込めて」

「こんな時間にこんな場所で？」

無言で頷く僕に、地面に散らばった黒い土の玉を上履きでぐしゅぐしゅにほぐしながら彼女は唇を尖らせた。

「無許可だろ。あまり誉められた行為ではないな」

「そうだけど……。それはお互い様じゃないかな」

「私がどうだろうと、お前が変質者なのには変わりない」

「もう一時間もすればいつも通りの日常に戻るさ。僕だって暇じゃないし」

異常な出会いに辟易する僕としては、そうそうに用事を済ませこの場を去りたいというのが本音なのだが、それでは彼女に負けた気がしてしまう。あくまで気分の問題だ。

「忙しいやつが朝っぱらからふらふらするはずないだろ。暇人め」

ほんのり赤みがかったほっぺをもごもごさせながら、彼女は僕をバカにするように言った。どうやらあめ玉でも舐めているらしい。

「あまり言いたくないけど、君もだからね。それはそうと、そんな端っこ危ないよ」

「余計な忠告をありがとう。口を閉じてろ。なんの権限があつて私に命令してるんだ」

親切心の忠告にぞんざいな態度を取られて頭にこないやつはいない。ムツとしながら僕は眉をしかめた。

「命令じゃなくて注意。それに今は関係ないとはいえ、僕は風紀委員だから」

「規律を守り模範となるべき存在が校則を破っているではないか。ずいぶんいい加減な風紀委員だな」

言いかえせないのは、どんな言い訳も論破されそうだったからだ。完全に失言だった。

汚れた上履きの靴底をまだ綺麗なアスファルトにズリズリとこすりつけ土を落としながら、

「嘆かわしい限りだ。自由を謳う十和森の校風は生徒の責任により成り立っているというのに、規律をただすべき風紀委員がこれでは」

死体に銃弾を浴びせるようにモラルを欠いたため息混じりの正論が、僕の鼓膜を打ち抜いた。

「だから君も校則を破ってるっんだって」

「私には自分が信じる真つ当な理由がある。ビデオを持って校舎を徘徊する根暗なヤツとは違うのだよ」

「最後の思い出作りくらい自由だろ？ありふれた日常って忘れやすいから、記録しておくに越したことはないと思うけど」

「最後？また妙なことをいう。お前はまだ一年だろ」

僕の意見をぶった切ったの発言に、啞然としかけたが、襟章の色で学年が分けられているのを思いだし、

「そうだけど、クラブが予算会議で来月には廃部になっちゃうんだ。部員は僕だけだったけど、やっぱり少し寂しいものがあるからね」

新体制となった生徒会に恨みを述べるわけではない、むしろ三年生がぬけてたった一人のクラブの存在を省いたのだから、立派に活動しているだろう。だけど少し、居場所が奪われたみたいで不快だった。

「それで学校をビデオで撮ってまわってる、ってわけ。最後の部活動で出演者がいない作品作りをね」

「なるほど。屋上なんて余程なことがない限り来ないもんだと思っていたが、まあ頷ける理由だな。手にあるビデオカメラがその証拠みたいだ。まさかカムフラージュというわけではあるまい」

「カムフラージュって、なにをごまかそうってのさ」

「そうだな。例えば、」

言いかけて、彼女はイタズラを思いついた子どもみたいに小さく口角をあげ、すぐに「いや、なんでもない」と言葉を濁した。

「よくわからないけど、誤解はとけたみたいだね。なら活動再開させてもらうよ」

回しっぱなしだったカメラのファインダーを再びのぞく。

レンズ超しになった彼女は、慌てたようにポケットからなにかを取り出し、ソレを口に含んだ。

一瞬でよくわからなかったが、どうやらキャンディのように包まれた一口サイズのチョコレートみたいだ。おそらく今までもごもと口に含んでいたものもそうだったのだろう、と推測してみる。

「まさかそれ録画中か？あ、赤いランプがついている」

先ほどのまでの気丈な態度が吹き飛んだ。言葉をつつかえつつかえに彼女はふるふると震えながらカメラを指さす。

「苦手なの？」

僕の問いかけに、彼女は仮面で覆うように顔を両手で包みこんでこくんと頷いた。

「き、嫌いなんだ。他人の目に曝されるなんて反吐がでる。早くしまわないと、お、怒るぞ」

「わかった。悪かったよ」

背景にミスマツチとはいえ、撮影をかじっている僕が画になる彼女を記録したいと思わないはずがなかった。しかしながら、あくまで目的は屋上の撮影であり、金髪の少女の撮ることは本来は含まれていない。

君なんて眼中にないからどいてくれ、と言う気もなかったし、肖像権やらを考えたら、個人の意思は尊重してしかるべきだろう。

僕が腕を下ろすと同時にまた、放り込むようにして一口チョコをほおばった。

露骨にパニックっているのがわかる表情だったのが、すぐに幸せ一色に染まる。なんていい顔でチョコを食べる女の子だ。広報担当者が見たら即刻CM契約の話に移ることだろう。

そんな微笑ましい気持ちになったのもつかの間、一瞬にして元の不機嫌面に戻って彼女は言った。

「話がわかるやつで助かった」

カメラが静止した途端、人を観察する猫のように目を大きくする。「こんな時間に屋上に来るなんて、……自殺志願者かとも思ったが違うらしい」

突然上げられたワードに、僕個人の空気が少し重くなったように感じた。

文化祭が中止になったのは三年の男子生徒が近くの山で首を括って死んだからだ。

その単語自体、学校全体で一種の禁止ワードみたいになっている。それをわかって僕を「自殺志願者」に喩えるなんて不謹慎極まらないだろう。

彼女は僕を値踏みするみたいなジト目で睨みつけたまま続けた。

「それで」

「ん？」

「いつまでここにいろつもりだ？」

「あ、いやもう少し撮りたいかな」

「もう帰れ。邪魔だ」

後からやってきたのは僕の方だとはいえ、その言い草はあんまりだ。カチンとしながら、僕は言った。

「少し外してくれば数分で撮り終わるよ。大体君こそこんな時間に屋上になんの用だよ」

「うむ。そうだな、合唱コンクールの練習をしているのだ」

「合唱コン？それはまた」

11月の中間試験後の行事に合唱コンクールという田舎の中学生しかやっていないようなものがある。毎年一年生（僕もだが）を対象に、コーラスを強制するこのイベントの支持率は著しく低い。来年にはなくなるんじゃないだろうか。

そんな誰も得しないようなイベントに尽力する生徒がいるなんて思いもしなかった。

「だからさっさとお前がここからいなくなってくれことを望む」

「人に聞かれてナンボじゃないの？歌ってのは」

「まだ聞かせるレベルではないから練習しているのだ。察しろ」

ストレートにさっさと出てけ、と言われた僕は、この場所の所有権を主張するわけでもないので早々に屋上を去ることにした。

整った顔立ちの、金髪の少女が歌っている姿を見たかったのは正直な話だが、本人が拒否しているのだから仕方ない。

「それじゃ練習頑張ってね」

軽く手をあげ扉に手をかけた僕に浴びせられたのは不機嫌そうな

「ふん」という鼻息だけだった。



## 2..黄昏メランコリック

ちらほらと朝練に精をだす生徒が増え出す時間帯、静まり返った教室に戻ってきた僕は、カメラを机に置いて、椅子に腰をおろした。そのまま突っ伏して、アホみたいに瞼を重くする睡眠欲に忠実になろうかとも思ったが、まだやることが残っているので無闇に従うことは出来ない。

放置したままだった鞆から、教科書やノートやらを机に移しかえ、横のホックに引っ掛けた。

一息ついて、まどろみの世界に足を突っ込もうとした瞬間、教室のドアが音を立て、見知った顔が視界に飛び込んできた。

「あれ、京？早いな」

隣の席の友人、橋本裕貴だ。裕貴はあくびをしながら席につき、てらいのない笑顔を僕に向けた。

「まさか京に一番登校の記録を破られるとは思わなかった」

「一番登校って……」

聞き慣れない単語で言葉を濁した僕に注釈が加えられる。

「誰よりも早く登校するって記録だよ」

ちらりと黒板の上にかけられた時計を見るとまだ7時30分にもなっていない。8時30分までの登校が義務付けられているので、一時間以上余裕がある。

「いつもこんなに早く登校してんの？」

「空手やってた頃の習慣が抜けなくてよ」

少し懐かしむような声で裕貴は言った。

裕貴は中学の頃、全国大会に出るほどの空手家だったが、今年の春先高校生になったことをきっかけとし、すっぱりとやめていた。そうとうな実力者だったらしく、惜しむ声が多く寄せられたが本人は一向に聞く耳を持たず、園芸部に入部すると聞いたときは心底驚いたものだ。

「そういう京は今日どうしたんだ？」

なんの未練も感じさせない瞳を僕にむけ、鞆から取り出したペンケースを机にしまいながら聞いてきた。

「僕は、ほら、部活動」

机上の古豪のような風格を漂わせるビデオカメラを顎で示す。

「まだやってんのか。学校映してなにが楽しいんだか」

「案外ハマるよ。知られなかった新しい部分ってのが判るし」

「もう廃部決定したんだろ」

その問いに僕は無言で頷いた。

先輩から引き継いできた部活を無くすのは悔しかったが、それも一つの運命だ。映画研究部も含めて、文化系の活動はあまり表立つことがなく、公式大会もない部活では泰礼祭だけが活動をアピール出来る唯一の場だったのだ。

「もう手詰まりなのか？」

「今から部員集め開始しても無理だろうし、すっぱり諦めるさ」  
クラブ存続に必要なのは最低部員数三名と、活動実績だ。

その2つを今度の泰礼祭に賭けていた映画研究部は、中止が決定した時点で詰みに等しかった。

「だから名前だけでも貸してやるって言ってんのによ。そうすりやまだなんとか」

「いや、いいよ。裕貴が入ってくれても、残り一名、あと1ヶ月じや、ね。それに活動実績もどうしようもないし」

「二人で行動すりゃ、1ヶ月でなんとかなるって。お前も無くしたくないんだろ」

「そりゃあね」

「だったら！」

興奮して立ち上がった裕貴は冷静になったのかゆっくりと椅子に戻った。

「……いや、悪い」

「ありがと、まあ、ダメ元で頑張ってみるよ」

「おお、そうだな」

悩ましの表情だったのをくしゃりと破顔し、話を変えるように裕貴は続けた。

「それで、今日はどんなところ撮ってきたんだ？」

「B棟の廊下と、あと屋上」

僕の回答に鳩が豆鉄砲を食らったように、きよとなった。

「屋上？」

「うん。立入禁止だけどさ、どうしても朝焼けがほしくて」

「でもあそこって鍵かかってなかったか？」

重たいながらもすなりと開いた鉄製のドアを思い出す。

「いや、別に施錠はされてなかったよ」

「あ、今はガラスのカバーか」

「カバー？」

「非常時は外して開けるようになってた気が。まさか京、取って上がったのか？あれ一度とったら戻せないだろ」

そういったものは別についてなく、普通の扉と同じだった気がする。そう伝えたと裕貴は、「んー。気のせいだったかな」と語尾を間延びさせ頼杖ついて考えはじめた。

ドアノブにカバーがつけられていたならば、屋上にいた女の子が外して上がったということになる。

そうまでして合唱コンの練習をするものか、と思えば別にそんなことないだろう。

彼女が使った「自殺志願者」という言葉を思い出す。あれはもしかして自分がそうだから用いた単語なのではないだろうか。

そう思った途端、背筋にゾクリと悪寒が走った。

泰礼祭が中止になったのは三年の男子生徒が自殺したからだ。彼が死んで約1ヶ月、お祭り騒ぎで浮かれるのは早すぎるというわけで、延期ではなく中止、学校側は自粛するカタチをとったのだ。ここまででは、まあ適切な処置だと思う。

それでももし自殺が連鎖しようものなら、高校全てのイベントがな

くなってしまうかもしれない。

「ねえ、裕貴。今交換留学生って来てる？」

「なんだよ藪から棒に」

日本語はかなり上手かったが、あの容姿で純粋な日本人というこ  
とはないだろう。流暢な日本語を話す大人びた口調の少女だった。

彼女をもう一度思い出そうとモニタージュしてみる。

ふわふわと腰まで伸びた金色の髪、青い瞳、陶磁器のような白い  
肌。小学生くらいの身長だったが、高校生であれだけちんちくりん  
ならば、彼女の成長期は完成してしまっているに違いない。目測と  
して140センチ後半。

「アメリカから何人か、あとカナダとか、から……」

「金髪の女の子っていない？」

「男なら何人かいた気がするが、女子でブロンドは……。あ、さて  
はお前、『坂井珠希』のこと言ってるな。あいつは留学生じゃなく  
て一般生徒だぞ」

「さかいたまき？」

聞いたこともない名前に首を傾げる。

「あれ、違ったか。んじゃ、誰だろ」

「いや、多分その人だよ。ちょっと詳しく聞かせてくれない」

「ああ？ いきなりどうした？ 詳しくもなにも坂井珠希だったら相当  
な有名人だろうが」

確かにあれだけ特徴的な人物ならそれなりの知名度があるだろう。

「金髪碧眼の女の子だろ？ 十和森始まって以来の美少女って言われ  
てる特進コースの」

「美、って……」

心で思うのと口に出すのではだいぶ違う。まさか裕貴の口からそ  
んなB級映画のキャッチコピーみたいな言葉が飛び出すとは思わな  
かった。

僕が返事が出来ずにいると、「違ったか？」と尋ねるように裕貴  
は片眉をつり上げた。

「た、多分その人だよ。でも特進コースだなんて凄いね」

特進コースとは今年からできた、偏差値の高い大学を目指す生徒や入学試験で高成績を収めた生徒を集め編成した特別進学クラスのことである。ただ漠然と進学クラスに所属する僕にしてみれば目標を持って努力している人たちだ。

仰々しい名前に恥じず模試ではそれなりの結果がでているから凄い。

「まさか京、色めき立ってるんじゃないよな？」

「そんなわけないだろ。たまたま見かけて気になったただけだよ」

「ならいいけどさ。正直言う悪いが、坂井珠希相手じゃ全く釣り合わないぜ」

「だから別に恋愛感情なんて持ってないってば」

裕貴は少しだけイタズラな笑みを浮かべながら僕から視線をそらして、シワがよっていた靴下を引っ張り上げるためか、座ったままの体勢で前屈みになった。

そのままの姿勢で続ける。

「坂井珠希のやつ、入学式の総代でもあったんだぜ。知ってるか？ あれって試験トップ通過のやつがやるんだ」

「僕らの代の新入生挨拶はメガネの人じゃなかった？」

特進クラスが設置されたのは今年からなので、僕と彼女は同じ一年生ということになる。

自分の代の入学式くらい出席したが、金髪の少女が壇上に上がったという記憶はない。かなりおぼろげだが、どこかのクラスの女子が答辞を述べていたはずだ。名前も顔も記憶の彼方だが。

「坂井が一躍有名になったのはその入学式をブッチしたからなんだ。急遽お鉢が回った代役がその人。それでも見事こなしてみせたから立派だよな」

「初っ端からそんな大役をサボったのか」

「おお。謝罪もなしに、次の日ケロッと登校してきたらしいぜ。そんなことやっのけたヤツの面を拝んでみたらアレだろ。すげー話

題になってたよ。女子からは嫌われてたけど」

アレ、というのは羨望を含んだ良い意味での容姿を表しているだろう。数分の邂逅だったがたしかに人間では追いつけない悪魔的魅力を放っていたような気がする。

「しかもその後しばらく坂井のやつ学校を休んだんだよ。今でも半ば引きこもりらしくて、期末テストとかは保健室で受けてクラスに顔出すことはめったにないらしいぜ」

線が細いから病弱、っていうわけではなさそうだった。義務教育でない高校でそんな待遇が許されるものかと疑問に思ったが、出席点はそれこそ高成績で免除されているのだろうか。

「そんなこんなで一組では、謎の女生徒としてクラス中で噂されてる、ってわけ。男子からの人気も結構高いらしいしな」

裕貴の言う通りなら重度の年下趣味が蔓延っていることになるが、たまに登校する女生徒が彼女なら、物珍しさも伴った好奇心からの興味なのだろう。

「しかし制度が坂井珠希に対して甘くない？保健室登校児なんてこの学校にもいたんだ」

いくら成績がよくっても引きこもりが単位を取得できるほど十和森高校の進級率は甘くない。

まず出席点の問題から始まり、必修教科の単位取得、実技教科の採点、学校行事。問題は山積みだ。テストを保健室で受けるようでは、これらをクリアできるとは到底思えなかった。

いくら頭が良くても来年にはいなくなっているんじゃないだろうか。

「それが理事長の推薦で入学したから多少の無理でも押し通るんだって」

「漫画とかだと権力を笠に学校を裏から牛耳ったりするけど、平和なもんだね」

「全国模試で常に上位だし、問題起こさないで引きこもってくれてんだから有り難いもんだろ」

「引きこもりは充分問題でしょ。イジメでも受けてるんじゃないの」  
「さあね。あったとしても、関係ないだろ。他クラスだし」  
「それもそうだ」

裕貴の言う通り。僕と彼女の双曲線は直接交わることない漸近線であり、限りなく近づこうが、それは所詮同じ学校の生徒という繋がりで、運命にはなんの変化も起きやしない。

可愛い女の子とお近付きになりたいのは男子高校生のサガとはいえ、情報収集などというストーリーカー紛いの行為をするのは人として秩序に欠けるだろう。

「京は部活をどうにかすることだけを考えろって」

「善処するよ」

それでも、坂井珠希が自殺を考えて実行に移しでもしたら、僕は一生自責の念を抱えて生きていかなくてはならないのだろうか？  
それは勘弁してほしい。

そんな邪な思いもあったからか、授業がすべて終わった放課後、部活がある裕貴と別れた僕は再び屋上に来ていた。

1日に2度破った校則を気に病むことなく、夕暮れ時の屋上からの景色を堪能するが、その夕日の中に彼女の姿はなかった。

確認するまでもなくわかっていたことだ。……というか僕は彼女に会ってなにがしたかったのだろうか？

早まるのはよせ、とドラマの中のワンシーンでも演じようとしていたのだろうか？ 自分でも意味がわからない。

それでも坂井珠希に会ってもう一度話をしてみたかった。

繰り返される日常に訪れた出会いという変化に縋るほど僕は耄碌しているわけじゃないが、

……この言い表せない感情はなんなんだ。ただの正義感でも、ましては恋慕ではないはずだ。なんとなく沸き上がれる違和感。

「はあ」

いつまでもここにいるって仕方ない。再びここを訪れたのは、理由

なきただの散歩だ。僕はゆっくり元来た道を戻りはじめた。

その途中、

「ん」

視界の片隅に、コンクリートの灰色とは違った彩りがあるのを捉えた。腰をかがめて確認してみる。

水色のハンカチだった。貯水タンクの下、風雨から逃れられるところにある。

自販機の下に落とした小銭を拾うみたいに手を伸ばし、拾いあげる。

坂井珠希のものだろうか。

仮にそうでなくても、職員室に届けるだけだ。

ともかく今は、映画研究部を行うことにしよう。



### 3..誘拐ラジカル

担当教師に許可を貰い図書室の撮影を終えたのは、日はすでに落ち、外はぼんやりとした薄暗闇に包まれている時刻だった。

鼻を優しく刺激する本の香りに別れを告げ、本日の撮影データをパソコンに移し終えた僕は、やることもなくなったのでそのまま学校を後にした。耳にイヤホンを差し込み歩きます。流れるのは一昔前の洋楽アルバムだ。別に洋楽至上主義というわけではないが、秋の物悲しさにこのアルバムはベストセレクトだと思う。

図書室では一般生徒を写さないよう人気がないコーナーばかり撮ることになったが、それでも納得のいく撮影にはなった。

自習室はもちろん、資料室まで撮らせてもらったのはでかい。貸し出しカウンターに座っている図書委員の人たちが協力的だったおかげで撮影は順調に進んだ。

上機嫌な帰り道を、夕方という段階をすっ飛ばしたかのような皎々と輝く月が照らしてくれていた。

秋の日は釣瓶落としとはよく言ったものである。校舎はすでに夜の帳に包まれていた。

明日は休日で活動できないが、休み明けは体育館の撮影でもしよるか。そう今後の方針を決定した時だ。

今通っている道が例の三年の先輩が首を吊った、森の横にある空き地が続いているルートでもあることを思い出した。

一学期中は普通に使っていた道だが、日が落ち暗闇に包まれているこの状況下でそこを通るのは勇気がいる行為だ。

霊魂なんて信じていないが、人が死んだ横を抜けるのはあまり気が進まない。

それでも今更道を変える気にはならなかった。

彼がいなくなっても、地方ニュースにちらりと取り上げたくらいで、全国区でみればよくあることなのか話題にも上がらなかった。

人間死んでも小さな墓を一つ得て終わりだ。

気にせず歩みを進める。流れる曲からの外的な勇気を貰っているようだった。

件の空き地に着いたのはそれからすぐだった。

光が届いていない地面は黒いインクでもこぼしたみたいに真っ黒だった。その空き地を覆い隠すようなビロードが、先輩が首を吊った森である。

まだ夕方とも取れる時刻なので、恐怖を感じるほど心細くはないが、あと数時間もすれば、辺りは完全に無人となるだろう。そうなれば今あるこの余裕もどうなるかわからない。

僕が現段階で言えるのは、こんなところを死に場所を選びたくはない、それだけである。

自殺した先輩には悪いが、なぜこんな不気味な場所を終焉の場を選んだのか、考えを疑うところだ。

あまり気にしていても意味はないので、そのまま足早にその場をあとにしようとした僕は、背の高い草の向こうに誰かいるのを視界の隅に捉えた。

暗くて見にくいので、はっきりとしないが、女性のようなだ。僕と同じ高校の制服を着た、女生徒。一瞬坂井珠希の顔を浮かんだが、薄暗闇の中に佇む女性は日本人の標準的な黒髪だった。

あんなところでなにをしているんだろう。

僕の疑問はすぐに氷解した。辛うじてわかったのだが、彼女の手に小さいながらも花束らしきものが握られていたからだ。

ああ、お供えしてるのか。

謎が解けると同時、ウダウダ考えていた自分がひどく矮小な存在に思えた。

気にもせず見てみぬふりで道を抜ける僕より、亡くなった彼を弔う彼女の方が数段も立派だ。

自分を恥ずかしく思いながらも僕にできるのはやっぱり足を早めること、だけだった。

夕闇の中を半ば駆け抜けるように帰宅した僕を夕飯の心地よい香りが出迎えてくれた。感謝しつつそれを食べ、風呂にはいる。

いつもならリビングでくだらないバラエティー番組でも見ながら笑う時間帯、僕は息を吐いてから、パソコンの電源をいれた。学校のはあくまでバックアップ用なので、ソフトを入れてある家のパソコンでしか動画編集はできないのだ。今日1日分のデータと今まで撮り溜めといった動画を合わせ、作業を開始する。いるシーンいらないシーンの添削、公開する順番、音声データの編集など、ただ撮るだけでは作品は完成しない。人を引きつけるものにしなくては。

だが、

一つ、不安に思っていることがあった。

誰にも見せず、自己満足だけのこの作品に、生きる価値はあるのだろうか。

今つくっているものは、本当に見る人の興味をひくものになっているのか。

わからなかった。

それから作業を中断するまで三時間近くはパソコンとにらめっこしていただろうか。時計を見れば時刻はすでに床につく時間を迎えていたが、明日は休みなので今日は徹夜で作業すると決めているのだ。

背もたれに寄りかかり大きく伸びをする。知らず知らずの内に「ん〜」と声が漏れていたが、誰も聞いていないので恥じる必要はなかった。

ここらで休憩にしよう。

僕は寝ている家族を起こさぬよう、そっとキッチンに向かった。腹はすいていないが、喉が乾いたので水を飲むことにした。

コップに水を注ぎ、それを飲み干す。浄水機のおかげでおいしいみずとなったただの水道水は僕のHPを50ほど回復してくれた、

ような気がする。

そろそろ戻ろう。

そう思い再びディスプレイの前に座ろうとしたが、ここまで三時間、ぶっ通しで作業してきたのだからもう少しくらい休んでもいいんじゃないかと思いはじめた。

時計の針は、外出には気が引ける時刻を示していたが、爽やかな秋の夜風はさぞかし心地よいだろう。

深夜徘徊は趣味ではないが、思ってから早かった。

ポケットに携帯だけいれ、玄関から秋の虫鳴く夜道にスニーカーで飛び出す。端から見たら用もないのに外出する変な人だが、あくまで気分転換のただの散歩だ。

夜の空気はシンとしていて、風が優しくにそよいでいた。

なんだか上機嫌になって、スキップでもしたくなったが、さすがに節操がなくなるので止めといた。その代わりに夕暮れ時に聞いていた一昔前の流行歌のサビの部分を鼻歌で延々とリピート再生する。僕は見知った街の見知らぬ景色を楽しみながら、独りきりの世界を堪能し、目的地のない気ままな散歩を続ける。強いていうならブラブラするのが目的といったところか。

そよそよと優しくにそよぐ心地よい涼風は、僕のムードを盛り上げるのに十分な活躍をしてくれた。

そろそろ家に戻ろう。

と散歩の終わりを考えだした頃だ。

日付が今日と明日で揺れる、わずかな時間帯。次の日は休みだというのに学校近くまで来ていた僕の視線の先には、暗闇の中、その存在をアピールする広い空き地があった。

夕刻、何かを手向けていた見知らぬ女生徒の横顔を思い出す。その時感じた自分の器の小ささ。僕は静かに深夜の散歩で高潮する気分を鎮めた。

不思議と恐怖は感じなかった。

夜中に人が死んだ場所に来るなんて思いもよらなかったが、手を合わせるくらい、同じ高校に通うものとして、やるべきだろう。

仕切りを乗り越え、女生徒がいた位置に歩みを進めた。

そこは空き地というより、グラウンドに近かった。手入れされてなく、草はぼうぼうだが、中央部は踏み固められしつかりとした地面になっている。小学生だかが遊び場になっているからだろう。

奥の方は森と表記した方が正しいであろう、鬱蒼と茂ったジャングルが広がっており、男子生徒が首を吊ったのはその木の内の一本だそう。

とりあえず、森へ通じる入り口についた僕は、地面をざっと見渡してみた。

手を合わせるにしても、彼がどこで死んだのかわからなければどうしようもないからだ。木についたロープ跡でも見つられば話は早い。

……これはゲスな好奇心だろうか。

僕が心の中で、頭をかいた瞬間だった。

短いリズムの足音が背後に響き、

それに反応して振り向くより先に、

「ちえすとおお！」

首の付け根に衝撃が走った。深夜に不釣り合いな示現流の雄叫びが鼓膜と脳を揺らす。何者かが、僕の首筋を強打したらしい。

飛びかけた意識でそれを理解するのは、デコボコとした固い地面に転がってからだった。

「見つけたわ！」

「えっ、は、な」

なにが起こった！？なんで僕は地面に倒れてるんだ！？

急所への衝撃でチカチカする視線を必死に巡らせる。

そういえばさっき車が通る音がしたが、もしかしてこの人が乗ってきたのだろうか。ぎりぎりまで足音をたてぬよう接近して、この誰かは僕を叩きつけたのだ。

「コソコソしたって、あたしには全てお見通しよ」

空き地は完全な闇に包まれている。

それゆえ自殺する場所には打ってつけだったのかもしれないが、今の僕にはそれが災いした。

暗すぎて、いきなり現れたソイツの姿がよくわからないのだ。

「覚悟なさい！」

謎の人物が僕に第2撃を加えようと大きく飛び上がったのが、なんとかわかった。

「うわっ」

踏んづけるのが目的と言わんばかりの蹴りが、転がって移動する前の位置に炸裂した。

通り魔。

脳裏にその言葉がブワリと浮ぶ。こんな深夜の時間帯に、いきなり襲いかかるようなヤツをそう呼ぶのは間違いないだろ。

首から受けた痛みはぐわんぐわんと頭蓋骨に移動して、気分を最悪にしているが、今はそんなのに構っている場合ではない。必死に立ち上がる。足まで神経が繋がっているかわからなくなったが、僕の両脚は脳からの命令通り、走り出していた。

「逃げる気っ!？」

背後でやや甲高い通り魔犯の声が響いた。

なにを言われようが、僕にとっての優先事項はこの場からの撤退だ。

初撃から朦朧とする脳みそで、市内の地図を思い描く。このまま交番まで走れるだろうか、と自身に問いかけた瞬間、立ち眩みに似た暗転が僕を襲い足がもつれてしまった。

「くらえっ」

速度が落ちた僕に容赦ない跳び蹴りが浴びせられる。なにぶん背後のことなので想像するしかないのだが、この痛みはモノをぶつけたものではないだろう。

「うわっ」

衝撃で情けない悲鳴をあげながら受け身も取れずにぶっ飛ぶ。

よりにもよってぬかるみの上に倒れこんだ僕は、怒涛という二文字がお似合いに走ってくるソイツの姿を視界に補足した。

中心には届いていなかった道路脇の街灯が認めたくない事実を照らしだしていた。

女だった。身長がべらぼうに高い、茶髪の。就活中なのか知らないがスーツ姿で、肩までの髪を揺らしながら、僕を睨みつけている。なんとなく声質でわかっていたが、仮にも男の僕が女性から暴力を受けているなんて、信じたくなかった。

殺さんとする目つきのまま、彼女は僕に走りよる。

得体の知れない女性からの恐怖が沸き起こるより先に手元の土を掴んで、ソイツの顔面めがけて投げつけた。

「っう」

小さな悲鳴があがったのを確認し、逃げ出そうと立ち上がる。

「ちえいッ」

気合いの声が鼓膜を刺激した。土くらいじゃ足止めにもならなかったらしい。

通り魔は背の高い草を掻き分けようとしていた僕に追いつき、勢いそのまま後ろから羽交い締めになると、強く地面に叩き伏せた。視界の端で白い光がチカチカ弾ける。泥だらけだ。

「見苦しい抵抗ね……、でもまっ、ようやく犯人確保ってところかしら」

息を切らせながら、彼女は僕の背中に回された手にガチャリと手錠のようなものをかけた。

「えっ、は、なんで」

手首は完全に固定され動かせない。ようなもの、じゃない。手錠だ。

なんでそんなえげつないもん持ってたんだこの人。

「いっ、いきなりなにするんだ」

「うるさい。大人しくしなさい」

「こんな状況でできるわけがないだろ！」

「わんわん吠えないで。続きは後でゆっーくり聞いてあげるから」  
「つう」

言うやいなやグイッと手錠を引っ張り僕を無理やり立たせると、小突いて歩けと命令してきた。

文句を言うとドスの効いた罵声と共に頭をはたかれるので、大人しくするしかない。

こんな夜遅い時間に失踪した僕を家族は気づいてくれるのだろうか。

まさかこの歳で誘拐されるとは。

僕の頭は自らの置かれた状況をできるだけ楽観的に考えることで、なんとか自我を保っていた。



#### 4..車中ネゴシエーション

歩かされた先にあったのは、どこにでもある普通の四輪駆動車だった。道路脇に違法駐車された赤いセダン。僕が来た時にはなかったのに、絶望的なこの状況におあつらえ向きな移動ツールだ。

その車の所有者の通り魔は僕を無理やり後部座席に押し込むと運転席に座り、キーを回した。

ETCカードが挿入されていないという機械音声を無視し、エンジンが静かな振動を伝え、車は前に滑るように走り出す。

必死に状況の改善を試みて、運転席の、通り魔から誘拐犯にクラスチェンジした茶髪の女性に話かけてみるが、どれだけ言葉を吐いても返ってくるのは同じ「お黙りなさい」だったので、諦めて辞世の句でも考えようとした時だった。

「先生、やりましたわ！」

誘拐犯の女は道路交通法なんて関係ないと言わんばかりに、ハンドル片手に携帯を耳に押し当てて、どっかの誰かと通話しはじめた。最悪だ。

「千歳のお手柄です！」

いちおう誘拐事件を起こしているのだから被害者である僕のことを少しは考慮してもらいたいものである。

「勘弁してくれ……」

前方に座る彼女に聞こえないように口内だけで呟いた。

実行犯が計画犯に連絡をとっている光景なんて、めったに見れるもんじゃないにしろ、被害者が自分自身に置き換えられるだけでここまで心が挫かれるだなんて。

「先生、ですから捕まえたんですよ！ええ、ええ。そうです、犯人は現場に戻ってくるんです」

市街地から広い道に入り速度が乗ってきたのに合わせるように、

彼女の声はだんだんと興奮ぎみに大きくなっていった。手錠されているので、聞きたくなくても耳を塞ぐこともできず、狭い車内を反射しまくった声が鼓膜に届く。

「深夜の現場に一人の男。確定的じゃないですか」

「どうやら僕の話をしているらしい。」

ため息をつく。こんなことなら大人しくベッドでまどろんでればよかった。

『~~~~ッ!!』

電話の向こうの声が漏れて、その残響が聞こえた。どうやら向こうの人が通り魔を怒鳴りつけたらしい。

「ええ!? そんなっ」

『~~~~ッ!~~~~!!』

勢いは収まらない、車内に響くエンジン音と同じくらいの音量で、電話向こうの人は怒鳴り続けている。

電話口から、その声が漏れるたびに、運転席の誘拐犯は、取引先に謝罪するサラリーマンみたいに、「すみません」と、ぺこぺこと謝った。その力関係に、ざまあみろ、と心の中で唱えるより、先ほどの気丈な態度が消え果てているのが妙におかしく感じた。

もっともこれからの自分の未知数な未来に対する憂鬱を考えれば、少しも笑える状況ではないのだけれど。

「はい、はい、わかりました。きちんとそのように致しますわ。それでは失礼します」

ピッ、効果音をつけるならそんな感じで通話を終了した誘拐犯は、携帯を助手席にぱいと放り、バックミラーでちらりとこちらを見てから、安全運転を心がけたのか、すぐに真っ正面を向いた。

いくら深夜で人通りが皆無とはいえ、事故を起こされちゃ誘拐されてる側からもたまったもんじゃない。いや、待てよ、上手くいけば、事故に乗じて脱出できるんじゃないか……。

「勘違い、いえ、早とちりしてしまったみたいね」

「はい?」

赤信号で停車した。誰もいない横断歩道がオレンジ色の街頭に照らされて、妖しげな雰囲気を出している。

ハンドルを握る誘拐犯は僕の方を振り向きもしないで、じっと正面を見据えたままだ。

「あなた、名前はなんていうの？」

車内に凜とした声が響く。敵を誉めるようだが、彼女の声は舞台役者のように高く、とても聞き取りやすいものだった。

無言になった僕に、苛立ちを隠そうとしない語調で彼女は続けた。

「名前を知られると何かマズいことでもあるのかしら？」

「えっと、長山、京です」

「ながやま、けい。ふうん」

勢いに押されて名乗ってしまった本名を、誘拐犯は独り言を呟くみたいにしてから鼻をならし、目を細めた。

偽名はバレた時が怖かったから止めといたが、本名を知られるのはそれはそれで怖い。ニックネームでも教えとけばよかった。

「あ、あなたは」

「あたし？」

答えてくれるわけないってわかっていたけど、一応マナーとして、同じ質問を投げかけてみる。冗談でその場を誤魔化したいという思いも混じった、なんだか歪な心理戦だ。

「鳥山千歳よ。よろしくね」

「と、……へっ？」

エンジンが唸りをあげた。どうやら誘拐犯、改め鳥山千歳がアクセルを踏んだらしい。

一瞬なにが起こったのかわからなかったが、なんてことはない、信号が青に変わった、……じゃなくて、なんでこの人そんなにあっさり名乗ったんだ？

混乱で目を丸くする僕をミラー越しに見てから不敵な笑みを浮かべる鳥山千歳は呟いた。

「最初に言っておくわ。これからあたしは謝罪します」

「はい？」

「昔から誤解されがちなんだけど、あたしが謝ってるって言ったら、それは謝罪なんだから理解してよね」

「な、何を言ってる……？」

街頭がカーウィンドウを透過して、車内をぼんやり照らしてくれている。

前から後ろに線になって流れていく光を体で感じながらも、僕は誘拐された我が身がこれから、どのように転がっていくのかまったく予想出来ずにいた。

「間違えた。ドーモ、スミマセンでした」

言葉を無理やり覚えさせられた九官鳥を彷彿とさせる喋り方で、彼女の短い謝罪は終了した。

あとはもう黙って、ハンドルを握るだけである。

「え、な、間違えたって……、どういうこと、ですか？」

彼女は隠していたテストが親に見つかった子供のように、気まずそうに「誤解してたの」と舌をペロリとだした。

「もう解けたんですよね？」

「……そういうこと」

初めから妙だとは思っていたが、やはり勘違いからボロボロにされ誘拐まがいの目に合わされていたらしい。

非常に腹立たしいことだが、今の僕には、感動で涙してしまいそうになるほど良いニュースだった。最悪怪しい外国船に乗せられてしまうのではないかと勘ぐっていたのだから、当たり前前だ。

「じゃあ、家に帰してください。よくわからないけど、そちらさんの勘違いだったんでしょ？」

後ろ手に留められた手錠のせいでろくな身動きがとれないから、怒りに任せて拳を振るうこともできない。最も両の手が自由だったとしても運転中の女性を殴れないだろうが。

「……」

彼女は僕の声が届いているかもわからない無反応だった。

「話きてくれてます？早くおろして下さい。ここでいいですから」  
車内には絶えることなくエンジン稼働音が響いているが、まだギリギリわかる場所だ。

ウチまで送り届けろとまでは言わない、だからさっさと僕を自由にして欲しかった。

「それは出来ないわ」

鳥山千歳が口を開いた。

「あなたをそんな目に合わせたのはこちらの過失だけど、こっちにも都合というものがあるの」

「知りませんよ。そんなこと」

そんな目、とはよく言ったものだ。良い意味で使う言葉ではないだろう。それがわかっててまだ僕を振り回そうというのだから、この人なかなか図太い神経している。

「あなたを今自由にしたら、警察に行くでしょ？」

「……」

そりゃあ。

鳥山の言葉を否定する気はなかった。散々な目に合わされたのだ、出るところ出てもらわなきゃ納得できない。

嫌なら示談金払え、と脅せば、素直にお金をくれるんだろうか。

「だから、解放できない。悪いんだけど今しばらくそのままでお願ひするわ」

「いや、誰にも言いませんって。警察にも知り合いにも。もう勘弁してください」

不服だが、約束は守ろう。今の状況の改善が最優先事項だ。この想いを言葉に乗せ、鳥山千歳に届けなくては。

「もう暴力は振るわないと誓うわ。ただあたしが真にあなたを信用できるようにするまでその手錠をはずすことはできない」

「……」

ふざけんなよ、と言葉に出来ないのが悔しくてたまらない。

世の中おかしくなり過ぎている。なにが変だって、誤解が解けて

絶対的立場が逆転しているハズなのに、彼女のその高慢な態度は初めからなにも変わっていないことだ。

謝罪する気ないだろ……、流れゆく景色とともにそう思った。

「それで僕をどこに連れてこうとしてるんですか？」

解放する気を微塵も見せない鳥山千歳に根気よく話かけていれば、ネゴシエーターよろしく、説得できるのだろうか。

冷静に考えたら、車内で女性と二人きりなんて、思春期少年なら両手を挙げて飛び込むようなシチュエーションだけど、ここまでロマンの欠片もない雰囲気だと一層清々しい。

「先生のところよ」

目をこすりながら、彼女は返事をしてくれた。

「先生、って……、さっきの電話先の人ですか」

「な、なんでわかったの!？」

「いや、電話してる時に言ってたから」

ああ、この人、バカなんだ。初対面で失礼かもしれないけど、バカだから後先考えずに誘拐なんて決行したんだろう。

「そ、そうだったわね」

暗い車内でもわかるくらい彼女は頬を紅くした。

不覚にも可愛いと思ってしまったカノジョいない歴イコール年齢の僕はもう末期だ。

冷静に観察してみると、ハンドルを握る鳥山千歳は、背がべらぼうに高かったが（チビの僕との身長差を差し引きしてもだ）、その体系にあったすっきりとした小顔で、線引き上では美人の部類の人だった。ただ先ほど加えられた暴力と、顔に付着した土で、僕の好感度はゼロを突き抜けマイナスである。

「なんでその先生とやらに会わなきゃならないんです？」

鳥山千歳は少しの間、唇をとがらせてなにやら考えていたが、信号で車が止まると同時に、返事をしてくれた。

「先生なら、あなたを説得できるはずだから」

「説得？」

嫌な予感がした。

「そんなことされなくても誰にも言わないですって」

「信用できないわね。だから先生に頼るの。命令でもあるし」

「意味わかんない。命令ってなんですか」

「その深夜徘徊の怪しいやつを連れてこいって」

深夜徘徊については、概ね間違っていないけど、怪しいやつに関しては、それはそちらさんの事でしょう、と声高になる自信があった。

「そんなんこっちからしたらクソ食えです。大体間違ってたのはそっちなんだから、僕の意見を優先してくださいよ」

「それはできないわね。確かにあなたには酷いことしたと思ってるけど、先生が連れてこいって言ったんだから、あたしはそれに従うだけよ」

「そこがおかしいんです、僕を殴って拉致してんのは鳥山さんなんだから、これは僕とあなたの問題でしょう。なんでそこに先生とかいうわけわからない第三者を介入させんですか」

「わけわからない人ではないわ。先生よ。あたしが尊敬している唯一絶対の人」

くらくらししてきた。

なんだ、この人、

埒があかない。狂信的というかなんとか、危険人物なのは確かだ。

ひょっとして、

先ほど感じた嫌な予感が明確なカタチをもって僕に訪れる。

この人が言う【先生】っていうのは、宗教でいう教主にあたるんじゃないか。

だとしたら、僕を説得できると言ったのは、そのカルト教団に入信させるという意。鳥山がここまで狂信的なのも納得がいく。

「せ、先生って、なんなんですか？」

日常に戻るためには立ち止まって地獄をみるわけにはいかない。  
今はどうにかして情報を集め、覚悟を固めなくては。

「先生は、あたしが困っていた時に助けてくれた恩人よ。その恩に報いるため一生ついていくと決めたの。今は足手まといだけど、絶対に」

「……」

決意を込めた瞳をバックミラー越しに見ながら、僕は自分の最悪の予想が的中したことを悟り、無言になって覚悟を固めた。

過失があるのは鳥山側なんだから、弱気なってはならない。自分を信じなくては。



## 5…突発タオルケット

「着いた」

鳥山千歳はエンジンを切り、後部座席に座る僕にそう言った。

ここまでの道筋を脳にインプットしようと思窓の外を眺めていたが、夜になって道が暗くなっているためうまくいかず、なんとなくの方角に辺りをつけられただけだった。

先に降りた彼女は、車をぐるりと回りこみ、ご丁寧にも後部座席のドアを開けて、僕に降りるように促した。VIP待遇みたいだが、手錠をはずしてさえくれれば、自分で出来るのに。

不満混じりに彼女を睨みつけながらも命令に従い、数分ぶりの秋の夜風を全身にあびる。道路を挟んだ向かい側の自動販売機の灯りが、駐車スペース先の建物をぼんやり照らしてくれていた。

「さ、中に入って」

「冗談でしょ？」

二階建てのアパートがあった。荒れ放題の敷地にツタが這う壁、まるつきり廃墟だ。

「なにが冗談になるのよ。さっさと歩きなさい」

言うやいなや頭を軽く叩かれる。さっき暴力は振るわないって言うてたのに、もう破りやがった。

舌打ちを抑え、錆び付いて嫌な音をたてる階段に足をかけ、彼女の指示に従い二階の一番端のドアをくぐった。

目が痛くなるような蛍光灯の白い光の先には、予想外の連続で疲弊した僕の精神を久方ぶりに安堵させてくれる光景が広がっていた。本がびっしり詰まったドデカイ本棚、応接用のソファは2つあり、そこは個人宅というより、事務所という表現の方がしっくり来るだろう、寂れた外観からお化け屋敷をイメージしていた僕の精神

を落ち着かせてくれるには充分だった。内部は小さいながらもきちんとまとまっている。

「先生ただいま戻りました！」

鳥山千歳は声を上げ、僕を押しつけるよう土足のまま地面に倒れこんだ。

突拍子の無さ過ぎるその行動で混乱極める僕を疎み上がらせるような大声で彼女はさらに続けた。

「申し訳ございませんでした！」

あ、これ土下座か。

理解するのに数秒を要したが、亀みたいな格好で謝罪の声を上げるそれを土下座とみて間違いなさそうだった。

ただ疑問なのは、頭を下げた彼女の先には革製のソファーしかない、その上には青いタオルケットがかけられた置物と（なぜ置いてあるのかは謎だ）、机に筆立てとメモ帳があるだけで、この部屋には僕と彼女しか存在していなかった。

鳥山千歳は誰に謝っているのだろう。不格好ながらもこれだけ誠意ある土下座の相手が僕なら、今までの事を水に流してやらんでもないのに、

とそう思った矢先、

「なんでもいいから、さっさとココアをいれてこい」

僕ら以外の第三者の声が室内に響いた。驚いてその不機嫌そうな声の主を探そうと周囲を見渡すが、誰もいない。

「はい！今すぐに！」

声に促されるまま鳥山は嬉々として立ち上がり、僕などすでに忘却のかなたといった様子でたった今入って来た玄関扉を開け出て行った。

僕を置いてどこに行くんだ、と文句を言いそびれたままポケットと突っ立っていると隣の部屋のドアが閉まる音が耳に届いた。

まさか鳥山千歳は隣でココアとやらを作る気なのか？よくよく考えてみるとこの部屋にはガスコンロがない。二部屋借りているんだ

ろうか。それなら一室を応接間のようにしているのにも納得ができる。

「お前もいつまで立っている。座ったらどうだ。靴は脱がなくていい」

先ほど鳥山千歳にココアを入れるように命令したのと同じ声が発せられた。

「え、あ、はあ」

声はすれども姿が見えず、タタキに棒立ちしていた僕は、謎の人物に従うがまま、ソファァーに軽く腰を下ろした。

「……なにがしたい？」

「はい？」

隣で囁かれているくらい、さっきよりも近くで声が出た。首をひねって横を見てみる。タオルケットをすっぽりかぶった何かが置いてあるだけだ。

まさか――

「座れと言われて隣に腰を下ろすバカがどこにいる。普通そっちに座るだろ」

「……失礼しました」

このタオルケットの下、人がいる。

僕は驚きを冷静さで塗りつぶし、言われるがまま、向かい合うかたちに座りなおした。

「さて」

僕が腰を下ろしたのをどうやって確認したのか知らないが、タオルケットの人物は話題を変える接頭を用い、ピクリもしないまま話を始めていた。

「千歳が先走ってしまったことをまず謝罪しよう。どうせあいつのことだからロクに謝っていないのだろ」

「そうですね。何回も頭はたかれました」

「思いたつとなにより先に手が出てしまうらしい。見た目に似合わない結構強いから救えないな」

「もういいんで家に帰してくれませんか？眠くて……」

タオルケットで姿を覆い隠すという非常識な格好をしているので、警戒していたが、思ったより話を通じる人らしい。

胡散臭さ漂ってはいるが、暴力的ではなさそうだったし。

「そうだな。お前の言う通り時間もないことだし本題に入ろう」

一区切りつけるようにしてから、タオルケットは続けた。

「怒っているか？」

「深夜の散歩中に拉致されて、穏やかでいられるわけありませんよ」愚痴るように、鳥山から受けた非人道的扱いを報告する。文字通り先生にチクるようだが、あくまで事実である。

「散歩？私は人死が出た蛇籠森にお前がいたと聞いたが……」

蛇籠森って、ああ、あの空き地の先にある鬱蒼とした森のことか。そんな名前だったのか。

「散歩ついでに軽く手を合わせようと思ったんです。同じ学校なんでもんで」

「ふむ。それではこの件を誰かに言いふらそうと考えている？」

「黙っとけというなら口外する気はありません。面倒事は苦手ですから」

ソファアに座るタオルケットは特に反応を見せないまま、淡々とした口調で言った。

「信用できないな。いかにも囁きそうな雰囲気だ」

鳥山千歳にも似たような事を言われたのを思い出した。その時彼女は『先生なら説得できる』と言って、僕の拉致を続行したんだっ

た。

「そんなに言うんだったら正直言います。いい加減にしてくれないと警察呼ぶぞ、ってのが本音です」

「たしかに暴行拉致は言い逃れできない」

監禁も追加しといってくれ。

「しかしこちらにも事情がある。お前が今日の出来事を言いふらさうものなら私は決して容赦はしない」

声音が急に引き締まった。その声は決意表明みたいだが、気落とすより、対抗するように背筋が伸びた。

「なぜ？」

「目立ちたくないからだ。お前が噂の元になるといふのなら、今の内に口を開けないようにする」

「脅迫、ですか？」

「脅迫ではない、命令だ。間違いを犯したのは私たちだが、間違われるような状況にいたのはお前だ」

「身勝手な言い分ですね。それじゃ僕も悪いみたいだ」

「みたい、ではない。深夜徘徊する怪しい人物が事を犯す前に検挙したのなら、千歳の行為は善になるだろう」

さすがに我慢ができなくなった。それじゃ悪は僕だったのか？ふつつと怒りの炎が灯りはじめる。

「いい加減にしろよ。なんなんださつきから。あんたの言い方じゃ夜歩くことが罪みたいじゃないか」

「そこまでは言っていない。ただそういう考え方もあるからから千歳を一方的に責めるのはやめてやれ、と言いたいんだ」

弟子思いなのか過保護なのか知らないが、巻き込まれた僕にしてみればいい迷惑だ。

「もうなんでも、さっさと家に帰してくればそれでいいです。今日あったことは、墓まで持っていきます。それで満足ですか？」

挑発的にそう言うと、呆れたようなため息をしてから返された。

「落ち着け。私は口先だけの約束を強要したわけではない。命令とはいったが、信頼の上でのお願いだと考えてくれ」

今までの言い方でよく言えたものだ。舌先が怒りの戯れ言を吐こうと動くより先に、タオルケットは続けた。

「だから私はお前と友情関係を結ぼうと思っているのだよ。友情に勝る信頼はないからな」

人より沸点が低いと言われる僕の堪忍袋はとっくの昔に千切れ飛んでいた。

「信頼？信頼と言ったんですか？この状況で？手錠がはめられた状態で顔を隠した変な人と信頼なんて結べるわけがないじゃないですか」

「むっ。手錠をかけられているのか」

今はじめて気が付いたように声をあげた。僕が来る前からずっとタオルケツトをかぶっていたのだから気づいてなくて当然といえば当然である。

「ちとっ！早くこい、ちとっ！」

「は？」

タオルケツトが叫んだ。その呼びかけに応じるように、すぐに玄関扉から鳥山千歳が「はい！お呼びですか」と返事をしながら飛び出してきた。どうやらこのアパートの壁はそんなに厚くないらしく、簡単に隣の彼女を呼べるらしい。

「こいつの手錠をといてやれ」

タオルケツトはもぞもぞ動いて僕を指差したようだ。

「あらまだしてたの？」

鳥山はムカつく一言を言いながら命令通り手錠をとぎ、僕の手を自由にしてくれた。

「それでは引き続きココアを作れ。ホットミルクを使えよ」

「わかってますわ。おまかせあれ！」

僕の両手を自由にした手錠とその鍵をポケットにしまうと機嫌よさそうに颯爽と去っていった。なんなんだこの人も。

「これで不満なく会話が出来るな」

ドアが閉まる音と同時に、タオルケツトはそう呟いた。

「手錠をといてくれたのは感謝しますけど、顔は隠したままなんですわ」

「気にするな。それで私の言うことを聞いてくれるのか？」

「さっきからそうするって言ってるじゃないですか」

「その物分かりのよさが胡散臭いのだ」

言うに事欠いて胡散臭いとは、その言葉そっくりそのまま返して

やろう。

「もう少し抵抗してくれないと張り合いがない。散々な目に合わされたというのに、なぜそこまで落ち着きはらっていられるのか、逆に疑問だな」

「じゃあ、ここで理性を振り切って暴れろとでも言うんですか？あなたの言う通りこっちは怒髪天なんだ。さっさと自由にしてくれないと、お望み通りジタバタしますよ」

「わかった。どうやら考えすぎていたらしい。信用することにする」待ちに待った言葉が聞けて胸を撫で下ろす。信用するイコール解放する、とさっき言っていたから、これで何時も通りの日常に帰ることができる。

一時間弱の非日常だったが、もう一生ごめんだ。

「今日あったことは口外するなよ」

その問いに無言で頷く。

理不尽な要求だが、女性にボコボコにされた経験なんて誰に命令されなくても話したくなんかない。裕貴に口を滑らせようものなら「そいつに代わって折檻じゃ」とか便乗でまた殴られそうだし。

「返事をしろ。なんだ、貴様。口止め料でも欲しいのか」

安心しすぎてこの人が目隠し状態だということを忘れていた。そうだ、首肯というジェスチャーだけじゃ伝わりっこないんだ。

僕が慌てて返事をしようと口を開くより先にタオルケットからニユッと腕が伸びて、机の上からボールペンとメモ紙をとって戻っていった。

突飛な行動に呆氣にとられる。

「な、なにを」

「お前の要求を叶えてやる。どうせ猿みたいなことしか考えていないのдар。千歳には悪いがあいつが撒いた種だ」

また腕が僕に向かって伸びてきた。手には先ほど取っていたメモがつままれている。なんだかよくわからなかったが、素直に受けとった。

知らないチラシでも裂いて作ったらしいそのメモには先ほどのボールペンでメールアドレスらしいものが綴られていた。『chit o. toriyama@……』単純な記号の羅列は、どうやら鳥山千歳のメルアドらしい。

ひとまずポケットにしまつて怒鳴りつける。

「なんですかこれ」

「千歳のメールアドレスだ」

「そんなのわかってますよ。なんでいきなり渡すんですか!？」

「なぜって、君が男子中学生の夏休み如く性欲を持て余してそうな声音だから、19歳のピチピチギャルのメルアドを口止め料として支払ったのだよ」

比喩が理解出来なかったがバカにされているのだけはわかった。

その一言だけで保ってきた理性はいとも簡単に崩れた。

「ふざけるな!」

怒声と共にタオルケットに手を伸ばし、一気に剥ぎ取る。

「ふわっ!」

なんとも珍妙な声をあげ、中からソファアーの上で体育座りした金髪の少女があらわれた。



## 6..秋夜リベラル

タオルケットを剥ぎ取った先にいたのは、屋上で会った金髪の同級生、坂井珠希だった。

今は、制服ではなく花柄のパジャマを着込んでいたが、それでもハッキリ彼女だとわかる。

同じ十和森高校に通う仲間でも、接点なんてない薄い繋がりだ。今日（日付では昨日だが）はじめて会話した少女との再会がここまですくなるとは思わなかったが、どこことなく予見していたのか、僕の精神は自分でも驚くくらい落ち着いていた。

「う、は、ひ」

「屋上でチョコ食べてた人だ」

朝のことなので忘れてはいないと思うが、いちおう確認がてら呟いてみる。

そんな僕の言葉が届いているのかわからない、おどおどと蚊の鳴くような調子で、「か、かえせ」

とタオルケットを取り戻そうと手を伸ばしてきた。思わず手を高くし取られぬようにする。

「う、な」

僕の予想外の抵抗で、先ほどの偉そうな態度は消え去り、そこには見た目通りの幼い女の子がいるだけだった。

「なぜ、い、いじわるをする」

「なんでだろ。なんとなく？」

「つうー」

困惑を通り過ぎたのか、ぷるぷると震えだした。極度の人見知りか、と一瞬思ったが、朝あったときも先ほどと同じ毅然とした態度だったからそれは違うのだろう。

なににせよ目の前でほっぺを薔薇色に染め膝を抱えている幼さ残

る少女は、僕の一抔の嗜虐心を煽るには充分だった。やってることは小学生するのイタズラに等しく、欲しい物に手が届かなくしているだけだ。

「先生、ココアお待たせしましたあ」

マグカップをお盆に乗せて鳥山千歳が玄関扉を開け戻ってきた。後ろ手でドアをパタンと閉めてから、僕ら二人を見やった彼女は、何が起きているのか理解できていないのだろう、きょとんと動きを止めて棒立ちになった。

坂井珠希はそんな彼女を天の助けとばかりに、僕の右手に堂々と掲げられたタオルケットをうらめしそうに睨みつけて「うーうー」と威嚇しながら指差した。

「先生！ああ、なんていうこと」

「ちとっ、た、たのむ」

「ええ、お任せあれ」

坂井珠希のツーなお願いをカーと聞き届けたらしい鳥山は、お盆をテーブルの上に置いてから、僕に向かって初対面の時の勢いさながら猛ダッシュしてきた。

「返しなさい！」

「うわっ」

反射的にマタドールのようにひらりとかわす。

まっすぐ伸ばされ彼女の右手は、僕にかわされても勢いが落ちることなく後ろの本棚に一撃を叩きこんだ。

「痛っ」

突き指みたいになったのだろう、鳥山は露骨に顔をしかめ指を庇うように左手で包みこんだ。

「……大丈夫ですか？」

間抜けめ、という心の声を押しとどめて、雀の涙ほどの罪悪感で心配した僕に、

「うげっ」

鳥山千歳から与えられたのは、鳩尾へのケンカキックだった。

「一体どうしたんだ。あの程度の動きを見切れないなんてお前らしくもない」

タオルケットを無事取り返し、すっぱりかぶることで偉そうな口調に戻った坂井珠希は、まだ半分涙目の暴力女に尋ねた。

「申し訳ございません。先ほど土を投げつけられて、……落としたんですけど、いまいち照準があわなかったんですわ」

怒りを含んだまじりで睨みつけられても、僕がとった行動は全て自衛手段だ。

「ふむそうか。やはり風紀委員は低俗な人間ではないか」

「風紀委員って……。僕のこと覚えてるんだね」

「あんな不審人物忘れるか。早朝校舎の徘徊の次は、深夜の散歩……、一回スクールカウンセラーのところに行ったらどうだ？」

「それは僕のセリフだからね。君だって、なんでそんなに顔を隠したがるのさ」

僕の問いに、ソファ一横に立っていた鳥山千歳が一瞬何かを言いかけたが、すぐに躊躇ったようにうつむき、腰をかがめて本棚から落ちた本を拾って元に戻した。

質問を浴びせられたタオルケットの方は、息をゆっくりと吸ってから言葉をはいた。

「私が顔を隠してお前に不都合でもあるのか？」

「僕にはないけど君にはあるんじゃないかな。例えば相手の警戒心を無駄に煽ったり、とか」

「一理あるな。しかし事情というものがある。私自身がいうのも何だが」

「でも今朝は普通に話したじゃないか。それに人見知りだからってタオルケットをすっぱりかぶるってのは違うんじゃない？」

僕の指摘に彼女は一瞬、なにかを考えるように無言になってから、小さくため息をつき続けた。

「……あの時はチョコレートがあったから」

「チョコ？」

そういえば、朝はポケットから取り出したチョコレートを頬張ってたな。

「幸せの糖分で構築されたチョコは私に勇気を与えてくれる。不条理な世界に残された、たった一つの煌めく希望だ」

「チョコ食べれば他人と顔を突き合わせて話ができるようになるっての？」

「その通り」

世の中変わった人がいるもんだ。

「だったら僕が来る前に食べとけば、」

「夜食べたら太るだろ」

至極真つ当な返答に、納得しかけたが、机の隅で湯気を上げているマグカップがその答えを否定していた。

「ココアはいいのかよ」

「私に甘い砂糖菓子の夢を見せてくれる戦友を無芸大食の君が罵倒するなんて許される行為ではないね」

「もうなにがなんだかわからない」

「陳腐な脳みそで物を考えるのは誉められたことではない。大人しく流転する世を眺めるに留めてろ」

顔を隠すだけでここまで饒舌になる人なんて初めて見た。僕としてはもう一度タオルケットを剥ぎ取ってやりたいところだけど、彼女のすぐ側で待機する暴力女が怖いし、

「ただの引きこもりに言われたくないけどね」

口でやられたらこちらでも口で、だ。言われっぱなしは悔しいから言いかえしてやった。

僕の嫌みにタオルケットの少女は何かを考えこむように息づいた。「引きこもり、だと……。風紀委員、まさかとは思うがお前は私が誰か知っているのか」

「坂井珠希さんでしょ。1年生の」

「う……」

凶星らしく、彼女の動きが石の下で冬眠するトカゲのように沈静化した。

「なんであなたが先生のことを知っているのよ。さてはストーカーってやつね」

ずっと黙っていた鳥山が、無言になった坂井珠希に代わって声をあげた。

「ここに拉致してきたのはあなたでしょうが。それに彼女、うちの高校じゃわりと有名人なんですよ」

「うう…」

ソファーの上の少女が再び唸る。

落ち込んでいるのか、表情が伺いしれなくても彼女の発する気丈な雰囲気ですでに萎えているのがわかった。

「嫌なの？別に悪い意味で目立ってるわけじゃないんだからいいじゃん」

励ますように声をかける。なんだか僕がイジメているみたいで気分が悪かったからだ。

「お前たちが勝手な解釈で個人を持ち上げて喜んでいるだけではないか。他人の視線がおどましい私にしてみれば、どんな褒め言葉を吐かれようと目立つのは好ましくない」

「対人恐怖症？」

「視線恐怖症といった方が近いかもしれないな。誰にしても面と向かって話すのは苦手だね。いまだに気兼ねなく話せるのは千歳くらいだ」

「チョコレート食べれば大丈夫なんだろう？」

「そんなにバクバク食べられるか。それにあくまでチョコレートは心の癒し。依存しすぎでは効果は薄れてしまいそうだ」

まあ確かに不健康だし、糖分の過剰摂取より精神科に行くほうが何倍もマシに思える。それこそスクールカウンセラーの出番だ。少なくとも僕の出る幕ではない。

「私の話はいい。それより問題はお前だ、風紀委員」

「僕の名前は長山京です」

「風紀委員、わかってるな？」

「……んー、」

話が妙に弾んでしまったが、時刻はすでに0時を回っている。高校生がよくも知らない他人といつまでもいられる時間じゃない。

「人にはそれぞれ事情があるもんだね」

肩をかるくすくめる。眠気がマックスに近かった。

「それじゃ僕はそろそろ帰らせてもらっていいかな。今日のことは胸にしまっておくから」

「む」

返事代わりの小さな唸りに、ちょっとしたイタズラ心が疼いた。

「坂井さんも学校に来なよ。僕たち友達だろ」

当然ながら心にもない、嫌味である。裕貴から得た坂井珠希は引きこもりという情報と、彼女がさっき使った僕と友情関係を結びたいたという発言を鼻で笑う喩えである。

僕の言葉に当事者でもない鳥山千歳は面くらったようにきょとんとしていたが、隣のタオルケットはどうなのだろうか。当然ながら表情は伺い知れない。

「そ、それは、……そうだな。私たちは友達だからな」

悔しそうに絞り出すような声で返事をされた。

「先生、それ本気ですか？」

「仕方がないのだ、千歳。我々の弾みを口外させないためには、誰かが犠牲になればならぬのだよ」

「老いたわしや、先生。それは全てこの千歳の責任、あたしが犠牲になりますわ！」

「いいのだ。下賤の者とはいえ、同じ学び舎を持つ同級生、私はどの道逃れられないのだから」

「先生……」

感動的なシーンに水を注す気はないが、その人はメルアドを餌みにたいに渡してくれたよ、と鳥山千歳に言ってやりたかった。なんに

せよ、もう、付き合ってられない。

「もういいですか？眠いんで帰りたいんですけど」

「あ、送ってくわ」

「ご親切にどうも」

大根役者の三文芝居は終わったらしく、鳥山千歳は今までのお詫びからかそう提案してくれた。正直真っ暗な中を歩くのは気が進まなかったので助かる。……というか当然の義務だ。

「それではな風紀委員」

部屋を出ていこうとする僕にタオルケットからお別れの言葉が紡がれる。

「念の為言っておくが自分で命を断つなんてバカな真似はするなよ」

「はぁ？」

「……」

突拍子もない発言に足を止めた僕の反応を伺うように無言になっていた彼女は、数秒、間を置いてから言葉が続けた。

「いやなんでもない。学園生活をエンジョイしてくれ」

その発言で、今朝僕が彼女を自殺志願者ではないかと疑っていたことを思いだしたが、これだけ人生楽しそうなら単純に勘違いだったのだろう。

「応援どうも。君も合唱コン頑張ってね」

「合唱コン？あ、ああ。そうだったな」

尋ね返すように彼女は少しだけ言葉を濁らせた。自分で言っていたことを忘れていたらしい。

その怪しすぎる対応に先ほど否定したばかりの疑惑が、湧き上がる炭酸水の気泡のように勢いよく再浮上してきた。

いや、まさか、だろ。

おそらく合唱コンは嘘だ。なら彼女はなぜそんな言い訳を用いた？決まっている、屋上にいる理由をもっともらしくするためだ。ならばなぜ彼女は朝、屋上にいたのか。

裕貴との会話中に感じた違和感が火種となって、気づけば僕の口

からは質問が飛び出していた。

「そういえば君はなぜ屋上に上がったの？」

「朝に言っただろう。合唱コンクールの練習だって」

「ほんとかよ。君のパートは？」

「……ソプラノ、だが」

「課題曲はなに？」

「……」

黙りになった彼女に、僕は静かに疑念を確信のものにしていた。

合唱コンに熱心に打ち込む生徒が課題曲がわからないはずがない。

「なんなんだ、お前。私にしつこく質問を浴びせてなにがしたい」

先ほどの無言をごまかすように語気を荒げた彼女に、ゆっくり呼吸を落ち着かせてから、言った。

「君が、ほんとうは君のほうが、……自殺したがつているんじゃないのか？」



## 7..拡張サムネイル

静まりかえった室内に、秋の虫の鳴き声だけが響いていた。

すっぽりと覆いかぶさったタオルケットは彼女の呼気に合わせ上下するだけだ。

「あなたなにを言ってるの？」

「僕は坂井珠希に訊いてるんだ」

ソファアの横で、棒立ちしていた鳥山千歳は呆れたように肩をすくめた。

「私が、か？」

やがてタオルケットからくぐもった声が囁くように発せられた。

「私が……」

言っている意味が理解できていないのか、それともドンピシャだから反応が鈍っているのか。どちらにせよここで言及しないわけにはいかない。

「死にたがっているのは、君の方なんじゃないの」

「なにを考えそう思うのだ？」

「あきらかに嘘をついているじゃないか。それに『自殺』というワードをやけに多用するから」

言葉が意味をなし、元の彼女の口調に戻るのにそう時間はかからなかった。

「私の言葉が偽りだと言うのか？」

「少なくとも合唱コンには参加しないだろ。人の視線が嫌いで、休みがちの生徒が今になって精力的に行事に取り組むとは思えないしね。もう一度訊くよ。コンクールで君は何を歌うんだい？」

「ふっ」

質問には答えず、ただ鼻で笑う。

「それで私の方が自殺志願者だど？」

「もっともらしい理由をつけて屋上にいたんだ。疑惑が固まるには

不足ない要素だろ」

「なるほど」

納得の声を上げてから数秒、彼女は小刻みに肩を揺らし、笑いという二酸化炭素を吹き出す音をもらした。

「ふ、はっはっ、は！」

「!？」

「あははははははは！」

「え、大笑い？」

タオルケットが邪魔で表情はわからないが、けっこう大きく笑われているのは確かだった。

「言うに事かいて私が自殺志願者？はは、笑えない冗談じゃないか」  
「充分笑ってるじゃん……」

「いや、すまん。少しはしゃぎすぎたみたいだ。お前の言い分、もつともだが、私には生きてやり遂げなくてはならないことがある。それゆえまだ死ぬわけにはいかないのだよ」

饒舌になった彼女にどう言葉をかけてよいのか思案していた僕に、坂井珠希は心底おかしそうに言葉を震わせながら続けた。

「この場でそれを発表する気はないが、風紀委員、お前なかなかユニークだな」

誉められているのかバカにされているのか、と聞かれたら間違はなく後者だろう。

「座れ」

「はあ？」

「私がなぜ屋上にいたのか知りたいんだろ？教えてあげるよ」

「あ、いや、べつに」

もう、わけがわからなかった。

「ちとつ、チョコレートを」

「……仕方ありませんわね。はい」

どう動けばよいのか戸惑っている僕の眼前では、これまたよくわからない主従関係が発動している。さっきまでの帰れる雰囲気は微

塵も感じられなかった。

命令を受けた鳥山は手早く棚からキャンデー状に包装されたチョコレートとタオルケットの隙間に差しこんだ。朝に食べていたものだ。

よく溶けないな、とどうでもいいことに思考を埋没させていた僕にそれを食べて一息ついた彼女は声をかけてきた。

「なにを呆けている？」

「僕は、帰りたいなあ、なんてこと考えてみちゃったりもして」

「お前にも関係ない話ではない。ただ膝をかかえて日々を無碍に食い潰すより、よっぽど有意義な話をしてやる」

「……話が終わったら僕は家に帰るから」

「勝手にしろ。お前に桎梏を強いるほど私は傲慢な存在ではない」  
「どうだか。」

口には出さずそう思ったが、ひとまず彼女の話を聞いてみることにした。ここは秩序保たれる法治国家だ。僕にはまだ自由を享受する権利がある。

いざとなったら、暴力を公使してでも帰宅してやる。相手が二人だろうと男子の僕のほうが腕力では上のはずだ（と信じたい）。自分には言い聞かせながら、再びソファアに腰をおろす。

「さて」

ばさ、っと自らタオルケットを払いのけ、再び姿を現わした金髪の少女は、説明通りチョコレートと摩訶不思議な力で人見知りの症状を緩和したらしく、ソファアの上に立ち上がりふんぞり返りながら、見下すように僕を指差し居丈高に言い放った。

「これからお前にはいささか無縁かつ密接な話をする」

「はあ？どっちだよ」

「その結果がどうなるかはわからないが、愚鈍な選択をとらないことを祈ろう」

「そりゃどうも」

「それと一つ言っておく」

まだあるのかよ。

演説よろしくソファアの上に素足で仁王立ちしている少女は、元の背丈が児童と大差ないので、どんなに偉そうにされても空回りしているみたいで滑稽だった。それゆえわけのわからない話を聞かされていても子どもの戯言と聞き流すことができたのかもしれない。

「お前と私なら私のほうが生物ピラミッドでは上位だからな」

「……あ、そう」

ふん、と可愛らしく鼻を鳴らされても、そんなガキっぽいことを同じ年が言うとは思えず、マセた少女の世迷い言にしか捉えられない。

「それでいいよ」

「む、うむ」

僕があっさりその提案を飲んだのが意外だったのか、キョトンとした表情のまま、

「わかればよろしい」

と半ば崩れ落ちるようにソファアに腰をおろした。今の発言のためだけに立ち上がったのだとしたら、僕は呆れるくらいしかやることがない。

眠気が迫った目頭を軽く指で押さえ、息を深くついた。

「む、なんだ、その私をバカにするような態度は」

「いやいや、気のせいだよ。そんなことより話を進めてよ。まさかと思うけど、今の序列をのたまうだけに僕を呼び止めたわけじゃないだろ」

「もちろん違う」

彼女は端的にそう言うと、テーブルの端に置かれ寂しく湯気をたてていたマグカップをとろうと真っ直ぐ腕を伸ばした。が、届いていない。

傍らの鳥山千歳が彼女に代わってマグカップを引き寄せた。あんなはそれでいいのか。

「私が屋上にいた理由だが、お前の推測通りアレは真っ赤な嘘だ」

「やっぱり」

「合唱コンクールなんてイベント、誰が望んで参加するか」

マグカップを両手で包み込み、ココアに口をつけながら、よくわからない愚痴をこぼされた。

「合唱コンクールに対する考え方を僕に訊かせるのが君の作戦？」

「話を元に戻そう。ともかく私が屋上に上っているのには別の理由があるのだ」

「理由？」

猫舌なのか、一生懸命にココアに息を吹きかける子どもっぽい仕草と、大人っぽい口調を同時進行されては、僕の中の違和感を増大させるだけだ。

「自殺志願者を探しているのだよ」

「は？」

自殺、志願者？なんでもまた、そのワードが。

ずずっ、とお茶をすすめるように音をたて、マグカップに口をつける。うまそうに喉を鳴らしてから彼女は続けた。

「屋上は立ち入り禁止だが、扉には鍵がかかっていない。お前も知っているだろ」

自殺したがっているのは坂井珠希、とさっきまで疑っていたのだ。いきなりそんなこと言われてもどんな反応していいのかわからない。「前まではキチンと施錠されていたのだが、鍵が紛失したことにより屋上のドアノブには非常錠というガラス製のカバーがつけられる事になったんだ。サムターンと呼ばれるつまみ状の鍵を勝手にひねられないようにするための、緊急時は割って扉を開けるようにできる部品だ」

「鍵が紛失って……」

「なくなった鍵はドア本体のものだ。合鍵で施錠してはいたが、不安が残るため、非常錠を取り付けることで封鎖を決定したんだ。」

もともと厳しく立ち入りを禁止していたわけじゃないが、持ち出し禁止の鍵を誰かが持っている以上仕方がないことなのかもしれない」サムターンが学生が適当にいじられないようつけられていたのが、裕貴も言っていたガラス製のカバーか。しかし、それは……

「だが、いまは何者かの手によって取り外されている。この意味がわかるか？」

「まさかそれで誰かが飛び降り自殺をしようと考えていると判断したわけ？いくらなんでも早計じゃないかな」

「無論、それだけではない」

口元についたココアを舌尖でなまめかしく拭って、……ペコちゃんにしか見えない。

「自殺した男子生徒を知ってるか？」

「三年生の？」

「そうだ」

ここにきて彼が話題に上がるのは予想外だった。

「面識がなかったから、よく知らないや」

「まあいいだろ。彼の名前はシバサキヨウタという」

シバサキ……、聞き覚えはなかった。

「亡くなったのは先月、9月中旬の深夜」

同じ十和森高校に通うものだが、生きてきた16年で一度も関わることのなかった名前。

その三年生の名がなぜここにきて話題にあがったのか、まったく想像がつかなかった。

「彼の死には不自然な点がある」

彼女は抑揚もなく機械のようにそう言い放った。

ドラマなどのフィクションではよく聞く話でも現実世界ではそうはない。いくら僕が自殺についてろくに知らない一般人だろうとそれくらいはわきまえているつもりだ。

「偽装して、……誰かが彼を手にかけた、ってこと？まさかだろ」

「飛躍させるな。少なくとも偽装絞殺は行ったところですね露見

する。鬱血の状態や絞死特有の死体に現れる索痕などはごまかしようがない。何より死体を担いで首吊り状態にさせるのはなかなかの重労働だ。彼がわざわざ縄を首にかけたスタイルで殺されてやらない限り、殺人というのはまずありえない。抵抗した跡もない、九分九厘自殺だろう」

マグカップをトンと机に置いてから彼女は小さくため息をついた。「だが、奇妙な状況だったのは確かだ。その部分だけをピックアップして、千歳はなにを勘違いしたか、犯人がいる！と勇んで勘違いした結果、こんなんだが」

「……」

「猪突猛進なやつだ」

鳥山千歳を流し目で睨みつけてやると、反省なんて微塵も感じられない澄まし顔で「ごめんなさいね」と謝られた。どうやら誤解はここから生じたらしい。

「でも、彼が自殺だってわかってるんだったらなんの問題もないじゃないか。不自然な点ってなにさ」

今まで話に茶々をいれることなく黙ってきたが、彼女の説明の中にはそんなものは存在していなかった。

「彼は花粉症だったんだ」

「は？」

「ブタクサ花粉症」

聞いたことはあった。スギやヒノキなど春とは違う秋の花粉症。脈絡もなく告げられた答え。だからどうしたという話だ。

「ブタクサは7月から10月まで花粉を飛ばす風媒花だ。彼は花粉アレルギー持ちだった」

「話が全く見えないんだけど」

ここに来て生前のアレルギー持ちとかどうでもいい情報を教えられても、僕はどんな反応をするのが正解なのか検討もつかない。

「彼が首を吊った蛇籠森の周辺はオオブタクサの群生地になっているんだ」

「確かに空き地には背の高い草がいっぱい生えてたけどあれがブタクサだったんだ」

「……鈍いな、もっと端的に言ってやる。もしお前が花粉症だったら、わざわざ原因物質の側に寄るか？」

「あっ」

「いくら夜とはいえ死に場所を選ぶなんて不自然極まりないだろ。

彼の遺留品にはご丁寧なことにマスクと目薬が出てきたんだ」

「そんなバカな。偶然じゃないの？ 下調べを忘れてたとか」

「もちろんその可能性もある。だが私の直感めいたものが、生前の彼に怒声を浴びせようとしているのだよ。わざとだろ、とな」

不自然といえそうだが、別段気にするようなレベルではないように思える。

ではなぜ、坂井珠希はシバサキヨウタの死に関心をもっているのか。そして、本題はシバサキヨウタ以外の自殺志願者だ。そんな人がいるかは定かではないが。



## 8..交渉アウトサイダー

夜は一層深まっていく。季節は本格的な秋を迎え、茂みでは虫たちがコンサートを開いているし、窓を開ければ仄かに金木犀の香りが漂うことだろう。

僕が肌でそれらを感じられたのはひとえにこの場の静寂による。どういうわけか、坂井珠希はいきなり口を閉ざして黙りになったのだ。

立て板に水とまではいかなかったが、そこそこ動いていた彼女の舌が静止して約十秒、さすがにおかしいと判断したのか、鳥山千歳が、首をひねりながら彼女に尋ねた。

「先生、いかがなさいました？」

「わたしはもう、限界だ」

さっきまでの凜とした態度は、冬場のヒマワリのように萎えていて、どこか弱々しいものに変わっていた。口調も穏やかになって、なんだか見た目どおりの幼さ残る少女になっている。

「は、はやくチョコを……」

「……」

麻薬中毒者を彷彿とさせる振るえる舌で、おやつを求める少女に同学年としての呆れが先行した。

「効果がきれる。ちと、もう少しくらいいいじゃないか」

「ダメです。さっきの一個だって大目にみたのよ。イレギュラーは1日1回、そう決めたじゃないですか」

「うむむ、けち……」

「けちじゃないです。先生の体調管理、その他もろもろを保つためには必要なんですから」

保母さんのような鳥山千歳に、先ごまでの暴力的な面影はまったくといっていいほどなかった。

「もう知らないからな」

「例外は認められません。先生が太るのはあたしも嫌ですもん」

「か、勝手にしろ、ばか」

最後にたどたどしく言い残すと、坂井珠希は再びタオルケツトにくるまり、ピクリともしなくなつた。まるで繭のようだ。

「もうっ、先生」

「私にチョコをよこさなかったのはお前だからな。後のことはぜんぶちとが処理しろよ」

「はあ、わかりましたよ」

口をへの字に鳥山千歳はソファーに座り直すと、隣で丸くなるタオルケツトを尻目に「それでどこまで話たっけ」と僕に質問してきた。

「どうやら存在を忘れられていたわけではなかったらしい、と安堵すると同時に答える。」

「坂井さんが屋上に行くのは自殺志願者を見つけるため、ってことと、それに関連して何故かこないだ首を吊った三年の話」

「ああそうだったわね。うん、それじゃ、もう少し不謹慎な話でもしましょうか。言い方悪くなるかもだけど、軽く聞き流しながら聞いてね」

「随分な言い様だ。今も大概不謹慎だと思うけど」

「そうかしら、事前に断りをいれるだけ親切じゃない。まあいいわ」  
彼女は鼻をスンと鳴らしてから続けた。

「シバサキヨウタの首つり死体を一番最初に発見したのは、あたしなのよ」

「え、ほんとに？」

「嘘つく趣味はない。事実よ」

「それは、……」

僕のゲスな好奇心が再び鎌首をもたげる。詳しく話を伺いたい、と思う自分を叱咤する一方、モラルなんてなくして、自分の興味だけで生きればいい、なんて思ってしまったている。

「死体を見つけたあたしは当然焦った。こればかりは慣れるものじゃないしね」

心中お察しします、と僕は口に出さず思った。

「そして自らを落ち着かせる前に、彼を木から下ろそうとしたの。だけど、首に食い込んだロープはなかなか外せなかった」

「そ、そんなこととして大丈夫なの？現場保全を心がけたほうが」

「ええ、そうね。警察、ないし救急車を呼ぶほうが先決よね。だけど、彼の死に顔は穏やかだったの。よく首つり死体はグロテスクになるって聞くじゃない、だけどシバサキヨウタは違った」

発見時間が短かったからだろうか、当事者ではない僕にはわからない。

「それこそまだ生きてるみたいだね。だから私はなによりも彼を重力から解放させようとしたのよ。パニックになってたから、よく覚えてないけど」

「その姿勢は立派だと思うけど……」

「その後、警察を呼んだわ。彼らは現場につくと色んな処理をして、去っていった。次の日、第一発見者として根掘り葉掘り聞かれたの」

苛立ちを抑えるよう鳥山千歳をこめかみに手をやった。

「そこで、彼の死の不審点を挙げられた。さっき先生が言ってたやつと、彼は制服を着て死んでいたの。休日だったのによ。そこでは直接的ではないにしろ、そういった内容を含めて、あたしを疑っているのがあり感じられたわ」

人命救助を優先した結果、殺人犯に疑われるなんて、報われない。そんな被害にあったのなら、自分に迷惑をかけた真犯人を捜そうと考えるのは、納得はできないが理解はできた。

やりかたは最低だが、客観視してみれば、犯人は現場に戻るという彼女の思考は理にかなっているのかもしれない。

「それで先生に相談したら、警察の人に電話で、なんたらがどーたらで千歳が殺しをするはずがないだろう、って怒鳴りつけてくれたのよ」

「えーと、なにがどうしたって？」

嬉しそうに話をする彼女には悪いが、いまいちなにを言いたいの  
か伝わってこなかった。

僕と鳥山がお互いに見つめあってクエスチョンマークを飛ばしあ  
っている、繭になった坂井珠希がため息まじりに言葉を加えた。

「さっき言ったように偽装絞殺はすぐにわかる。その旨を言葉にし  
て伝えてやっただけだ。もっとも警察側もそれは理解した上でカマ  
をかけていたにすぎないようだが」

「国家権力えげつないな」

「死体が故意に動かされたのだ。縊死の大部分が自殺であることに  
は変わりないが、他の方法で殺害した上、首吊り自殺に偽装する、  
いわゆる偽装縊死も疑わなければならない」

「でも、第一発見者を疑うなんて酷くないか。助けようとしたのに」  
「擁護するわけではないが、立派な対応だったと思うぞ。自殺縊死  
は索溝は一本で連続している、死斑の状況、縄に付着した指紋など、  
逆に自殺と証明してくれた上に、千歳への謝罪の言葉が届いたくら  
いだ。日本の警察はまだまだ捨てたもんじゃないな」

坂井珠希はむふと下品に笑いながら、

「私を子ども扱いしたことは気に食わないが、個人的に、と婦人警  
官から菓子折りを貰ったしな」

「先生、あたしそんなの知りませんよ！」

「すまない、謝罪を正確に伝え忘れてしまっ、」

「そっちらありません。菓子折りのほうです」

「……あ」

タオルケットが鳥山の手によって剥ぎ取られる。

「ひっ」

再びぶるぶると震える金髪の少女があらわれた。

「どーいうことですか」

「た、タオルケットを返せ！」

「先生、目を見て質問に答えてください！菓子折り、なにを受けと

ったんです？」

「……っう」

隠していたテストが見つかった小学生のように目が泳いでいる。

「せんせっ！」

やがてバツが悪そうに坂井珠希は、小さく呟いた。

「……ボンボンチョコレート……」

「はあ」鳥山千歳は深いため息をついてから、

「あとでたっぷり話を聞かせてもらいますからね。それよりいまは説明を先に済ませますから」

彼女はポストと坂井珠希にタオルケットを羽織らせてから再び僕にむきなおった。

どうやら一見クールに見えた坂井珠希は、調子に乗って口を滑らす間拔けな性格だったらしい。

「蛇籠神社へ通じる林道の中間地点、彼の遺体はそこにあった。あたしが説明できるのはこれくらい。あとは先生にお任せするわ」

「私はもう何もしないとさっき、」

「先生」

「わかったよ……」

数秒で弱みを握られた坂井珠希は気だるそうに言葉を紡いだ。

「と、まあ自殺には変わりないが彼の死には不審な点が多々見受けられるわけだ。加えて言うなら、シバサキヨウタは美術部で成績良好、三年ながらも美大に推薦状を出し、その進学はほぼ決まっていた」

「進路での悩みは僕らには理解できないさ」

「突発的に死を想ったのなら、その気持ちを推し量ることはできない。ただ私は死者を冒瀆する気はないし、死は重んじられるべきだと考えている、たとえ自らで命を断ったものだろうと。だからこそ、彼がなにを思ってたなにを伝えたかったのか生きている私たちが知るべきだと思うんだ」

僕にはわからない。

この十数年、のりくらりと生きてきた僕に、死ぬ勇氣（しうよんできいのかも）を持つて  
いるやつの気持ちなんて。

「シバサキヨウタは首を吊った……」

確認するみたいに僕は呟いていた。

その言葉に二人はきょとんしながら、頷く。

「自殺には間違いないんだろ。だったら、遺書とか残されているんじゃないのか」

「ああ、学校の机の中にあつたらしい」

「だったら、もうなにも疑う必要もないんじゃないか」

「B5のレポート用紙には、ただ一言、『お騒がせして申し訳ございません、さようなら』」

聞かなきゃよかった。

なんだそのふざけた文章は。高校三年生のその時期がどれだけ辛いのかはわかる。

厭世観、競争心、劣等感、ストレス、嫉妬。一年の僕も漠然と感じる不安の種、これらが思春期の終わりに爆発し、衝動的に自殺に駆られる、テレビのコメンテーターお得意のプロファイリングだ。

でも僕らは、まちがってもシバサキヨウタにはなれないし、彼の本当の気持ちを推し量ることなんて不可能なのだ。ましてや、分析すべき相手はもうこの世にいないのだから。

「最後に一つ、質問なんだけど」

時計の針も寝てしまったのか、ゆっくりと一秒一秒を音をたてて  
緩慢に刻んでいく。

時刻の進行は僕の家恋しさを募らせる一方、しつこく、言い表せないような陰を与えていた。

「僕に、それを教えて、どうしてほしいの？」

真剣にソファ―に座る二人を睨みつける。視線は怒りによるものではない、この先の未来に対する興味だ。

「やはり風紀委員は愚昧ではないようだな。単刀直入に言う、協力してほしい」

「驚いた」

「その割には冷静だな」

実際、心の中では驚愕が嵐となって激しい奔流を巻き起こしている。

それでも平然としていられたのはこの場の雰囲気によるものかもしれない。

「手伝うって言ったって何すればいいのさ」

「私の目的は、連鎖を防ぐことだ。屋上の死にたがりに会って、話を聞く。その為に必要なのはシバサキヨウタの死の真相だと予想している」

「真相って言ったって、」

「つらつら述べてきた通り彼の死には、なにか特別な理由があるはずなのだ」

特別じゃない自殺なんてあるのだろうか。

「そ、それでもその2つが関係あるなんて、僕には到底思えない。そもそも屋上の自殺志願者だって君の予想だろ。ただドアノブカバーが外されてたってだけで」

「屋上の鍵を紛失させたのは、名義上シバサキヨウタなのだ」

「は？」

先ほどの会話では、元々屋上は施錠されており、その鍵がなくなっただから、ドアノブにカバーがつけられた。今はそれさえも何者かに取り外されている、とのことだった。

僕らの学校では鍵を職員室から持ち出す際、貸し出しリストにクラスと名前を記入しなければならない。そのデータから判明したのだろう。

「ちょっとまで。シバサキが鍵なくしたってわかってたなら、なんで学校は弁償させなかったんだ」

「鍵が持ち出されたのは、彼が死んだ後だからだ」

「えーと、どういうこと？」

「何者かが、彼の名をかたった。学校側は悪質なイタズラとして、

屋上の封鎖を決定した。合鍵による施錠に加えカバーをつけることにしてな」

「ドアの鍵も、非常錠もその後外されたってのか」

「その通りだ。おそらくは、シバサキヨウタをかたる自殺志願者に、学校側もまだ非常錠が外されていることを知らないようだし、このことに気づいたのは私だけのようだ」

「先生に言えればいいじゃん」

「屋上を閉めても、別の所で死なれては元も子もないだろう」

彼女は浅くため息をついた。

「でもどうして何回も屋上に上がるんだろ。その自殺志願者は」

「さあな。ためらいか、もしくは下見。なんにせよ本人にしかわからないよ。さて風紀委員、手伝ってくれるのか？」

彼女並みの洞察力があれば、凡人の能力は必要ないだろう。

「どうして僕なのさ」

「比較優位、適材適所。そして何より」

彼女は言葉を溜め込むようにして続けた。

「学校の人間に接触できるのは、この場では風紀委員しかない」

「あ、そう……」

あんたら部外者とひきこもりだもんな。



## 9..疾走ダイアログ

協力要請は、おいそれと頷くことのできないものだった。

切羽詰まっているようではなさそうだし、何より人の命をアレコレ指図できるほど、僕の人生経験は豊富ではなかったからだ。夭折した先輩の後を追おうと奮起する謎の自殺志願者の意思を砕くなんてこと、妙におこがましく感じてしまう。

「便宜上彼と呼ばせてもらうが」

タオルケットからはみ出した金色の髪が、風もないのにフワフワと揺れていた。

「彼は屋上に上がったただけでまだ迷いを持っている。他人が命をドブに棄てようと、私の知らぬ話だが、止められるうちに看過するな」と寝覚めが悪いじゃないか」

とは、坂井珠希の言い分である。その意見に僕は全面同意だ。結局のところ、人間にとって重要なのは、死に行く誰かではなく、自分自身のこれからののである。

目の前で救えたはずの命が消えていく、死者の念に悩まされるのがいやだから、人は救える者は救おうとするのだ。その証拠に、世界の果てで飢餓で苦しむ人たちのことを、頭でわかっていても、実際に見たわけではないから、絵空事にしか思っていない。

今までの僕は絶望する人々に、愛の手すら与えない、ただのちっぽけな芋虫だった。そんな芋虫に、他人の命を預かる資格なんてないだろう。

だから僕の選んだ選択は、日本人のお家芸、「少し考えさせてくれ」という保留の皮をかぶった、辞退であった。

送迎を申し出てくれた鳥山千歳の好意に甘え、恐怖さえなければそこそこ快適なドライブが自宅を目指して開始された。暗い車内に会話なく、オレンジ色の街灯が、速度に比例して、豪腕選手の

投球のように前から後ろに流れるだけだ。

純粹な睡魔からくるあくびを噛み殺し、薄暗闇の景色をぼんやりと視界に収める。

非日常への切符はここまで。

明日からは、また平和な毎日が待っている。それでいいじゃないか。

「長山京。一つ忠告をしておく」

「……なにを？」

重くなりかけた瞼を押し上げる。ハンドルを握る鳥山千歳が僕の名を呼んだ。

「先生を見捨てたりしたら、あたしはあなたを許さない」

「言ってる意味がわからないんだけど」

「あなたは坂井珠希という存在を知った。それだけのこと、それだけのことだけど、それを無視することは許されない」

ラジオも音楽もない、エンジン音だけの世界に告げられた忠告は、この世の理を表しているかのように僕の鼓膜を深く突き刺した。

「ひょっとして、自殺志願者探しを手伝う手伝わないの話をしてるんですか？」

「それも含めてよ」

「どうするか最終的判断は僕の自由意思だし」

「そうではないの」

キッパリと言い放つとちらりとも僕に視線を寄越さぬまま、彼女はじんわりとアクセルを踏んだ。スピードメーターの針は徐々に上がっていき、80キロ代にさしかかる。お仕事です、白バイ隊員。

「先生が自発的に助けを求めたのは、……あなたが始めてなのよ」

それが、悔しいのか、なんとも形容しがたい震える声で鳥山千歳は僕にそう言った。

「そう、なんだ」

深夜の公道を唸り上げて疾走する自動車は、僕の恐怖を再燃させるには充分だった。

運転手は、ハンドルを握りしめ暗闇の広がる道路を親のカタキのようにジッと見据えている。

「その願いを、断るだけなら、あたしはあなたを縁がなかったただけだと思ひ何もしない」

信号は青続きで、彼女の運転を止めるものは誰もいない。

「だけど、あなたの答えが、あの人を少しでも傷つけようものなら、容赦はしないから」

深夜の爆走は、彼女のイライラをぶちまけるように続いていた。

大台の三桁手前、一般道路で許されざる速度超過。さすがに同乗者のことを考えてほしいと思った僕は自らの存在をアピールするよう口を開いた。

「僕の返事はあくまでも保留です。断るか受けるか、まだ決めたわけじゃない」

僕個人としてはすでに終わった問いかけだが、正式回答はまだなされていない。

「少し考えさせてください。今日はいろいろあって、頭が上手く回らない」

日を置いてからの断りならば、印象も悪くならないだろう。悩んだ結果、手伝えない。僕に必要なのはそういう大義名分だった。

「あたしと先生だけじゃ限界があるから、個人的には手を貸してほしいところだけど」

告白の返事を保留にする女子中学生みたいな態度が気にいらぬのか、少しトゲある口調で彼女は言った。

断るには理由があったほうがいいかもしれない。

「そうですね、もしもの話ですが、これからいっしょにやっていくんだったら最低限僕の疑問には答えてほしいところです」

「なによ」

思いついていたわけじゃない。ただなんとなく考えるより先に、気づけば口からでていた。

「例えば、やけに坂井珠希は自殺した先輩を気にかけているなあ、

と」

「……」

「自殺志願者にしてもそう。言っちゃ悪いが、彼女が他人を必要以上に気にするようなタイプに見えなかった」

数分の会話だったが、彼女を一言で表すなら、観察者。自発的にその能力を使う善人ではないだろう。

「その彼女が、聖人めいたことをする、純粋な理由がわからないんだ」

そんな怪しい人物の誘い、断ったって仕方ないだろ？

語尾にそう括弧を加える。

実際、秘密事を持っているような人と信頼、協力関係を結べるとは思えなかった。

「オフレコよ」

「は？」

鳥山千歳は言いづらそうに、少しだけ言葉を濁しながら僕の質問に答えてくれた。

「先生はシバサキヨウタが死ぬ前に、彼に会っているらしいの」

「え？」

彼女から告げられた質問の答えは、なんともやるせないものだった。

「……知り合い、だった、ということですか？」

「いいえ。ただ図書室で二、三言、言葉を交わしただけらしいわ。ただ、」

息をし辛そうに彼女は、唾を吞んで続けた。

「ただ、その時の彼の様子は確かにおかしかったって」

「……」

「先生は言わなかったけど、絶対後悔してるのよ、彼の自殺を止められなかったことを」

それは、たしかにキツいかもしれない。

手を伸ばし助けを求めているものを救うのが僕たち傍観者の性質

だ。死に行く彼を見送ったという事実は、絡みつく茨のように、彼女を捕らえ離さない。多分、これから先、一生。

鳥山千歳はそれが心底悔しそうにハンドルを強くギュツと握った。速度は、本人の落ち込んだ氣に呼応するように、60から70の狭間で揺れている。それでも出しすぎなのは確かだ。事故を起こしたらどうするつもりなのだろう。

「だから、せめて屋上の自殺志願者は止めようとしているのか」

「はっきりとは言わないけど、多分そう、ね」

そこまで聞いて、僕は坂井珠希の澄んだ碧眼を思い出す。

彼女は屋上で会った人すべてを、観察し、勘ぐり、時には挑発し心情を引き出そうとするのだろうか。

これからの時期、風のあたる屋上はぐんぐん寒くなる。いわゆる見張りのようなことを一人でやるには辛い季節だ。そんな体力的にも精神的にも負担のある責務を、彼女の小さな身体に押し付けることに、良心が痛まないはずがなかった。

僕は軟派とまではいかないが、けっして頑固な性格ではないし、基本的に流されやすい人種なのだ。

「わかった。僕ができることなら協力させてもらっ、」

闇を切り裂く悲鳴めいたブレーキ音がタイヤからあがって、車内は大きく傾いた。シートベルトが抑えつけてくれたおかげで車外に放り出されることはなかったが、強力なGが肺を圧迫し、軽く咳き込む。

見れば赤信号だったらしい。あれだけ速度を無視しておいて、律儀に信号を守るだなんて。

「ほんとっ？」

Oを示すスピードメーターを横目に僕は曖昧に「あ、うん」と頷くのがやっとだった。

家に着いたのは、普段ならとっくに夢の中の時刻で、こんな深夜の帰宅は生まれて初めてのことだった。

鳥山に住所を知られるのは、少しだけいやだったが、そんなことを煩わしく思うほどの疲労が身体の関節をミシミシと軋ませ、僕の構成成分すべてが睡眠を欲していた。

車を降りた僕は、闇に轟くエンジン音を見送ることなく、そつと玄関扉を開けて、自分の部屋のベットに潜り込み、文字通り泥のように深く眠った。

疲れが脳を支配していたのか、夢を視たという記憶はない。

そんなこんなで眠りこけた次の日、昼まで惰眠むさぼる僕に親は親切にもモーニングコール代わりの怒声を浴びせ、用意してある朝食兼昼食を食べるように言った。

皿が片づかない、というどんな顔すればいいのかわからない、吐き出すスイカの種みたいな小言を脳内でオースティンの『人形の夢と目覚め』に変換しながら起床した僕は、寝ぼけ眼のまま、用意されていたスッパゲティを食べることになった。

できるだけ食事に集中し、昨日の非日常的出来事を思い出さないようにする。朝から晩まで、普段の生活を10倍に濃縮したような1日だった。

なんだかんだ言っても、僕はモブとかガヤとか言われる人種であり、面倒事は苦手なのだ。

食欲に眠気が塗り潰されはじめた時だった。

玄関チャイムが不吉を知らせるカラスのように、ピンポーンと鳴り響いた。嫌な予感を感じながらも、フォークをくるくると、パスタを巻き取る。

食事の僕に代わって、母さんが面倒くさそうに足音をたてて玄関に向かった。

なに、心配はない。どうせ宅急便とか新聞勧誘員だろう。

最後に残ったウィナーをすくい上げるようにして口に運んだ僕は完食の余韻に浸り、口まわりのソースをティッシュで拭いながら、お昼のニュースを伝える民間放送を眺めることにした。

母親から、あなたにお客様よ、と呼ばれたのは僕がごちそうさま

と手を合わせて十秒も経たないうちだった。

迸る最悪な気分を表情に出さぬよう、僕は昨日の軽率な判断を下した自分を呪った。

「それじゃ、行くわよ!」

玄関には花咲くような、ほんの半日ほど前に誘拐監禁送迎をやったのけた悪魔の笑顔が、当然のように存在していた。

「行くなって、どこへ……」

母親の「あらまああの子にもあんな美人花嫁候補が」というひどく的外れな視線を背中に浴びながらも、僕は取り繕うように冷静なフリを続けた。

「決まってるじゃない」

偉そうな調子で腰に手を当てたまま、ピンクのカーディガンにプリッツスカートと随分ラフな格好をした、鳥山千歳は、

「調査開始よ!」

その真っ直ぐな瞳を曇らせることなく毅然と言い放った。

## 10..車輪アクセス

いの一番の発言である「調査開始」はなにをどうすればいいのか、方向性が定まっていらないように思える。

彼女には守秘義務でも存在しているのか、僕はただ「ついてきて！」に従って、重いペダルを漕ぐだけだった。

昨日こそ、車をブイブイ言わせていたのに、なんで今日は自転車なのか？その質問にも答えてくれぬまま、彼女の赤い電動チャリを、中学の頃からの愛車であるマウンテンバイクで追いかける。当時は面白がってコロコロ変えていた六段ギアも、いまでは5で固定されていて、それに見合った速度で僕は彼女の背中に追いつがる。

もうそろそろ目的地くらい教えてくれ、と

「どこ行くんですか？」

煩わしい冗長な文句を削ったシンプルなその問いかけに、一馬身先を行く鳥山千歳は一度だけちらりと振り返ってから、鼻を鳴らした。

「シバサキヨウタの家よ」

「……え」

短絡すぎて、いまいち意図がつかめない答えが返ってきたので、「詳細を！」と怒鳴りそうになる。

自殺した先輩の家、ってことだよな。

「な、なんで今更」

「理由は3つあるわ」

風切り音をまったく気にせず、いつもと変わらぬ声量のまま彼女は続けた。

「一つ、自殺志願者はシバサキヨウタになんらかの感情を持っているから」

屋上の鍵の持ち出し欄に、彼の名前を記したことがその結論の裏付けになっている。だけど、ただのブラックジョークだとしたら、



調査は無駄になるのではないか。

「2つ、シバサキヨウタの自殺の不信点について」

今問題なのは屋上の自殺志願者である。その自殺志願者がいるのかも、僕はまだ疑っているのだが。

「最後に一つ！先生が調べてこいと言ったからよ」

これに関しては、バカか、くらいしかコメントが浮かばない。

僕が心の中で悪態をついたのを見透かしたかのように、鳥山千歳は急にブレーキをかけた。僕も慌てて停車する。

「ここのようね」

彼女は取り出したタッチパネル式の携帯端末で位置を確認してから呟いた。

止まるなら事前に合図くらいしてくれ。僕がそう文句を言うより先に、彼女は門についていたチャイムをその長い人差し指で沈めていた。

「あー！」

「うるさいわね、なによ」

ぴーん、というくぐもった音が、空気を微かに震わせた。

表札を見る。自殺した先輩の名字が記されていた。

「なんでなんの迷いもなく押すんですか！？」

「うるさいわねー。遅かれ早かれ押すんだから、ぐだぐだしてても時間の無駄でしょ」

「まだ死んで日が浅い人の家族に、遠慮もなしに『話聞かせてください』って尋ねるつもりなのか！？」

彼女は萎縮した表情を浮かべ、すぐに指を放した。それと同時に、ぽーん、と残りの半分の音が虚しく響く。

見れば、簡素とはいえ立派な一軒家。まわりには似たような家が数軒並んでいる。お昼のワイドショー風にいうと、閑静な住宅街というやつだ。間違い、という一縷の望みをから、何度も確認してみるのが『柴崎』の表札が日の光を反射しているだけだった。

「それは困ったわね。うーん、どうする？」

鳥山千歳は真剣な眼差しで続けた。

「逃げる？」

まさかのピンポンダッシュの誘いに僕は額を軽く抑えた。

「一度退いて、作戦を立て直したほうがいいと思うんだけど」

「とりあえず家主の人が出たら、同級生だったとか言ってごまかしましょう」

「あら、あたしまだ高校生で通るかしら」

ええい、十分通用するから黙っててくれ！

自転車にまたがったままあたふたとする僕らとは対象的に、不気味なくらい辺りは静まり返っていた。

平穏に包まれながら、結局開くことのなかった柴崎邸の黒い玄関扉を見やる。

「留守？」

どうやらそうらしい。冷静に考えたら、休日とはいえ昼間だ。

「まったく驚かせないでよ」

「それはこっちのセリフです……」

息を浅くつきながら鳥山千歳はブロック塀に自転車を寄せるとスタンドをたてて、駐車措置をとった。僕もそれにならう。

「留守なら帰りましょうよ」

肩にバサリとかかっていた髪をかきあげてから、彼女は僕の発言を無視して提案してきた。

「ねえ、やっちゃおう？」

「やるってなにを……」

「この状況だったら決まってるじゃない」

不敵な笑みを浮かべ彼女は続けた。

「侵入よ」

「……は？」

僕は自分の口がだらしなく開いていることに気がつけなかった。

「ふほーしんにゅー」

「ちょ、ちょっと待って下さい！」

「家主は留守、人気は無し。この2つが揃ったらやることは一つでしょ？」

トリップしかけた思考を取り戻し、キラキラと瞳を輝かせる鳥山千歳に、僕は慌てて大声をあげる。

「そんなバカな！」

「ここで帰ったらなにも前に進まないじゃない。折角休日つぶして来たのよ。シバサキヨウタだって笑って許してくれるわ」

「いやいやいや、犯罪だから！やろうとしてることは空き巣と変わりませんよ」

「失礼ね、物盗りじゃないわよ。やだやだ」

そう言いながら門を抜け、敷地に侵入しようとする彼女の手首を僕はほぼ反射で掴んだ。

「見つかったらタダじゃすまないって。家の人だっていつ帰ってくるかわからないし」

「リスクを恐れるだけじゃ人の成長は望めないわね」

「だああーもう」

掴んでいた手首を思いっきり引っぱって、彼女を移動させる。「あらら」と間のぬけた声を出しながらも、僕のベクトルに従ってくれた。

「図書館にでも行って新聞記事探しましょう。そっちの方が何倍も情報が集まります」

「それもいいわね。それじゃこの後にも」

「あ、こらっ」

彼女は僕の手を振り払うとそのままの勢いで駆け出した。それを再び阻止せんと、なんとか敷地と彼女との間に体を滑りこませる。

「ちよっとー、なんで邪魔するのよ」

この歳で前科持ちにはなりたくないの僕だって必死だ。

「だからっ、落ち着けて！坂井珠希が言ってたでしょ、あなたは猪突猛進なところがあるって」

「むむ、痛いところをついてくる……」

ようやくわかってくれたのか、彼女は数歩後ろに下がった。

昨日の出来事が教訓として活かされていれば、不法侵入なんて犯罪、思い浮かぶはずもないのだ。

「でも、若いうちは危険を恐れてでも挑戦すべきよ。それともなに？まさかよくあるドラマみたいに『鍵が開いてる』、入ってみたら死体発見、ってパターンでも恐れてるの？それは少し想像力が豊かすぎるんじゃない？」

「無関係の歩行者を無理やり車に詰め込んで、誘拐まがいなことをする……」

「急になに？」

「昨日のあなたの先走りのミスです。僕が寛大だから良かったけど、下手したら、今頃警察のお世話になってますよ、鳥山千歳さん」

「ぐっ」

彼女は悔しそうに唇を噛んだ。やれやれ、わかってくれたみたいだ。

「だけど、手っ取り早く侵入すれば、調査の進展に」

「だからあー」

まだ理解してくれてないらしくぶーたれた鳥山千歳に、言葉の弾丸を装填しようとした瞬間、向かいの扉から、エコバックとおぼしきクリーム色の袋を肩から提げた恰幅のいい中高年の女性が出てきた。絵に描いたように中流階級の主婦だ。それこそ二時間サスペンスとかに出てきそうな、情報を持ったご近所さん。

ほらみろ、人通りは少なくともゼロじゃないんだ。

そのおばちゃんは僕らに気がつくど、訝しんだ瞳を人の良さそうな笑顔の仮面で隠して話かけてきた。

「あんたたち何してるんだい？」

「あっ、いや」

いきなりだったので声が半オクターブ上がってしまう。しまった、これではやましいことがあるみたいだ。

「あたしたちシバサキさんに線香あげに来たんです」

そんな慌てふためく僕と違い至って冷静に鳥山千歳はスラスラと嘘をはいた。

先ほどまで強硬手段に打ってでようとしていた人物と同一人物とは思えない。

「あら、そう。でも留守だったでしょ？色々大変みたいだからねえ」  
そう言いながらおぼちゃんは、軽く握った拳を唇に寄せた。鳥山の眼光が鋭くなる。

「ええ、まさかシバサキくんが、って感じです」

「ほんとよほんと。あんなに利発そうな男の子が。世の中にながめるかわからないわよね」

鳥山千歳の初対面でも発揮されるコミュニケーション能力に感嘆しながら、やることもない僕はそっと目の前の新たな登場人物を観察してみる。

じっくりみてみた結果、さっきも思った『二時間ドラマの情報を持ったおぼちゃん』という印象が深まるだけだった。

「ところであなたたちは、どんな関係なの？」

いかにも噂好きが浮かべそうな笑い顔で、訊いてきた。それに苦笑いしながら鳥山千歳は答える。

「別にただの友達です。シバサキくんとはクラスメートでお世話になってたんで、彼を誘って手を合わせに来たんです」

よくもまあぺらぺらと嘘を並べられるものだ。鳥山千歳の対人スキルは侮れない。

「でも、あいにく家の人がいないみたいで……。失礼ですけど先ほど、シバサキさんのお宅が留守だってこと、わかってたみたいに仰ってましたが」

微妙に空気が重くなる。彼女は上手く隠したつもりだが、僕にははっきりとわかった。これが、彼女の本題だ。

「ええ、柴崎さんち、もう何日もお留守みたいなの」

「何日も？確か彼、父子家庭でしたよね。おじさん、家をあけてるんですか？」

僕は鳥山千歳をちらりと見る。シバサキヨウタには母親がいなかったのか。

「うーん、これはあくまでも噂なんだけど」

手首をくいと曲げてから、おぼちゃんは続けた。

「失踪したらしいわよ、柴崎さん」

「失踪？」

「ほら、息子がいなくなって、ショックだったんじゃない？お葬式の喪主も遠い親戚がしたらしいし」

同級生という設定を鑑みれば、間違いなく教えるべきでない情報をおぼちゃんはあっけらかんと漏らしてくれた。

鳥山千歳もいささか遠慮がちに言葉が続ける。

「そうですね、でもほんとに不思議です。自殺だなんて」

「ここだけの話」

再び手首をくいとさせる。

「私は男女関係のもつれだと思っわ、自殺の原因」

おぼちゃんの噂好きに恐怖を感じつつ、耳を傾ける。

「カノジョらしき可愛い女の子がよく家に出入りしてたからね」

「その人、もしかして十和森高校の生徒でしたか？」

「っていうと、えーと……」

おぼちゃんは首をひねってから続けた。

「よく覚えてないけど、制服着てたのは確かだわね、うん」

おぼちゃんの頷きに、僕は密かに眉を顰めた。

「そうなんですか。あ、色々ありがとうございます。お引き止めて申し訳ありませんでした。また後日改めて伺うことにいたします」

営業スマイルというのか、鳥山千歳は僕には一度だって向けたことのない良い笑顔をおぼちゃんに向けると、ぺこりと小さく頭を下げた。

隣の僕もそれに倣いお辞儀をする。

「あら、いいのよ。ただ最近は物騒だから、あまりよろしした

らダメよ。不審者に間違われるからね」

おぼちゃんは最後に、思いあたるふしが多すぎて耳に痛い発言を残し、去っていった。

その背中が小さくなってから鳥山千歳は僕の方を向いて、風に舞う自分の髪をなでつけながら言った。

「やっぱりご近所ネットワークはすごいわね。新しい情報がいっぱい入ったわ」

「そうですね。僕は柴崎さんが父子家庭だったことも初耳でしたが」「言ってなかったっけ。まあいいわ。いま、その親父さんは失踪中だもんね。あとは、えーと、なんだったっけ」

「柴崎邸に出入りしていた女生徒ですか？」

「そう、それよ！そいつを突き止めれば、調査は進展する！」

「だから今は、柴崎さんが死んだ理由じゃなくて自殺志願者を見つけるのが目的じゃないの？さらに探しもの増やしてどうすんですか」「うっ」

つつい心の声が出てしまった。

「で、でも、だいぶ絞りこめてきたわ」

悔し紛れの彼女の発言は、根拠というものが足りないように思えた。

## 11…弾効ステイグマ

それから僕たちは自転車にまたがって、すぐ近くにある市立図書館に向かった。

休日とはいえ館内はなかなか盛況で、カリカリとペンを動かす学生やソファで寝息をたてる年配の方、果てには幼稚園くらいの女の子が笑いながら走りまわっていた。賑やかさという点において、ウチの学校の図書室とは段違いだ。「待ちなさい！」と注意しながらあたふたと子供を追いかける母親を尻目に、僕たちはシバサキヨウタの自殺記事を読むため、設置されているパソコンに向き合った。

ここ最近、市の方針で新聞をデータベース化し、画面を通して見れるようにしたらしい。楽々操作で場所もとらないを合い言葉に達成された目標であったが、さすがに初めてともなると慣れない操作に四苦八苦だ。なんとか検索窓に適当な日付を入力し、1ヶ月ほど前の地元新聞にたどり着く。

お目当ての記事を見つけるのにそう時間はかからなかった。

---

高校生三年生、自殺。原因は受験ノイローゼか？

18日、早朝、××県××市郊外の山林で、近所の高校に通う3年の男子生徒（17）が首をつって死亡しているのが見つかった。学校の机から遺書のらしきメモ書きが見つかっており、警視庁××署は首つり自殺を図ったとみて詳しい経緯を調べている。

同署によると、男子生徒は木にかけられたロープのようなもので首をつっており、18日午前6時15分ごろ近所の住人が見つけて110番通報。駆けつけた警察官がその場で死亡を確認した。

学校側はいじめなどの事実是否定しており、配慮が足りなかったと、原因を究明すると語っている。



短い記事であったが、これがシバサキヨウタの死の説明である。

「大まかな流れは説明した通りね。残念ながら、警察はそれほど調査を進める気がないみたい。年間自殺者三万人の数字に、彼の死は埋もれてしまった、ってわけ」

椅子に座る僕の横で、パソコンを覗きこむように見ていた鳥山千歳は冷たく言い放つと、かがめていた腰をあげ、「ん〜」という気持ちよさそうな声をもらした。

「これといって目新しい情報はありませんでしたね」

僕の呟きに「そうね」と抑揚もなく応え、彼女は再び腰をかがめた。そうしてパソコンの前に座っている僕に視線を合わせると、

「これからどうする？ 他に行きたいところある？」

つり目がちの瞳で僕を覗きこみ、デートの計画を練るみたいに軽く尋ねた。

「……そうですね」

『トップページに戻る』をクリックし、マウスから手を離す。画面の中では、スクリーンセーバー代わりに市のシンボルマークが魚の遊泳みたくうろちようと動いていた。

「ああ、現場に行ってみたいです」

「現場っていうと、シバサキヨウタが首を吊った、蛇籠森？」

「はい。なんだかんだでまだ一度も手を合わせていないので」

昨日の帰り道に見かけた女生徒を思い出し、キャスター付きの椅子から腰を浮かせる。

「そういえばそうね」

鳥山千歳も異論はないらしく、肩口で切りそろえられた茶色い髪をパサリと頷いた。

それから駅前のフラワーショップで弔い用の花を買い、昨日の夜

いろいろあった空き地に向かった。相変わらず人通りは少ないが、昨日と違い太陽が明るく照らしてくれているので、恐怖が湧き上がることはなかった。

「そっじゃないわ。こっちよ」

さすが第一発見者。迷うことなくスイスイと奥の林に入っていた。

色付き始めた葉に光が遮られ、薄暗闇の中を、彼女に続いて歩を進める。

「こんなわかり辛いところで、彼は死んだんですね」

「ここじゃないわ。もっと奥よ」

「奥？原生林みたいなんだけど……」

「これでも最低限の管理はされてるのよ。自然を保つのは大変なんだから」

正確に言うなら、そこは林というよりは森だった。しかも傾斜があり、頂上にかけて葛折りになっている。もしかしたら学校の裏山に該当するのかもしれない。

山歩きには慣れているらしい鳥山千歳の背中を刷り込み完了した子鴨のように、たどたどしく追いかける。

「よく遺体を発見しましたね。明日筋肉痛になりそうです」

規則性のないでこぼこ道に足を取られる僕を、彼女は振り返りもせずに言った。

「私じゃなくても、いずれ発見されるのは確かよ。この辺りには祠があって、よくお宮参りの親子連れが来てるから」

人通りがあるらしく地面は踏み固まり、道ができている。

「鎮守の森とまではいかないけど、それなりに名のある土地神を祀ってるみたい。だから切り崩さずに残してあるの」

「そんなとこに許可なく入っていいんですか？」

「別に。近所のガキは神様なんて関係ねえってくらいに走りまわってるし、社だって人が来なきゃ意味ないじゃない。あなた蛇籠神社って知らないでしょ」

「地元の地理に疎いんです。なんにせよ地主の人は大変ですね」

「どうして？」

彼女は急に振り返って僕を見据えた。

「だって人死が出るって大問題だし」

「ああ、そう」

「そんな適当な」

「正直言うと別に困ったような事態にはならなかったし、強いて云えば警察がうざかったくらいね。面倒な書類処理とかは、全部丸投げしたから」

「え？」

その妙な口振りに一瞬頭がぼうっとしてしまう。

「まさか鳥山さん所蔵の山なんですか、ここ？」

「正確にはお父様の山。うちの家系、無駄に金持ちだから」

お嬢様っぽい高飛車な性格だと思っていたがまさか本物だとは。

「言っておくけど、あなたたちが学校に通えるのもお父様のおかげよ」

「と、突然なんですか……？」

二の句が告げない僕にどこか誇らし気な彼女はフフンと鼻を鳴らすと、チェシヤ猫のようにニィと笑った。

「……まさか、学校の理事？」

そんなわけないと思いつつ、呟いた答えに、鳥山千歳は心底おかしそうに噴き出した。

「すっごい顔よ」

けらけらと一通り笑い終わると彼女は僕の答えに一言だけ「正解」と付け加えた。

坂井珠希の学園環境を優遇処置していると噂の理事長、の娘。金髪少女を甘やかすのは血筋だったのか。

僕がなにも言えずに黙っていても彼女は気にした風もなく、直ぐに正面を向き、段差となった山道を相変わらず軽快な足取りで歩を進めた。

衝撃のカミングアウトに今のうちに媚びを売っておこうかとも考えたが、ただ純粹に二人の間で流れる沈黙が気まずかった。

「鳥山さんは一人暮らしなんですか？」

勾配になれないスニーカーを泥だらけにしながらも、疲労を忘れるため雑談を選択する。

「先生と、昨日行ったアパートで二人暮らししてるの。本家からの仕送りだけで生活をやりくりするのはなかなか大変なんだから」

「もうちょっと住みやすい場所はなかったんですか？」

「学校から一番近い立地がアソコだったのよ。元々は画家の知り合いにアトリエとして譲っていたものだから、目立たない場所にあるし、最低限の住環境は整ってるしね」

「まあ二部屋も借りてれば狭苦しさは感じないか」

昨日の応接間とココア作りに使っていた部屋、その2つを思いだしながら呟いた僕に、

「二部屋？なにを言ってるの？」

彼女は首をひねりながら続けた。

「あのアパート自体ウチの所有物よ。痛んでるけど耐震性はなかなかなんだから」

気が付くと何も言えずにポカンと口が開いてしまっていた。

「まあ。あたしは先生の一人暮らしに無理やりついてきたみたいなものだから、住居くらい提供しなきゃ」

「ずっと疑問に思ってたんですけど」

昨日の車の中で、彼女が受話器口に喋っていた時から、ある一つの疑問が、僕の頭の中には存在していた。

「鳥山さんのが、年上ですよ。なんで坂井さんを先生って呼ぶんですか？」

少なくとも、自動車免許を持つ彼女は僕らより二歳以上年上になる。無免でなければだ。

「昨日言ったでしょ、お世話になったからよ。先生のおかげであたしは救われたんだから」

そりゃ立派な心構えで、と口に出さず「ふーん」と鼻を鳴らした僕に鳥山千歳は不服そうに細めた瞳を向けてきた。

「ところで敬語やめてくれない？」

「どうしてです？」

現代文の成績に自信はない。表現が間違っているかもしれないのは百も承知だが、それでも相手を不愉快にさせるレベルだとは思わなかった。

「敬意もなしに使われる敬語は、相手との距離を一定に保つ言葉の壁よ」

「わからないでもない、ですけど」

「あたしと先生の関係のように相手を認めた敬語でなければ意味をなさない」

「なるほど」

「フレンドリーに話そう、とまでは言わないわ。だけど言葉に鎧を纏った人と話をしてると、悪いけど寒気がしてくるの」

「了解。気をつけるよ」

「お願いね」

自然体で会話できるのは、こちらも願ったりかなったりだ。急に言葉遣いを変えるのは違和感があったが、そんなの数分もたてば忘れるだろう。

「それから『さん』付けもしなくていいわ」

さすがにこれには戸惑った。

「千歳ってよんで。敬称なんて無意味だから」

「で、でも」

「鳥山よりはそっちの方がわかりやすいでしょ」

ちとせ、ってのは彼女の下の名前だ。女性を呼び捨てなんて、初経験ではないにせよ、小心者の僕には少しだけ勇気のいる行為だった。

「ち、千歳は、死体を見つけた時はなんでこんなとこまで来たの？」  
気恥ずかしく思いながら、予定していた疑問文を打ち出す。

彼女は呼び捨てにされたことより、質問の内容に戸惑っているらしく、じつくりと長い息を吐いてから続けた。

「そうね。敢えて日本語に当てはめるなら厄祓いと言ったところかしら」

今は秋口だ。元旦以外であり耳にしない単語に、神社にお参りでもするのだろうか、と首を傾げる。

「さっき説明したように、ここは霊的地場で朝日には不浄を浄化する力があるから」

新聞記事での遺体発見時刻について思いだす。朝日ってのは記事にあったシバサキヨウタの死体を見つけた6時という早すぎる時刻についての説明だろう。

「正月でもないのになんでそんなこと」

「先生の誕生日に合わせて下準備というわけ」

健気な舎弟だ。話を聞くかぎりかなり由緒正しき家系の千歳を手駒にするだなんて、坂井珠希はよほどの有力者なのだろうか。

「先生の生まれた地方では、厄払いに森で取れた木の実を歳の数だけ食べるって風習があるらしくて、すこしでもあの子の身が軽くなればと」

「？」

当然ただの高校生の僕が民族学的風習に詳しいはずもなく、坂井珠希がどこの地方の生まれなども知る由もなかった。

そんな習わしの最中に死体を見つけるなんて不幸としかいいようがないのではないか。

「ほら、これ」

彼女は腰をかがめて、道端に落ちていた小さなドングリのような木の実を拾った。

「椎の実よ。煎ればなかなか美味しいんだから」

「へえ、詳しいんだ」

誉められて気をよくしたのか、誇らし気に鼻を高くしていた彼女の顔が曇ったのはそれからすぐのことだった。

「あつた」

「え？」

「たしか、この木」

変哲もない、一本の木。その幹を撫でながら彼女はぼんやり呟くみたいに言った。視線を根の方に移せば、確かに真新しい花束が捧げられている。昨日見かけた女生徒のものだろうか。

その横に、さっき買ったばかりの花束を並べ、千歳と目配せをし、僕は静かに手を合わせた。

シバサキヨウタ、さん。

あなたがなにを思って自殺なんてしたのか知りませんが、死んでしまった人を悪く言うつもりはないが、これだけは言わせてほしかった。

僕だって衝動的に死にたくなる時がある。でも実際、自分で命を断とうなんて、バカのすることだ。

はつきり言うて迷惑。

泰礼祭が中止になったことに対しての怒りじゃない、彼の死という損失が、僕らの世界にもたらした変化に対してだ。

静かにそれだけ伝えたと僕は合わせていた手を離れた。

死に場所選ばれた木が、彼にこの念を届かせてくれるとは思わなかったが、届いてくれればいい、と千歳と目があつた僕は頷いた。

## 12…殺伐スクール

休まることない休日とは終わり、日付はまた一つ進む。

坂井珠希の手伝いをするようになったが、僕の日常を崩す権利をあの人たちに与えたつもりはない。

まだ白くなっていない息を吐きながら校門をくぐった。

これからどんどん朝が辛くなる季節とはいえ、まだ半袖でも耐えられそうな気温だ。

前日までの気だるさをごまかすように昨日一昨日の出来事を回想しながら歩みを進めていた。

朝の澄んだ空気は教室さえも清々しくさせ、引きずる眠気をも優しく包みこんでくれる。

彼女はもう登校したのかなとぼんやり考えながら教材を鞆から机に移し替えていると、背中をわりかし強めに叩かれた。

「つう」

小さく呻き声をあげ振り向くと、嫌な笑い顔がそこにあった。

「よお、長山」

振り向いた先に他者を威嚇するヤマカガシみたいに髪を整髪料でツンツンにたたせた同級生が立っていた。

僕はこいつ、志茂田が苦手だ。目のカタキのようになにかとつかかってくるが、それらすべて僕を思っただけの行為ではないからだ。

「なんだよ」

いらいらを出来るだけ抑えて声を平坦にする。お互いにお互いを好いていないことは明白だ。

「まだ出歯亀やってんの？」

言葉の意味がわからなくて、僕は脊髓反射のように「は？」と呟いていた。それから数秒である仮定が浮かんだ。



「出歯亀って、……もしかして映研の活動のこと？」

「おーそれぞれ。廃部になったってのに、まだあんなきめえことしてんの？」

会話の切り出しとしては不自然極まりない。ようするに、話かける口実が欲しかったのだろう。

校舎をビデオで撮ってまわる行為自体は迷惑がられているかもしれないが、盗撮はしていないし（屋上を除く）、出来るだけ許可を取って撮影に臨んでいるつもりだ。

そもそも彼にとにかく言われる筋合いはない。

「ほっといてくれ。それにまだ廃部にはなってないよ」

「くそうぜえやつがいなくなって、部員はお前一人らしいじゃん。今期から、かなり厳しい管理になったらいいから、いつまでも未練がましくしがみついてんなよ」

「勝手に言ってる」

生徒会の部活管理について喚いている志茂田を無視し、机に突っ伏して惰眠をむさぼろうとしたが、腕を枕にする前に後ろ襟を強引に引っ張られ、気管が強く圧迫させられた。咳こみながら、再度ニヤニヤを顔に貼り付けた志茂田を睨みつける。

「なにすんだよ」

「反省しろし。根暗過ぎるぞ、ビデオ撮影って」

「だから他人に迷惑かけないように活動してるってば」

「迷惑とかじゃなくて、お前の行為自体が虫酸が走るっうの。変態じゃねえか」

あまりに一方的な言い分に、流石に我慢の限界が近づいてきた。

堪忍袋がはじけて中にたまった怒りを言葉にしようとした時だ。

僕が声帯を震わせるより先に、まだ稼働していない暖房器具の前で他のやつらと雑談していた裕貴が、助け舟を出すように席に戻ってきて、僕の代わりに志茂田を睨みつけた。

「お前の主観でクレームつけるの止めろよ。京の部活に、口出しする権利はないだろ」

「出たよ出た、保護者」

「ああ？それどういう意味だ？」

わざと逆なでするような発言をした彼に裕貴は食ってかかるように文句を言った。志茂田はそれに答えず、下品な笑いを浮かべている。

その光景を見て、僕は小さくため息をつく。

「志茂田に、京の部活がどうなろうと関係ないだろ」

「関係ねえのはおめえも同じじゃね？少なからず俺は迷惑に思っただから長山は出歯亀行為を自粛すべきだろ」

「お前のことなんてどうでもいいんだ。それにどう考えたって、いちゃもんじゃないか」

裕貴は僕の代わりに反論してくれている。感謝しつつも、生欠伸をして机に突っ伏した。結局のところ、これが日常だ。

志茂田が僕にちよかいをかけて、裕貴がそれを仲裁する。

言い争いをしている時の志茂田のにやけ顔を消すように、僕は強く瞼をつむった。

「なにか収穫はあったか？」

中休み。覗いた屋上には、ボイラーの囲いに背中を預ける金髪の姿があった。挨拶をしようと近づいた僕にちらりとも視線を上げず尋ねられた。

「収穫って……」

「情報だよ。情報」

「自殺者志願者の？」

「それとシバサキについてもだ」

青色のタオルケットを頭からヴェールのように羽織った坂井珠希は、体育座りをした膝の上にプリントを乗せ、ぺらぺらとそれを捲っている。顔は出ているが、御簾のようなタオルケットは他者との壁の役割をギリギリで果たしているらしく、彼女の声の上擦ることはなかった。

「昨日の話なら、千歳から聞かなかった？」

「報告はされたが、同じ風景でも受け手の印象で大きく変わ、……  
まで、千歳だと？いつからお前らは名前で呼び合う仲になった」

つい滑った呼称に、僕の順応性は自分で思っていた以上に強いらしいと、新たな発見をした。

「あの人がそう呼べって」

「そうか。まあいい。それでどうだ？」

彼女はそこで始めて僕を見上げた。クリクリとしたアーモンド型の双眸に射抜かれ、思わずドキリとしてしまう。

「柴崎陽太のことならなにも。多分報告しても変わらないと思うよ。自殺志願者についても同じ」

「あっ」

坂井珠希は目が合っていることに気がついたのか、小さな悲鳴を上げて瞳を伏せた。淡い恋愛感情ではなく、単純な視線恐怖症からだろう。それからすぐに平静な口調に戻って、彼女は言葉が続けた。

「ふむ。彼と一緒にいたという女生徒の話は興味深かったが……。

風紀委員はどう思う？」

僕は彼女の向かいのフェンスに背中を預けて、空を見上げた。秋の空を流れる雲は、遠く、早く、手を伸ばしても届きそうにない。

アスファルトに座る彼女のお尻の下には、ハンカチが敷いてあるので汚れる心配はないが、僕が制服を汚さない座り方となると不良座りくらいしかできない。あれは骨盤が歪むとテレビでやっていた。

「別に特には。ただ痴情のもつれとかではないと思うけどね」

「根拠は？」

「勘かな」

「頼りにならないうえ、思考することを放棄するとは。お前の脳の樂觀さにはある種尊敬の念すら抱くよ」

「君が訊いてきたから答えただけだろ」

苦笑しつつ、偉そうな彼女の頭頂部を見下ろす。青い布があるだけで、なんの面白みもない。

面白みと言え、彼女はさっきから何を熱心に読んでいるのだろうか。

屋上に吹く涼風がタオルケットからはみ出した稲穂のような金髪に、「それなに？」と素直に質問してみた。

「これか？」

閉じて掲げてくれた。藁半紙を纏めて作られたプリントの束は、本と呼ぶのはお粗末作りであつたが、読み物としては一応成立しているらしい。装丁は最悪だが、表紙にはかすれた印刷で『図書便り』と綴られていた。

よく貸し出しカウンターに置かれているな、とおぼろげだが思い出し、改めて見直す。まともに見ること自体、初めてである。

ふと綴られていた日付に違和感を感じた。

「3月号？ ずいぶん前の号だね」

「うむ。今からおよそ8ヶ月前の会誌だな」

彼女はページをめくりながら、口を開いた。

なんやかんやと言える知識はないが、図書便りはたしか図書委員の手作りの月刊誌だ。

「面白いの、それ？」

「なんやかんやで暇つぶしには持ってこいだ。例えば、捲っていた指が止まり、

「学校の七不思議」

今まで出したことのないようなファンシーな声で彼女は続けた。

「1、裏庭の古井戸の底には死体が埋まっている。2、大イチョウに好きな人の名字と自分の名前を彫ると結ばれる。3、4時44分44秒に家庭科室で合わせ鏡をすると悪魔が出てきて願いを叶えてくれる。4、図書室には魔本があり、一人になった生徒の血を吸う。5、6は空白。7は七不思議全てを知った者は、呪われる」

「……」

「どうだ？ なかなか興味深いだろ」

高校生にもなって、なにやってるんだ、図書委員は。

「これが三年の卒業の時に送られたんだ。なかなかセンスがいいじゃないか」

「頭がおかしいんじゃない？それ作った人。そもそもウチの学校に井戸もイチョウもないじゃないか」

「む、風紀委員は知らないのか？」

意外そうに坂井珠希は口を開き、

「千歳に聞けばわかると思うが十年くらい前に改装したんだよ、ここ。その時に井戸やイチョウがある裏庭は潰され、屋内プールになったってわけだ。だからあながちこの七不思議は、歴史あるのかもな」

「ふーん」

最低でも十年以上前から、その噂はあったってわけだ。作り手の創作話でなければ、だけど。

「あっ、そうだハンカチ」

彼女のお尻の下に敷いてあるハンカチを見て、前に貯水タンクの下で拾った物を思いだす。

クエスチョンマークを浮かべる彼女に、僕はポケットから取り出した水色のハンカチを差し出した。

「なんだこれは？」

「拾ったんだけど君のじゃない？」

「私の、ではないが」

アテがハズれたと落胆する僕の手から素早く彼女はハンカチを奪い、折りたたまれたそれを広げはじめた。持ち主でもないのに、なんで受け取るんだ？

「どこに落ちてた？」

「……その下」

太い二本のパイプから、それに沿って貯水タンクを指さした。風に煽らた図書便りがパタパタと音をたてている。

「ふむ。ここに落ちてたのか」

こことは場所、すなわち屋上をさすのだろう。

もしかしたら、自殺志願者の落とし物……、なんて上手い話があるはずがない。僕はわざとバカにした口調で今思ったことを実直に告げた。

「わからないぞ。可能性はゼロじゃない」

甘過ぎる考えを否定した僕に彼女は、なんだかしたり顔で、鼻をならした。

顎に手をあて、裏表を矯めつ眇めつしている彼女に冷めた視線をプレゼントしてあげる。

「ん？」

彼女はこれみよがしにハンカチを掲げた。

「イニシャルが刺繍してある」

「え？嘘？気づかなかったなあ」

「ほらここ。布地と同じ色の糸だから目立たないが」

彼女の白魚のような指の先に、言葉通り『YH』と縫われていた。「……でも落とし主のイニシャルがわかっただけでどうしようもないよね」

「そうだな。そもそもイニシャルかどうかともわからないし」

「とりあえず職員室に届けることにしよう」

ハンカチを返してもらおうと手を伸ばしたが、

「いや、こいつは私が預かっておく」

彼女は言うやいなやハンカチを自分のポケットにしまった。タオルケットに隠れてよくわからなかったがおそらく胸の内ポケット、男子には手がだせない聖域だ。

ここでハンカチの所有権を主張するのもおかしな話なので僕は黙って、彼女の拾得物横領を見逃すことにした。

休み時間終了のチャイムとともに僕は自分の教室に戻るため、屋上のドアをそっと開ける。

坂井珠希は、この後の授業もすべてボイコットして、そのまま屋

上で見張りという名のサボタージュを続けるらしい。彼女の傍らには、勉強道具が無造作に入れられた手提げ袋があったので授業についていけなくなる心配はないらしい。

地頭は僕のような凡才とは比べものにならない、とはいえ不良生徒には変わりないんじゃないだろうか。

一応立入禁止なので、人目を気にしながら廊下の喧騒に紛れようと階段を下る。

その中腹の踊場で、段差を椅子に黄昏ている裕貴を見つけた。

なんでこんなところに？

と驚きながら、見つけられたのが裕貴で良かったと思ひ声をかけた。

「あ、け、京!？」

「そんなに驚かなくても」

僕が上階から降りてくるのに、気づいていなかったらしく、裕貴は見てわかるくらいにうろたえていた。

「こんなところでなにしてるの？」

「あ、いや、散歩っ、つうか……」

「ふーん……」

あからさまにごまかされると追及する気を失う。ひとまず納得してるふりをして、僕は裕貴の肩をポンと叩いた。

「んじゃ教室行こうか。もう授業開始しちゃうよ」

「お、おう」

挙動不審な裕貴と共にそのまま教室に戻った。

### 13…芸術リズム

美術室は独特の匂いに満ちていた。

人によっては苦手だというテレピンの揮発油の香りが呼吸をするたびに鼻腔をくすぐる。制服に匂いが移るんじゃないかと、少しばかり失礼な心配をしながら各々活動する部員を観察していた。

「デッサンが出来るよう、中庭がよく見える位地に美術室はあるんだ」

芸術の選択科目に書道を選んだので、足を踏み入れるのは今日が初めだ。美術部部長の稲木さんの説明はすぐわかりやすかった。「なるほど」

美術室は地下一階にあった。

B棟に囲いこまれるように存在している中庭は、正確にはサンクガーデンといい、地上より低い位地に太陽光を採り入れるための建築上の工夫だ。

黄色くなった亜麻仁油を透明に戻そうとしているのだろうか、窓際には西日を受けて輝く瓶が数本並べて置いてあった。

「でも部活動の風景なんて撮してなにに使うんだい？」

「学校のいいところをビデオに残したいんです。部活で頑張る人とか、特に」

「うーん、そうは言ってもコンクリートの締め切りが過ぎてみんなだらけてるからなあ。どうせなら1ヶ月ほど前に来てほしかった。そんな時なら鬼気せまる顔で魂をキャンバスに打ち込む部員が見れたのに」

「いえ、今でも充分ですよ」

僕は愛想笑いをし、稲木さんの冗談にそう応じた。

映画研究部が放課後の美術部にお邪魔しているのには2つのわけがある。一つは純粹に、廃部前の最後の活動、今朝志茂田にバカに



されたビデオ撮影。

そしてもう一つは、昼に坂井珠希が、『シバサキヨウタは美術部員だったな。どれ風紀委員、ちょっと見学にでもいつてきてくれ』

と、お使いを頼むような気さくさで、僕の肩を叩いてきたからだ。すこしでも情報があれば、と思っていたのだろうが、自然な流れで自殺者という繊細な情報を引き出せるはずもなく、そんなに現実には甘くなかった。

話を伺っている稲木さんは長身ですらりとした男性だ。異性よりは打ち解けやすいとはいえ、これだけ丁寧な対応をしてくれる人に、不躰な質問を浴びせることが出来るはずがなかった。

だからとりあえず雑談だ。僕はビデオカメラを目から外して、稲木さんの方をむいた。

「部員は全部で何名ですか？」

「三年は実質引退して、えーと、今は二年が5人、一年が4人だね」  
「思ったより少ないんですね。画板がたくさんあるからもっと多いかと思いました」

「授業でも使ってるからな。でもウチは基本的に活動は強制してないんだ。絵を描く人はもちろん、彫刻や、そうそうそこで点描してる八谷は、面造りなんて渋い活動を主にしてるね」

「へえー、コンクールでの成績がいいから、もっとガッツリした部活だと思ってました」

「ま、こーんなユルい雰囲気やらせてもらってます。あっ、新入部員が多い時期はちゃんと指導とかするよ」

冗談めかした稲木さんの声に、軽く吹き出しながら、僕は室内をざっと見渡した。

彼の言うとおり、部員はそれほど集中して作品造りに望んでいるというわけではないらしく、お喋りしながらも筆を動かす、といったようすだ。今いる部員も稲木さん含め7名と、これなら僕が部外者だと気負う必要もなさそうだ。

「三年が引退すると寂しくなるねえ。中途半端な進学校はこれだから困る」

「そうですね。おかげで映画研究部は廃部です」

「あー、そりゃお気の毒さま」

同情のお言葉には、まったく心がこもっていなかった。別にいいけど。

「ウチは幽霊部員も多いんだけど、部活申請だったら、それでごまかせるんじゃない？」

「今学期から、査定とかで幽霊部員は完全禁止なんです。活動のチェック等、基準がかなり厳しくなってるみたいですよ」

「あらあら、やるねえ、生徒会」

「美術部も気をつけてください」

お茶を濁す感じで軽く拍手した稲木さんに、僕は苦笑しつつ、そう忠告した。

「でも残念だね、長山くん。積極的に活動する君の部活がなくなっちゃうなんて、生徒会の目は節穴なのではないだろうか」

「僕の場合、いままでロクに活動してこなかったんです。最後だから、映画は無理でもなにか撮つと思うと思って」

「ふむふむ。いい心構えだと思うよ」

映画研究部の存続が今年の泰礼祭にかかっていたことを、僕は言わなかった。言う必要を感じなかったし、おたくの美術部員が自殺なんてけつたいな事をしてくれたせいで、と声を荒げるのは筋違いだとわかっていたからだ。そもその責任は部員数のことをわかっていつつも行動を起こさなかった僕にあるのだから。

「あ、準備室も撮らせてもらっていいですか？」

「うーん、それはさすがに先生に許可もらわないと出来ないなあ。貴重品とかもあるから」

「そうですか、残念です」

美術部の顧問は現在職員会議で、ここにはいない。まあ、実際準備室の撮影はただ単に僕の好奇心で、絶対に欲しいわけではない。

ほかに何か撮り忘れたものがないか、僕はまた室内を見渡した。美術室は造りかけのものはから完成されたものまで、様々なモノが溢れている。それらが醸し出す雰囲気はすべて映像に残せただろう。

部員たちはみな、和気あいあいと絵筆を動かしていて、楽しそうだ。

ふと奥の流しの横にスケッチブックがたくさん収められている大きな棚が目があった。

僕の視線がそこで固定されていることに気がついたのか、稲木さんはいたって平然と提案してくれた。

「よかったら見てみるかい」

「いいんですか？」

「俺のだったら誰も文句言わないだろ。ちょっと恥ずかしいけど見られてマズいものは描いてないしね」

言うやいなや棚の前に移動して、一冊のスケッチブックを僕に手渡してくれた。

お礼を言ってから、ページ開く。

鉛筆で色々なものが描かれていた。デッサンから、抽象画めいたものまで、絵描きの奥深さを感じることができた。

「これ面白いですね」

「ん？ ああ。丁度描いてた絵が煮詰まっていた時に造ったやつだね。いい気晴らしになった」

なかでもチラシやポスターを無秩序に切り貼りして造ったカラージュはすごく興味がそそられた。右端では宇宙戦争してるかと思えば、左端ではウサギが筋トレしている。テーマに一貫性がない、そこがすごく面白かった。

「うまいですね」

「誉めてもなにもでないぞ」

「純粹にそう思っただけですよ」

やはり二年で部長を務めるだけはある。ド素人の僕でもわかるく

らしいしっかりとバランスの取れた絵ばかりだ。崩して描いてある絵も、均整は取れており見てるとすがすがしさを感じる。

感嘆の息を吐きながらめくる僕に、稲木さんは優しく声をかけてきた。

「ところで長山くん。君は絵は好きかい？」

「僕ですか？見るのは好きですけど、描くのはあまり」

「いやいや、君は才能があるね。俺の目に狂いはないよ」

「……なに言ってるんですか？」

「この状況で言うのもアレだけど、君さえよかったら、美術部にはいないかい？」

思わず吹き出しそうになった。

まさか僕が勧誘されるとは。部員集めしなくちゃならないのは僕の方なのに。

「廃部になってしまうのは残念だが、時間を持て余すくらいなら是非、美術部に」

「廃部になったら考えさせてください」

僕はやはり苦笑いしつつ、そう応えた。

「あ、そうだ」

返事を聞くやいなや、部外者の許されなかった美術準備室に稲木さんは早足ではいっていった。

一体どうしたのだろう。疑問に思いながらも会話をする相手がいなくなつて、手持ち無沙汰になってしまった。広げたケッチブックはすでに最後のページにたどり着いている。棚にそれを戻した時、何の気なしに隣の一冊の名前欄に目があった。

柴崎陽太。

声が出そうになった。自殺した先輩のスケッチブック……、それが今、目の前にある。

スケッチブックが収められている棚のある水道前は死角になっていて、絵に打ち込む部員たちに見られることはない。

僕は震える指でそのスケッチブックを

「おまたせ。悪かったね」

「いえ、急にどうしたんですか」

「いやなに、ちょっと今度のコンクールのパンフレットをね」

危なかった。もしスケッチブックを手にしてたりしたら、稲木さんに怪しく思われるところだった。

かけていた指を体側にもってきて、手になにか持った彼と向き合った。

「はい、これ。こんどある美術コンクールにウチの部員のがでるんだ。よかったら見にきてくれないか」

「本当ですか。行きますよ」

第25回、高校生絵画コンクール。受けとったパンフレットには出展作品一覧が載っているようだった。

「場所は市民ホールで、先輩たちの力作や俺の絵も展示されるんだ。こんなんが参考になるかはわからんが、見学は無料だし、是非観覧してってくれ。毎年レベルが高いつて評判なんだよ」

いつもなら面倒くさいと一蹴するところだが、美術の片鱗に触れ、コンクール作品を見てみたいと思いはじめていた。

「ちなみに、規模のわりに由緒ある大会だね。著名な画家や一般投票で大賞を決めるんだが、これに選ばれれば将来は約束されたも同然なんだぜ。入学の難しい美術大学への推薦も実質でるみたいなんだし。日時はえーと、いつだったけな」

「パンフレットに載ってるんじゃないんですか？普通表紙に……」

一旦閉じてタイトルに戻って見たがそれらしきものは書いてなかった。なんて紛らわしい。どうやら、このパンフレットは案内や宣伝用というより参加者に配られる出展作品一覧といったほうが正しいらしい。

「たしか、文化の日だったんだよね……」

「それというと、泰礼祭が予定されてた日付ですね。えーと、たしか」

「11月3日」

僕と稲木さんは同時に振り返った。頭を捻らす僕らに光明たる答えをもたらしたのは、絵の具で土器色に染まった水を変えにきた女生徒だった。

突然の闖入に、声も出さずポカンとする僕らに、バケツを両手で持った彼女は静かに言葉を続けた。

「11月3日です、部長。絵画コンクールがあるのは」

「あ、ああ、そうだったな。布田、助かったよ。でも急に声かけてくるな、驚くだろ」

「それはすみませんでした」

布田と呼ばれた女生徒は、僕らに興味をなくしたのか、そのままスタスタと流しまで歩いていった。

長い黒髪に分厚いメガネ。ぱっと見決して美人とは言えないだろう。しかし、わざと目立たない格好をしているのではないかと、錯覚してしまうほど、ちゃんとした格好をすれば映える容姿をしていた。それを隠しているように感じてしまう、ゆえに、どこことなく病的だ。

「ま、まあ、11月3日、市民ホールな。暇なら来てくれ」

「わかりました。是非いかせてもらいます」

僕はそう答えて美術室を後にした。視界の隅では、先ほどフダと呼ばれた女生徒がジャブジャブと流し台で絵筆を洗っている。絵の具でカラフルに染まったエプロンが、制服姿の彼女にはなんとなく不釣り合いだった。

## 14…狹隘ルート

和やかな空気が滞留する美術室から出ると同時に、「おい」と無遠慮に声をかけられた。その不機嫌そうな声音に、一瞬志茂田の顔が浮かんで微妙にイラつきながら振り向く。

薄暗い廊下にいたのは、タオルケットから、二本の白い足をはやした坂井珠希だった

「どうだった？」

これは、恐怖だ。小学生のころこのタオルケットお化けに出会っていたら、泣いていたかもしれない。

「それどうにかならないの？怖いんだけど」

「目を合わせたくないんだと、あれほど言っただろ」

「まあいいや。美術部はいい人ばかりだったよ」

すれ違うように横を通り過ぎ、そのまま下駄箱に向かおうとした僕に、坂井珠希は尚も不機嫌そうに言葉を続けた。

「私が訊きたいのはそういうことではない。有益な情報は得られたのかどうかだ」

「君は簡単に言っただけだけど、僕は探偵じゃないんだ。そんな器用なことできないよ」

「そうか。ご苦労だったな」

劳いの言葉に、肩すかしを食らう。彼女の事だから文句を言うと思っていたのだが、思ったより穏やかな性格だったのかもしれない。

「映画研究部がなくなったら美術部にいくのも悪くない」

ほとんど一人ごとのように呟いてから、僕は片手の美術コンクリルのパンフレットで坂井珠希の頭部を軽く叩いた。

「なにをするっ!？」

彼女は大げさにたじろぎタオルケットから頭を出して、目を合わせないように僕のつま先に視線を落とした。そのままの状態で柳眉

を逆立て、「人の頭をはたくとは何事だっ！」と怒鳴りつけたが、やがて僕の手にあるパンフレットに気がついたらしく、平然とした顔で奪いページを開いた。

「むこうを向いてろ。これはなんだ？」

「今度ある美術コンクールのパンフレットだって。よかったら一緒にどう？」

「ふん。すけこましなら千歳相手にしろ」

僕は命令に従って、彼女に背中を向けた。やっぱり人に見られるのは嫌なのだろう。

「芸術にはとんと疎いが、素人目でも高水準な作品ばかりだな」

ぼそりと呟く彼女にバレぬよう、そっと首を回し、背後の様子伺う。

作品紹介といっても小冊子のはずなのだが、それをぺらぺらと捲る少女の矮躯が錯覚を引き起こし、目の前の風景が一種のだまし絵のように感じられた。

「む。……ふむ」

「なにか面白いのでもあった？」

「ああ。なかなか興味深いよ。市は遺作をも評価対象にするんだな。私に選考基準はわからないが、なかなか豪胆なイベントのようだ」  
淀みなくページをめくっていた彼女の指は止まり、ある作品に釘付けになっているようだった。誰の作品か、なんてわかりきっている。

「ちょっと見せて」

「あ、こら」

文句を言いたげな彼女を無視し、パンフレットを取り返す。もともと僕が稲木さんから貰ったものだし文句は言わせない。

「綺麗な絵だね」

柴崎陽太の作品は、素直に賞賛にあたえるものだった。

作品紹介の欄は、一人半ページ与えられるらしく、彼の作品も例外ではない。



学校や氏名の記載の上に、枠に囲まれた作品の写真がプリントされていた。

カラー印刷が幸を奏し、印象をよく伝えてくれる。

青い瞳をした白い猫がオレンジ色の鮮やかな花に囲まれてこつちをジッと見ている、そういう絵だ。

個人的な感想を述べるのであれば、現実にありえる構図なのに、どこことなく幻想的で、僕の胸の奥にある少年心をくすぐる不思議な作品だった。

「バックは花菱草だな」

「ふーん。よく見かけるけど、そういう名前なんだ」

「どこにでも咲いてるさ。別に珍しくもない。猫の方はペルシャ猫かな。白い毛に青い目、ひょっとしたらこの猫、耳が悪い遺伝病かもしれないな。柴崎陽太がそこまで考えて描いたかはわからないが」「遺伝病ってどうしてさ？」

「気になるのはタイトル」

僕の疑問を無視して彼女は話を進めた。プリントアウトされた絵の下には短い英単語『sheelf』とだけしるされていた。意味を思い出そうとする僕の手から彼女は澄まし顔でパンフレットを再び奪った。

「日本語で『棚』だったか。絵に全く関係ない、柴崎陽太のネーミングセンスは微妙らしい」

「後ろの花が、鉢植えに段々に配置されて棚みたいになってるからじゃないかな」

「ふむ。言われてみればそうとも取れる」

絵の中の猫みたいに鋭い目つきで彼女は写真を見入っていた。

「日付が記されているな。小さくて見にくいが、724、か。7月24日は誰かの誕生日か？それとも完成させた日、とか」

「僕が知るわけないだろ」

考察と疑問を連発する彼女に僕は半ば呆れながら、ぞんざいに舌を震わせていた。

「ふむ、……はっ！」

「どうかしたの？」

「き、貴様なんでこっちを向いている。む、向こうを向け！」

僕が体を反転させるより先に、貝が殻を閉じるように素早く彼女はその身をタオルケットで覆い隠した。

相変わらず中途半端な視線恐怖症だ。昨日だか、千歳と別れてから、坂井珠希の事を思いだし、視線恐怖症についてインターネットで調べてみた。なんでも視線恐怖症の中にも他者とか自己とかいろいろな分類があるらしく、彼女は中でも正視線恐怖症にカテゴライズされるらしい、人と目を合わせてるのが苦手という症例だ。ちなみに、そのサイトには興味深いことに「ブランケット症候群」という病気(?)についても載っていた。これは小さいころから使っている物や愛着がある物、例えばブランケットに、異常なまでに執着してしまう心の病だそうだ。

目の前の少女を改めて見る。視線恐怖症でブランケット症候群で、ついでに言えばチョコレートホリック……、もうわけがわからない。僕はため息をついて彼女が体を隠す前に取り返したパンフレットをカバンにしまい、廊下を歩きはじめた。その後をひたひたと「ベとベとさん」みたいにタオルケットお化けが続く。即刻先を譲りたいところだが、正体は枯れ尾花でなく坂井珠希だとはっきりわかっており、それがある意味辛い。

「風景委員、これから帰宅か？」

「そうだけど。坂井さんも？」

「うむ。いつまでも屋上にいるのも疲れるし、この時間になってから飛び降りられたら、私にはもうどうしようもない」

「なんで？」

「本人の意思を挫くにも、暗くなってから飛びおりるようなやつなら、いつでもどこでも死のうと思えるさ。手に負えないよ」

携帯のサブディスプレイを光らせて見れば、日はとくに没する時間帯だ。気づけば廊下もえもいわれぬ暗闇に包まれていた。

飛び降りか。

やっぱり自殺の手段に飛び降りを選ぶのには、それなりの理由があるのだろうか。これは僕の想像だけど、学校から飛び降り自殺をはかるというのはある種のメッセージ性が含まれているように思える。事後の凄惨さゆえ、強烈なイメージを、特定の個人に植え付ける。例えばイジメ加害者に罪悪感を与えるため、とか。だとしたらやっぱり柴崎陽太は関係ないんじゃないだろうか。

「坂井さんは、どんな人が自殺志願者だと思う？」

「そういうお前は？」

質問をそのまま返されて、僕はさっきまで考えていたことをそのまま告げた。安易な「いじめられっこ」という答えを聞いていた彼女は、発表が終わると同時に口を開いた。

「想定することは有意義だが、イメージ固めるのは危険だ。それが外れている時、柔軟な対応ができなくなる」

「それじゃ僕がバカみたいじゃん」

偉そうにプロファイリングしていた僕が、ピエロになってしまう。

僕が不服を訴えたことを気にしてか、彼女は取り繕ろうように続けた。

「そうだな。単純に考察するのであれば、自殺志願者は十代の女子といったところか」

「十代ってのはわかるけど、なんで女子？」

学校という空間を考えれば、十代というの当然の帰結だ、教師とか講師とかの例外をのぞけば自然と年代はそこに落ち着く。でも性別までは判断のしようがないはずだ。

「統計的に、自殺の手段で十代女子では飛び降りがなかなかの数値を持っているからな」

「なんだか嫌な見方だな。そりゃ」

小さく苦笑した僕に彼女は何も答えずに後に続くだけだった。

ふと彼女の考察で、夕刻の空き地で見かけた花を持った女生徒の後ろ姿を思い出す。シルエットで顔まではわからなかったが、きつと

彼女は柴崎陽太を弔いにきたただの一般生徒だろう。僕は自分にそう言い聞かせるように歩調を一定にし、別の事を考えることで自らの言い表せないモヤモヤ感をごまかすことにした。

自殺にも幾多の種類がある。柴崎陽太の取った首吊りから、行き過ぎたリストカット、服毒とか、果てには、今ホットな飛び降り自殺。なにせよ不健全極まりない。死後の世界を不安に思い、足が竦むのは当然の生理反応だ。自殺しようと屋上に上がって思い止まったのは、その生への欲求ゆえにだろう。

もしかしたら、自殺志願者はすでに死ぬことをあきらめているのかもしれない。だとしたら僕らがしてることは無駄なんじゃないだろうか。

「風紀委員は自殺を考えたことはあるか？」

「や、藪から棒になんだよ」

顔を隠せば饒舌になる彼女だが、ここまで脈絡もない切り出しは初めてだった。僕は軽くパニックに陥りながら、「そんな経験ないよ」とたどたどしく応える。それに彼女は「そうか」とだけ頷いた。そのまま数歩言ってから、呟くように小さく続けた。

「私は、ある」

意味がある声音の彼女にどう応えればいいのかわからない僕は、微かに声を震わせて、なんとも的外れな発言をしていた。

「前、僕が似たような質問をした時、君は『やらなくちゃいけないことがあるから、死ねない』みたいなことを言ってたじゃないか」

「ああ、今はそう思ってる。だけど昔は違ったんだ」

言葉を考えるように一度切る。

「幼いころから、私はずっと、死ぬことばかりを考えていた。現状と比べて、死後の世界は、醜悪にも魅力的に感じられたのだよ」

僕は彼女の言葉に茶々をいれることなく黙って聞いていた。タオルケットを被って対人恐怖症が改善されているはずなのに、彼女の語調はそれが無いときのようにたどたどしかったからだ。

「だけど私は死ななかった。この歳まで生きながらえた。この世か

らの解脱を考えながらも、それを実行に移すことはなかった。結局のところ、生か死かの二者択一は、環境によって変化するのだろうか」「環境、か。確かに幸福な環境下で死のうと思う人は少ないだろうね」

「ああ、私には私を助けてくれた人たちがいる。その人たちに恩を返すまで、私は生き続けなくてはならない」

「千歳も似たようなこと言ってたよ。君に感謝してるから、奉仕してるんだと」

「同じく私も千歳に助けられている。恩を返せば、向こうもそれを返えしてくる。これでは死ねないな」

くすり、とおかしそうな吐息が彼女から漏れた。僕もつられて口角が上がってしまう。愉快なやつらだ。

「だけど、屋上の死に損ないにはそれがないのだ」

一転、深刻に彼女は続けた。

「柴崎陽太がいなくなっただけで自分は不幸のどん底だと、勘違いしてしまっている。この死に損ないに、私は教えてやりたい」

僕は彼女の言葉を背中を耳にして聞いた。

「誰にも、生きてやらなければならないことがたくさんあることを」

昇降口についたとき、彼女は一組の下駄箱の方に小走りでかけいき、一緒にエントランスのガラス戸をくぐった。

## 15…真相プロパティ

校門の脇に一台の赤いセダンが停められていた。見覚えがあるな、と思うより先に、運転席側のドアがガチャリと開き、中から鳥山千歳が慇懃な執事よろしく出てきて、丁寧にお辞儀をした。

「お待ちしておりました、先生。さっ、乗って下さい」

「うむ、ご苦勞様」

感謝してる、とかいう発言は別次元の彼女の台詞だったのではないかと、と疑念がわくほどふんぞり返って坂井珠希はドア開けごく自然に後部座席に座った。

呆氣にとられたが、なんとか小さく顔の横で手を降り、「じゃあね」とお別れの言葉を告げる。

愉快な連中は、不思議の国にでも帰ってくれ、と歩き始めた僕にカーウィンドウが機械音をたてスライドし、車内から坂井珠希が声をかけてきた。

「風紀委員、なにゆえ別れの言葉を紡ぐ？」

「車で帰るんでしょ？ だったらここでお別れだろ」

「乗れ。話はまだ終わっていない」

「はあ？」

あくまでも目を合わせたくないのか、顔を出していないので、彼女の表情は伺いしれない。その代わりだが、街頭の下の運転席には眉間に皺よせ、仏頂面の千歳が照らされていた。

帰りのアシが出来て楽できると、安易な気持ちで車に乗りこむのはなかなか勇気がいりそうだ。

「遠慮しとくよ。車でいくほど家遠くないし」

「無理にとは言わないが……」

坂井珠希が言葉を濁したのを、その場を辞する許可と判断した僕は踵を軸に身体を180度反転させ、通学路に沿って下校すること

にした。片道20分くらいへっちらだ。

「乗りなさい。あんたにも聞いたもらいたいわ」

が、数歩あるいたところで、運転手の千歳に声をかけられた。嫌な顔してたというのに、彼女の声音には拒否できない強い命令が含まれていた。

大好きな先生とのドライブが第三者たる僕に邪魔されたくない、とこちらを睨みつけていたのに、という風の吹き回しだろう。

ともかく、彼女の命令に従わなくては、どんな酷い目にあわされるかわかったもんじゃない。

「……わかりましたよ」

初対面の時に振るわれた暴行の数々を思いだしながら、渋々車のドアを開いて助手席に腰を下ろした。後ろの座席は、坂井珠希が陣取っているのだから、必然、僕の位置はここになる。シートベルトをつけると同時に、千歳はギアをDに変え車窓の景色が後ろへとスライドし初めた。

「ちと、報告を」

「先生の提案通り、簡易ブログを回った結果、有力な情報を得ることができました」

車が速度に乗るよりも先に、坂井珠希に次いで千歳が口を開いた。聞き慣れぬ単語に耳が違和感を覚える。簡易ブログ……？

「ほう。やはり頭の緩い奴らはなんでも書きたがるな」

「なんの話さ？」

「む。風紀委員はやってないのか。個人個人が自らの日記を不特定多数の閲覧者がいるネット社会に垂れ流す狂気の世界だよ」

「説明じゃなくて、僕が聞きたいのはその命令の方だ」

「学校など公的な場所では水面下から沸き立つことはないが、人の噂に戸は立てられぬ。そういう捌け口に、便利なネット社会が選ばれるのではないかと思って、千歳に頼んで調べてもらってたんだ」

聞き込みを無駄に続け警戒心をイタズラに煽るより効率のいいやり方だろう。

「本来ネットの利便性は顔を隠せる匿名性にあるというのに、顔をさらせる奴らの気が知れないよ」

「先生が裏サイトを潰したから、仕方がないことなのでは？」

「う……あんな薄気味悪いもんが残ってるよりはよっぽど健全だな」  
後部座席の坂井珠希は、さっきの発言に平然と付け加えた。その上書きに助手席でぽかんとしていたら、ハンドル握る千歳が説明してくれた。

「半年ほど前に、学校ホームページとは別に、いわゆる裏サイトという物が流行ってたのよ」

「一学期の話？ たしか配布されたプリントにそんな事が書かれてた気がするけど、実感なかったなあ」

「実名で悪口が書かれてたり、なかなかの荒れっぷりだったわ。先生に対する書き込みも幾らかあって、それが逆鱗に触れたみたい」

「大人気ないな。別に影でそこそ言われるくらいどうってことないじゃないか。それで頭に來て、そのサイトに抗議したの？」

生あくびをかみ殺して言ったのが氣にくわなかったのか、後ろの坂井珠希が、声を荒げた。

「黙れ、風紀委員。どれだけ下卑た書き込みだったと思うのだ！ 思い出すだけでもおぞましい」

「へえ、例えばどんなの？」

「セクハラだ！」

「ええ！？ なんでだよ！？」

あからさまに憤慨している彼女に代わって、鼻歌の一つでも歌わんとする上機嫌な声音なドライバーが僕の質問に答えてくれた。

「『踏まれたい』とか『ヨシヨシしたい』とか、ああそうそう『坂井珠希ちゃんのかんばせをチュウチュウしたい』なんて気持ち悪いのもあったわね」

「それはトラウマだね」

後ろでダンダンとシートを叩く鈍い音がした。無言で怒りを表しているらしい。かすかに「うゝ、うゝ」と唸り声もする。それは発



言の投稿者に対してか、はたまた自らの恥部をあつけらかんと暴露した千歳にたいしてか、僕にはよくわからない。

「それでブログで見つけた有力情報ってのはどんなだったの？」

心底どうでもいい、と思いつつも、適当な相槌をうち、逸れに逸れた本筋に戻るよう促した。

「そーよ、そうでした。リンクからリンクに飛び回って漸く見つけたんです。学校裏サイトよりこっちを規制すべきなんじゃないかっていうくらいお馬鹿な情報の中から、探り出すのは本当に骨が折れたんですから」

赤信号で停車すると同時に、彼女はポケットから、昨日いじっていた物とは別の赤い携帯電話を取り出して、数秒操作をしてから隣の席の僕にそれを渡した。

「見てみて」

誰かのブログがデイスプレイに表示されていた。

僕はそれを後ろの坂井珠希にも聞こえるよう声に出して読もうとしたが、なんともギャルギャルしい本文だったので自重した。

『9月22日 美月は今日も元気ないよ 先輩が自殺なんてことするから アサミはそうゆう無責任な生き方がよくないと思う ちゃんと残された人のこと考えなくちゃ』

『9月23日 結衣と美月といっしょにアイスを食べにいったw 美月は前に比べたらだいぶ元気になってきてるみたい よかったよ かった』

『9月24日 先輩と美月は付き合ってんじゃねってくらい仲が良かったから、気がふさぐのはわかるけど、心配している友達のことも考えてほしい いや別に なんだかやるせないなあって思う午後でした』

口にするとなんだか酸っぱい味が口内に広がりそうなので朗読することはなかったが、その代わりに、要約し坂井珠希にも伝えて上げる。

「つまり、その、『先輩』が自殺してしまって、ブログ主の『アサ

ミ』のお友達の『美月』がもの凄いい落ち込んでると」

「ええ、その日記の主はいい人みたいだから、『美月』を心配して  
るよね。気になるのは、その美月と柴崎陽太の関係を言及した一  
行」

「えー『先輩と美月は付き合ってたんじゃない？』ってくらいに仲がよか  
ったから、……」

恥ずかしいので以下略。

「そう。過去の日記を漁るに、美月と柴崎陽太は、誰もが認めるほ  
ど仲ってわけ。昨日近所のおばさんの話にあった若い女の子は美月  
に違いないわ。他の人のブログにも似たような記述は有ったし、ほ  
ぼ確定的ね」

「この美月とかいう人のブログはないの？」

「探したけど、どうやらつけてないみたい。その代わりにクラス名  
簿から該当する人物を見つけたわ」

部外者なのによく見つけれられたな、と思ったが、理事長の娘の彼  
女なら幾らでも手段があるのだろう。それにコネクションはもちろ  
んのこと、便利なネット世界にはどんな情報が転がっているか想像  
つかない。

「一年四組、布田美月。美術部在住、選挙管理委員会。顔まではわ  
からないけど、話を統合するに、不細工ではなさそうね。添付され  
てたプリクラじゃ小さくてよくわかんなかったけど」

「あ」

一瞬聞き覚えある、と感じた『布田』という名字。それが美術部  
というワードで肉付けされ、明確なイメージを持って僕の脳内に記  
憶として蘇える。

僕と美術部部長の稲木さんに絵画コンクールの日付をぼそりと教  
えた、あの眼鏡の女生徒。彼女はたしか稲木さんに『布田』と呼ば  
れていた。

「何か閃いたような顔だな」

後部座席から坂井珠希の幼い声が響いた。片頬を吊り上げた彼女

の表情をイメージし、僕はぼそりと応える。

「閃いたというわけではないけど、その布田美月という人になら、さっきたぶん美術室で会ったよ」

「ほう。どんな生徒だった？」

「黒髪で、眼鏡をしていた。よく見てなかったから、あまり覚えてないけど、暗い印象をもったな」

「充分だ。決めつけるわけではないが、おそらく屋上の自殺志願者は布田美月に違いないだろう」

彼女は凜として言い放ち、情報を拾い集めてきた千歳に軽く礼を言うと、小さく息をついた。

「それにしても布田美月とは。私にとってはなかなか因果な名前だな」

「え、どうして？」

「直接会ったことはないが、入学式の答辞を私の代わりに行ったのが彼女だと聞く」

「あ、ああ。言われて見ればそんな感じだった……」

もやもやと霞がかったままだった総代が、先ほど西日さす美術室で出会った少女の顔で浮かび上がる。

「入学式の総代を代わってもらったんだっけ？」

「仕方ないのだ。チヨコレートの力を持っても、あの空気には耐えられそうになかったのだから。そんなことより今は、布田美月の精神性を考えなくては」

僕は彼女にバレないようサイドミラーで背後の様子を伺ってみる。

坂井珠希はシートの上に体育座りをして、物思いにふけるように顎に右手をあてていた。

「……そんなあっさり決めちゃっていいの？再三再四言うようだけど、根本的に飛び降り志願者がいるのかも確信が持てないし、仮にいたとしても一時の気の迷いで今は死のうとなんて思っていないかもしれないよ」

「もし自殺志願者がいないならそれに越したことはない。我々の取

り越し苦勞で終わるだけだ。しかし、集めたデータから導き出した現実、確かに屋上に柴崎陽太の名をかたり登ったやつがいるし、そいつは現時点では、布田美月である可能性が高い」

「ただ単に柴崎先輩が死んで落ち込んでるだけの仲が良かった女生徒では？」

「その可能性も否めないな」

否定ばかりで申し訳ないが、僕は一応すべての可能性を考えたいと思う。

「ありきたりのセリフで高説を濁すのは申し訳ないけど、全部想像で証拠はないよね」

「ああ。だが、布田美月という女生徒が『美術部』で柴崎陽太と接点があり、彼が自殺して目に見えて落ち込んでいるのは『ブログ』や風紀委員の抱いた印象通りだ」

夕方、美術室の流しでジャブジャブ絵筆を洗っていた布田美月を思い出す。端正な顔立ちにはボサボサな髪と眼鏡で隠され、どこか儚げで病的な雰囲気醸し出していた。

もし彼女が死のうと考えているのなら、理由や気持ちは理解できないが、可能性に関して納得はできる。

「布田美月だとしても僕らは何をすればいいのさ？まさか本人に突撃インタビューするわけにもいかないし」

「見守るしかないだろう。マークしつつ彼女に未だ死ぬ意思があるようなら、その時こそ……」

彼女はその言葉の続きは言わなかった。

## 16：陰口ポートレート

明けて翌日。いつものように登校した僕は、机に昨日もらった美術コンクールのパンフレットを広げ、頬杖ついてそれを眺めていた。口から欠伸がまた漏れる。最近なんだか寝不足だ。動画編集は遅々として進まず、睡眠時間はそれに相応して削られていた。方針とどうか決め手というか、そういったものが見つからないのだ。

「なに見てんだ？」

出し抜けにかけられた声に顔を上げて見てみると、正面の机に裕貴が座っていた。

「おはよー」と頭の上からパンフレットを覗きこまれる。

「秋だからって芸術に目覚めた？」

「そういうわけじゃないけど、暇だったら見に行こうかな、って。文化の日らしいよ。良かったらいっしょに行かない？」

「どー、しよ、かつなー」

裕貴はリズムカルに調子をつけて、ニタニタ笑った。

「出展作品が載ってるんだな。ウチの生徒の作品があんのか？」

「うん。優勝はガタイですぞ。特にこの作品なんてどうでしょう」仕返しと言わんばかりの演技口調で、柴崎陽太の作品、『she 1f』を指差し、裕貴にパンフレットを渡す。

裕貴は「んー」と間延びするようにゆったりとパンフレットを受け止り、ジーと眺め、しばらくしてから口を開いた。

「猫かわいいなあ」

「……それだけかよ」

「うるせー。芸術は肌に合わんのじゃ」

頭をポリポリ掻きながらあってないような感想をのたまった裕貴の手からパンフレットを取りかえし、鞆にしまう。

「おいおい怒るなよ」

「別に怒ってるわけじゃないよ。一限目の準備をしようと思って」  
「わかったわかりましたよ。きちんとした感想を言いますよ」

なにをどうわかったというんだろう、と僕が首を傾げるより先に、裕貴はもはや求めてもない感想を口にしていた。

「白いにゃんこに鮮やかなオレンジ色の花菱草がとっても似合います。遠近感もよく出ていて、見ると引き込まれそうになりますわ」「へえー、よく花菱草だって知ってたね」

「趣味が植物図鑑を眺めることの橋本裕貴をなめんなよ」

僕が昨日、教えてもらった花の名をあっさり裕貴が言えるなんて意外であった。元空手家でアクティブなくせに、なんとも言えない微妙な趣味だ。はつきり言うとは合わない。

口には出さなかった心の声が目に現れてしまっていたのか、僕の視線に少しでも不快そうにしながら、裕貴はさらに『花菱草』の説明を付け加えた。

「別名カリフォルニアポピー。アメリカ原産の乾燥に強いケシ科の多年草であります。日当たりが悪いと花付きや花色が悪くなるのでご注意を。4月から5月にかけて、黄色やオレンジ、赤色、ピンクといった彩りの花をつけます。花言葉は『希望』『和解』『私の希望をかなえてください』、だっけな、たしか」

「いや、なんか……そこまでいくと凄すぎて尊敬の念さえ湧いてくるよ。やるな」

「褒められて伸びる子だから、もっと褒めてくれていいぞ」

「花には詳しいのに、暗記科目である世界史はなんで苦手なんだろうね」

「うっ、バカ、あんまり舐めた口きくと、はっ倒すぞ」

一時間目は朝から裕貴の苦手な世界史である。かくいう僕も眠くなるので世界史はあまり好きではない。今のうちにたっぷり寝ておきたいが、友達といっしょの時に机にふせるなんて出来るはずもなく、大人しく教科書を机に出すだけだ。

「やめてくれー、目が腐るー」

教科書を見て裕貴はおどけ、禁断症状が出た危ない人みたいにガクガクと震えだした。くだらないと思いつつもそういうノリが大好きな僕は教科書をパラパラ捲り、

「くらえー『ピピンの反乱』！」

「ぎゃー」

自分でもよくわからない太字の重要単語を大声で口にした。

朝からなにをしてるんだろう、と脳の隅でかすかに疑問に思っているページの間隙からヒラリとノートの切れ端が机に落ち、それで妙に冷静になってしまった。

「ん？」

指先でつまみ、見てみるとなにやら書いてある。

『今日の屋上は見張る必要がないので、私は保健室にいる。なにかあったら来い』

流麗な筆致だが、この鼻につく命令口調は坂井珠希に他ならない。宛名がなくても容易に想像がつく。

誰もいない朝早くに僕のクラスの時間割りを掲示板で確認した坂井珠希は、たまたま机に入れてあった一限目の教科書である世界史にこの要件だけが端的に綴ったメッセージを挟んだに違いない。しかもうちのクラスの進み具合まで絶妙に判断したページに挟んでいたから無駄に凄い。

それにしても今日の屋上は見張る必要がないとはどういう意味だ？ ひよっとすると、業者が新しい鍵でも取り付けているのだろうか。ふと、そういった想像をめぐらすより、もっと目先の問題が発生していることに気がついた。

「保健室って……」

半年近くこの学校に通って来たが、幸いにも保健の先生にお世話になることがなかったので、僕の地理感坂井珠希がいるそこがあのやふやであった。昨日だって教えてもらわなくちゃ美術室の場所がわからなかった男である。そもそも特別教室を把握しきれていないから、泰礼祭むけて、学校を撮影したビデオを公開しようと考えて

いたのだ。

少なくとも今わかっているのは僕がいままで回ってきた範囲に保健室はなかったことくらいだ。

「保健室の場所がわかんないのか？」

こういう時こそ、持つべきものは友達である。裕貴は記憶をひねり出すように答えてくれた。

「たしか職員室の奥、進路指導室の横だった気がするが……なんでそんなこと気になったんだ？もしかして体調でも悪いのか？」

「なんでもないよ。ありがとう助かった」

「もしかして、」

そうか職員室らへんか。用もないのにめったにうろつかないから曖昧になっていたな、と思い出しはじめていた僕を見つめ、裕貴は言った。

「坂井珠希か？」

「え？」

なんでわかったんだ、こいつ。やけに感がいいな。

「やっぱりか」

僕の反応だけで、得心がいったように静かに頷くと、裕貴はゆっくり言葉を選ぶようにして続けた。

「あまり言いたくないんだが、友達として忠告しておく。坂井珠希とは付き合わないほうがいい」

「突然なにを言い出すんだよ。珍しいな、裕貴が他人の悪口を言うなんて」

「ああ、こっちだって京の交友関係に口出しするほど野暮じゃない。だけど相手がアイツとなると話は別だ」

「マズいことでもあるの？仲良くなることにマイナスなことはないと思うけど」

ほんとうに珍しい。裕貴が他人の、しかも女子の悪口を言うだなんて。八方美人とは言わないが元来の人当たりの良さで、同性はもちろん異性からもわけ隔てなく好かれるタイプだというのに。



「マズい、というより、良くない噂がいくつかある。アイツと知り合いなら、京も知ってるだろ。坂井珠希の口の悪さを」

「そうかな？ たしかに口先は悪いかもしれないけど、話してみるとそこまで酷くはないよ」

「骨抜きだな。お前がそこまでゾッコンなら、お幸せに、と言ってやるのが正しい友達のあり方なんだろうが、坂井珠希に関しちゃうはならない」

「ちょっと待ってよ。心外だな。なんで僕が彼女に釘付けみたいな感じになってるのさ。あくまで友達付き合いから先に出る気はないよ」

そもそも坂井珠希の良くない点、気に食わない点をあげればキリがない。ふつふつとした黒い感情を胸の内に押しとどめ、釜の蓋をとらないよう慎重に自らを戒めてから、僕はなんとか裕貴を見据えた。

「だから気にしすぎだって」

「そ、それならいいけどよ。忠告だけはしておくよ」

裕貴は、少しだけ嬉しそうに頬を綻ばせてから、一転真剣な面もちになって話を続けた。

「坂井珠希のナリを見ればわかるが、アイツは生粋の日本人じゃない。血統で差別するわけじゃないが、フランスだかイギリスだかの生まれらしい。噂じゃ祖国から僻地に逃げて来たんだと」

「あのさー、僕たち小学生じゃないんだから、そんな根も葉もない噂すんの止めようぜ。大体亡命とか漫画の読み過ぎじゃないのか」

人が打ち解ける一番の方法は他人の悪口、とはよく言ったものだが、あいにく僕はそこまで度量の低い人間ではないし、それは裕貴も同じはずだ、と思っていたのだが。

「噂の元が誰かは知らんが、アイツは異常に顔を隠したがるからな。目立ってるくせに、それを理解しようとしてもしていない。ほんとに矢面に立ちたくないやつが定期テストでトップなんかとるかよ」

「基本的に、どっか抜けてるところあるんだよ。それくらい誰にで

もあるオツチヨコチヨイってやつさ」

「人の目を見て話さない。ワケのわからない悪口を言う。それだけでも嫌われる要素はたっぷりだっていうのに、アイツは人から好かれようとしなんだ」

決して裕貴が坂井珠希の悪口を言っているわけじゃない。ただ下品な噂をしているだけ。そうだ、だって僕らは今まで彼女と同じクラスになったこともない。わかってる、わかってはいるが、

「一学期あいつに告白した男子生徒は、ボロクソになじられ、その日の帰り道事故にあった。それが決定的だった。坂井珠希にある決まり文句がつけられるようになったんだ。いわく、坂井珠希は呪われている。あいつが日本に来る理由がその呪いに、」

「やめてくれ！」

存外大きな声が出ていたらしい。僕の声で正面の裕貴は目を円くし、教室も、水を打ったようにシンと静まり返っていた。

お葬式で大笑いした後や、結婚式で殴り合いをした後のような、場違い感が僕ら二人から放出される。僕はゆっくりその場を取り繕うようにして目をふせ、再び教室に雑談の花が咲くのを待ってから、正面の裕貴にしか聞こえないように呟いた。

「やめてくれ、裕貴。他人の陰口を叩く君を、僕は好きになれそうにない」

「あ、っ……」

裕貴は小さな呻き声を発してから、

「わるい。そういうつもりじゃ……」

短いながらもきちんとした謝罪。

しかし、残念だけど謝るべき相手は僕ではない。何も応えられずに、机にうなだれるように突っ伏した。

## 17..暴走ランデブー

学生食堂の喧騒に混じり、胃袋にかき揚げうどん320円を流しこんだ僕は、満腹のまま職員室に向かった。来たるべく中間試験に備え教師に質問を重ねる学生諸子を尻目に、静けさの奥へ奥へ、白い清潔感あふれる保健室の扉の前に到着し、ドアを二回、軽くノックする。

返事はなかったが、焦る必要はない。留守なら留守で都合がよいとそのまま扉をスライドさせ、ツンと消毒液の香りが支配する室内に足を踏み入れた。

内部は小中学校のそこらとあまり変わり映えがなく、妙に僕を安心させた。『風邪に気をつけよう』とか『うがい手洗い』などのお馴染みの標語が書かれたポスターの壁や、身長計や体重計の横をソツと通りぬけ、窓側のベツトルームに忍び足で侵入する。坂井珠希が休んでいるとしたら、ベツトの上だろうとおおよその予想から確認してみたが、どうやらビンゴだったらしい。6床あるベツトの一番右奥だけビニールカーテンが閉められていて、利用者がいることを示していた。

その真向かいに皺ができることも気にせず、深く腰を下ろした。アルミ製の簡素なベツトは体重を受け止めると同時に『ギッ』と悲鳴をあげたが、その点だけに目をつむれば、なかなかの座り心地である。僕の気配に反応するように寝返りを打つ音が、小さな癩癪玉が弾けるみたいに聞こえた。

カーテンの向こうの人物、おそらくは坂井珠希、はまだ起きていると判断する。

「今、お昼休みだけどご飯は大丈夫？」

「山内教諭なら、職員室でお昼をとっている。急病ならそっちにいい」

凜とした声がそう教えてくれた。山内とは保健教諭のことであり、いわばこの空間のボスだ。ベットに横たわる不機嫌の嵐は、僕を怪我かなにかで助けを求めにきた生徒と勘違いしているらしい。

「僕だよ、長山京。屋上なんかにずっといるから体調を崩すんだ」

「風紀委員か。私は別に風邪など引いておらんぞ。ただサボっているだけだ」

「余計悪いよ。とりあえず体は大事にしないとね。お昼はもう食べた？」

「そうだな……、冷蔵庫からチョコレートをとってきてくれ」

「まさか、それがご飯？　っていうか学校の備品を勝手に使うなよ」

「デザートだ。昼ならとうに済ませた」

「それならよかった」

ベットから腰を浮かし、流しの横の小さな冷蔵庫の前に移動する。扉をあけ、ヒンヤリとした空気の中に手を突っ込み、中にあった板チョコを取り出す。本当にあるとは。なんで常備されてんだよ。

「それでお昼はなに食べたの？」

「パンだパン。貴様に関係ないだろ」

図に乗らせるだけなんじゃないだろうか、と思いながらも彼女の希望の品を手し、元の位置に戻る。脱衣場にあるようなビニールカーテンに手をかけ、念の為に許可を取ることにした。視線恐怖症の坂井珠希を無闇にびびらせるのは得策ではない。

「開けるよ？」

「むっ、少し待て、……ひひぞ」

「？」

口に何か含んだのか、微妙に発音しきれてないが、許可はもらったので、そのまま一気にカーテンを開け放つ。楽器のような小気味良い音の先にいたのは、壁を背に上半身だけを起こした坂井珠希だった。口には細長い棒状のパンがささっていて、未だに食事中的のようである。

邪魔をする気はなかった、と謝罪を口にするより早く彼女が先に

震えはじめた。

「あ、や、やっぱまっ、」

「まだ食事中だったのか」

「はわあ、っ」

「ど、どうしたの？体調が悪化した？」

「ひっ！」

口にコッペパンをくわえたままの少女は突然しどろもどろになって、毛布に潜り込むように頭から突っ込んだ。

「……ねえ、大丈夫？」

枕の横に、パンが入っていたと思われる袋のゴミがあり、『チョコレートコッペパン』と印字されている。

「おい」

それより目の前で繭になった坂井珠希が謎である。例の人見知りの症状がでたのだろうが、僕は事前に許可をもらってカーテンを開けたし、手には処方薬たる板チョコも握られている。加えて言うならば、彼女が口に使っていたのはチョコ入りのコッペパン、症状は出ないはずだ。

やがてハムハムと咀嚼音がやみ、毛布の隙間から坂井珠希が「待たせたな」と普段と変わらぬ様子で顔を出した。

「ああ、わかった」

「むっ、どうした？」

「かじってた部分がチョコに到達してなかったんだ。それが予想外で、だからカーテンを開けた瞬間あんなにビビってたんだね」

「下らぬ憶測をするんじゃない」

カーテンの開放に備え『チョコ』入りのコッペパンを口に含んだ方がいいが、かじった部分がまだチョコに届いていなかったことに気が付き、あわてて止めたが間に合わず、結局毛布を被る羽目になった、と。

「そんなのどうでもいいから、何があったかだけを端的に話せ」

「話すって？」

「用事があったから来たんだろ？」

「あ、いや」

「……まさかとは思うが、用もないのに来たのか」

一回小さく息を吸ってから彼女は続けた。

「用事があったら来いとメッセージを残したんだ。なにかあったからわざわざ保健室に足を運んだんだろ、違うのか？」

「別に。ただ何してんのか気になって」

「呆れたよ風紀委員。お前に比べたらまだアメーバの方が知能指数が高いだろう。見るものすべてに興味がわく生まれたての猿か？」

予想していた悪口とはいえ、あまり気分がいいものではない。へんちくりんな罵声から現実逃避するように、ベットの上で死にかけのクラスのようにギャーギャー騒ぎたてる彼女から視線をはずした。「私は忙しいんだ。お前の暇つぶしに付き合う余裕は持ち合わせていない」

「わかったわかった。悪かったよ、睡眠を邪魔して。だけど君も登校したならクラスに行けばいいだろう」

「必要ないから合理的に行動しているだけだ。ここまで集中できる環境が整っているのに、なぜゆえ有象無象のひしめく教室に行かねばならん。今どき保健室登校児なんて珍しくもない」

「精神病なら、三階のスクールカウンセラーとこ行けばいいだろう」

「不毛だな。釈迦に説法ということわざを胸に刻み込んでおくがよい」

ぐうの音もでない、というのは弁解できないときに使う言葉だが、こういう時はなんていったらいいのだろう。二の句が継げない、だろうか。

確かに不毛という点では彼女の言い分にも一理ある、ので話題を変えることにした。

「偉いね。もう受験勉強？」

白いシーツの上にはノートと筆記用具、某国立大の赤本が置いてあり、彼女の言う通り勉強する環境は充分に整っているようだった。

「受験にそなえてではない、ただの暇つぶし、一生使うことのない知識を蓄えてるんだ」

「いやはやなんとも。やっぱり白鳥ってのは水面下では努力してるもんだね」

「誉め言葉として受けとっておくよ。授業に出てない分、せめて普通の高校生がすることくらいはしておこう、とな」

少しだけ恥ずかしそうに彼女ははにかんだ。

機嫌が回復したようでよかった、と密かに片頬をつりあげながら、お見舞い用に備えつけられているパイプ椅子を引っ張り出し彼女の横に陣取った。

「あ、そうだと忘れるところだった。はい、チョコレート」

「ふむ。ご苦労」

一時的に棚にあげといった板チョコを差し出す。

早速彼女は銀の包み紙をバリバリ剥がして、鼻歌混じりにパキリとかじりついた。

「むふう」

「なんだよその声」

「声？風紀委員よ、なにを言っているんだ。うむー。むふう」

「……なんでもない」

チョコをかじるたびに歓喜の吐息が漏れている。それが無自覚だというなら、やっぱり病気なんじゃないだろうか。

「バクバク食うと、ニキビや虫歯ができるよ」

「あんな俗信を信じているなんて子供だな」

「君にだけは言われたくないな」

「いいかね。チョコレートにはポリフェノールや新陳代謝を良くするミネラル、腸内環境活性に有効な食物繊維も豊富で、吹き出物に効果的なのだよ」

途端に饒舌になった彼女に適当に相槌をうちながら、僕はぼんやりと明日の天気について考えていた。

「ニキビの原因はカカオではなく、ミルクや砂糖の脂肪だ。だから

ビターチョコを食べればなんの問題もない。さらに言えばチョコを食べれば太るというのも嘘」

天気予報では明日の天気は雨だと言っていたが、実際どうなのだろう。空気はツンと乾燥していて、とてもじゃないがふりそうになり。

「チョコレートは高い栄養価で食べたあとに感じる空腹感も少ない。また、ミネラルも多く含まれるため、ダイエット効果が期待できるのだ。虫歯だってポリフェノールで予防できるし、脂肪や糖分にさえ気をつけ適度に摂取すればチョコレートはまさに魔法の食材なのだよ」

「心配だから傘を持っていこう」

「かさ？なんの話だ？今はチョコの話だぞ」

「あ、ごめん。君の置き手紙について考えてたんだ」  
口から出任せ。

「置き手紙と傘、どう関係があるんだ？」

「ほら、今日の屋上は見張る必要がないって書いてあったろ。なんでかなーって、それに付随して明日の天気はなにかなー、って」

話題のレールを変更しないと付き合ってもらえない、とため息ついたのが彼女に効いたのか、坂井珠希はベッドの横にあるカバンをまさぐり、昨日屋上で奪いとった落とし物のハンカチを突き返してきた。

「屋上で思いました。忘れないうちに返しておこう」

「僕が持ち主ってわけじゃないんだけど」

「持ち主の予想がついたから、お前に届けてもらおうと思っているのだよ」

「へえ。誰？僕の知ってる人？」

「知ってるものにも、イニシャルが刺繍されているじゃないか。それにこの、」

彼女が言葉を続けながら、カバンにまた手をつっこんだ時だった。保健室のドアがガラリと勢いよくスライドし、瞬間にして廊下の



喧騒が和やかな保健室になだれ込む。その嵐の中心には青い顔した女生徒が立っており、何かを言いたげに唇をわなわなと震わせていた。

その顔は見覚えあるものだったが、普段からは想像できないほど頼りない表情で、不可思議な違和感が僕の神経を支配した。

「山内教諭なら職員室で、」

急病人と勘違いしたらしい坂井珠希が、僕が来た時と同じ文脈、同じ声音で声をかけた。チョコを食べても初対面は緊張するのか、全く関係のない、窓の外の枯れ木に視線をやっている。

保健室の敷居を橋渡しするかのように跨いだままだった来訪者は、やがて池にカエルが飛び込んだみたいに、静かだが、確かな存在感を濁らせて、その場から弾むように駆け出した。

保健室には開けっ放しにされたままのドアから音の波浪が流れこんできている。

「なんだ、あいつは？」

坂井珠希は突然の出来事にぼんやりしていたが、僕は違った。表情は哀しげに、頼りない所作、今まで見たことないくらいに。

「待ってくれ！裕貴！」

気づけばそいつの名を叫んで僕は駆け出していた。

## 18…少女シニカル

裕貴と出会ったのはお互いにまだ幼い、小学校低学年の時で、気が付いたら俗にいう幼なじみの関係になっていた。

だからこそ、取り巻きの人間関係はもちろん、長い付き合いから、性格や感情の起伏はほぼ把握していて、僕らはお互いを知り尽くしているはずだった。なのに、保健室で見せた淋しげな表情を、一緒にいた期間で見たことがないのは、一体どういうことなのだろう。

走りながら思考を巡らせる。吐き出す二酸化炭素に混じって肝心なパーツすらぶちまけてしまっているようでうまく回らない。

必死に足の筋肉を収縮させるが、生粋の運動家の瞬発力にひ弱な文系少年がかなうはずもなく、無情にも裕貴の背中徐徐に小さくなっていく。あとはただ、見失わないよう、しゃにむに追いつくだけだ。体力的アドバンテージは性差から僕にあるから、持続力の勝利を祈るだけである。

「待て、止まれっ！」

一心不乱に走る裕貴の足は止まることなく、叫びは昼休みで賑わう廊下の生徒たちをいたずらに振り向かせるだけだった。彼らの好奇の視線が追いかけることという場違いに容赦なく向けられる。羞恥心が疼くより、追いつかなくてはいならないという脅迫観念の方が数段勝っていた。

裕貴がなにかから逃げているように、僕もなにかから脅されているのかもしれない。

そのなにかは望んでもいない憶測を植え付けるのだ。

握られたハンカチにじんわり手汗が染み込んでいく。坂井珠希から返された、屋上で拾ったハンカチ。これに刺繍されたイニシャル『YH』。

「僕の知ってる人？」その問いかけに答えた坂井珠希の言葉が蘇る。橋本裕貴の頭文字。今となっては、蛇籠の森で見た女生徒の後ろ姿さえ符合するように思える。平然と柴崎陽太の絵にあった花菱草を説明してみせたのも不自然といえそうだった。

思えば、裕貴は変に状況に詳しかった。一般生徒が屋上の非常錠について知ってるはずないし、決定的なのは、僕は一度、屋上へ通じる階段の踊場で彼女の姿を見ている。

坂井珠希の言うように、飛び降りしようとしている生徒がいるなら、橋本裕貴が一番近いのかもしれない。

「裕貴っ！」

ようやく追いつき彼女の手首を掴んだのは、体育の通知表万年3の僕にとって奇跡でしかなかった。端からみたら痴話喧嘩のようだが、辺りは特別教室ばかりで、人目を気にせずにするのは救いだ。

「っ」

「はなすかよ！なんで逃げるんだ！」

裕貴は無言で掴まれた手をブンブン振り回したが、その所作にも力なく、僕程度でも充分抑えることができた。

「……どうしたんだよ」

気丈で飄々としていて、演劇ならトリックスターがお似合いの裕貴が、涙目になっているのを、現実で前にしても未だに信じる事ができなかった。

「君らしくもない。保健室に用事なら付き合うよ。体調が悪いなら無理すんなって」

「っ」

彼女の顔は、火山の噴火前みたく、みるみる怒りに満たされていき、

「なんだよ、なんだよそれ！」

突如としてはぜるように、廊下の静寂に怒鳴り散らした。

「ふざけんなよ！なんでわかってくれないんだ！努力したって、お

前は何も見ていない！どうすりゃいいんだよ！どうすれば、わかってくれるんだ！」

その爆発は、いつもの裕貴に戻ったようで、僕を多少安心させたが、いかにせん内容の無秩序さに、ただ嘔然とするだけだった。僕の手を振り払い続ける。

「なにもかも、行動原理すら奪われて！女らしくなろうと園芸部に入っても、お前はただ鼻をならすだけだった！見てさえない」

「悪かったのなら謝る、だから、落ち着いてくれ。少し深呼吸をしよう」

「ああ、違う、悪いのは京じゃない。ずっと前から腹は決めてたさ。だけど、ああ、私は嫌なやつだ。身体の底からどす黒い感情が溢れてくる」

裕貴の瞳はいつのまにか涙で潤んでいた。

「京、ごめん、許してくれ。坂井さんにも、謝っておいてくれ、すまない」

そのまま踵を返そうとした裕貴の肩を、僕は強引かもしれないが、ぐっと強めに抑えつけ、正面から向き合った。

目が合うと苦虫を噛み潰したような表情になって、裕貴は床に視線を落とした。唇をギュツと結んで、それ以上涙がでないようこらえているようでもあった。

「僕はバカだから、他人の気持ちを推し量ることができないんだ」  
悩んだけど、正直に言うことにした。

「全部聞くから言いたいこと全てを話してくれないか」

覚悟は決めていた。たとえ裕貴の心奥を泥足で踏みにじむかことになるうとも、助けてみせると。

「ああ、まったく。自己嫌悪さえさせてくれないなんて」

裕貴はぎこちなく首を動かし、

「お前はいつもそうだ。ほんと呆れるよ」

荒々しかった口気はほのかに穏やかに、涙をこぼして微笑んでいた。

僕は無言で手をはなし、なんだかむず痒くなってこめかみあたりを人差し指で掻いた。

だけどその微笑は数秒ももたず、彼女は鼻白み、力の無い口調で、ポツリと呟いた。

「全部、終わりだ」

もう急に走りだすようなことはないだろう、漠然とそう思った。気が感じられなかったからではなく、裕貴の持つ元来の気丈さが戻っているように感じたからだ。

「私たちが初めて会った日、お前は覚えてるか？」

申し訳なかったが、記憶は彼方で、僕は小さく「ごめん」とかぶりを振った。

「忘れてるのが当たり前だよ。でも、でもな、私にとっては特別だったんだ」

とつとつと裕貴は語りだした。

「希望は、ぜんぶ。ああ、なんていうか。そうか、そうだよ。全部聞いてくれると言ってくれたんだもんな。聞いてくれ。京、惨めな女の告白だ」

やがて、口調はもの静かだが、ある種のけじめのようになりとした語り口に変わっていった。

「昔の話をさせてくれ」

彼女は続けた。

「私の両親は少し困った人たちでさ、ずっと男の子が欲しがってたんだよ。跡取りとかそういう問題じゃなくて、単純に養育するにあたっての性別でさ」

自分を示すように弱々しく俯き、

「でも産まれたのが女だろ」

裕貴は自嘲ぎみに笑ってから、僕を顎で誘って歩きだした。隣だつて言葉に耳を傾ける。

僕らの足の先には屋上に通じる階段がある。

「いざ目の前にしても、認めたくなかったみたいでさ。そんなこんなで、産まれてからずっと男の子として育てられてきたわけだ。これは色々と苦労したよ。当時はなにも思わなかったけど、やっぱりおかしいわな。女なのにおままごとせずに、プロレスごっこってのは。でも、私はそれでも幸せだったんだぜ。小さい頃には男女間の壁なんてないに等しかったし、友達はいたから。だけど、結局歪んだ性別のしわ寄せは訪れるもんなんだ」

裕貴の両親について僕はよく知らない。近所だったけど、彼女の家は放任主義だったし、現在の親子関係もあまり良好とはいえないさそうだったからだ。

「8歳の時だった」

裕貴は淡々としたまま、段差に足をかけた。もうこの先には屋上しかない。

僕は、下唇をギュッと噛んで続きの言葉を待った。

「弟が産まれたんだ。今でこそかわいく思っているが、当時は殺してやりたいほど憎んでいたよ」

「……」

「両親の愛情は、一転、弟に注がれるようになったんだ。当たり前だよな、待ち望んだ男子だもの。子が出来づらい彼らにとっちゃ素晴らしい授かりものだよ」

忘れかけていたが今は昼休み、遠くで生徒たちの騒がしい声が耳に届く。だけど気にならないほど小さくて、なんだか別世界に迷いこんだかのように思えてしまう。

「ネグレクト」

裕貴はそう呟いてドアノブを回した。施錠もなにもされていない、屋上扉はいとも容易く開け放たれる。

ネグレクト、最近の単語テストでやったような気がする。意味は、なんだったか。

後ろでドアが鈍重な音を響かせて閉まった。世界は僕らを切り取ったみたいに静まり返り、爽やかな涼風がそっと頬を撫でるだけだ

った。

「最近、テレビでそんな特集を観たよ。私は、どうなんだろうな」  
彼女は苦しそうに心臓を抑えて、口内だけで小さく呻いた。

「私は両親から、無いものとして、いないものとして扱われた。泣いても、転んでも、血が出てても、ないものとして、……無視されていることに気づいてまた泣いて、……世間体を気にする親で良かったよ。学校だけは、行かせてもらえたから」

黒髪が、風に遊ばれている。裕貴は、スカートを折って配水パイプに腰をおろした。

「あの時のこと、思い出すと、この辺りが痛むんだ。おかしいよな。トラウマなんて大それたもんじゃないってわかってるのに」

彼女は小さな膨らみを持つ左胸にギュッと握りしめた拳をあて、続けた。

「弟の存在がネックだったんだ。私の人生の転換点は、祝福される命の誕生で、……ああ、今でも少し憎んでいるのかもしれない」

「裕貴」

彼女はポロポロと、また泣き出していた。僕は無理をするなど、肩にぽんと手を置く。

neglect、無視する、放棄する。育児放棄にも使われる。その英単語を思い出してもスッキリすることはなかった。

「私は狂うとこまで狂っていたんだ。女なのに男で、両親まで見捨てるなんて、アンバランスな小学生は、クラス替えしたばかりの仲間に混じること出来ず、ただ虚空を見つめ、給食の時間を待った」  
「……」

「そんな時だよ。声をかけてくれたんだ。生きる意味を失っていた私に気さくに、遊びに誘ってくれたんだ。覚えてないだろう？」

「ごめん。だけど、そんな大それた意味なんてなかったよ」

「どれだけ救ってくれたか知らなくてもいい。ただ、京だけだったんだ、京だけが私に話かけてくれた。助けられたことを今でも感謝している」

彼女の涙は止まらない。

「女なのに男っぽくて浮いていて、両親に無視されて、荒んでいた私に、お前は声をかけてくれた」

『橋本さんのアサガオきれいだね』『描いてもいい？ぼくのやつ枯れちゃて』

臍気だが、幼き日の1ページが、僕の記憶の埃を払う。

「無視は一時的だったけど、両親とは未だにロクに会話しないかな。でもいいんだ。嬉しいことがあれば、そんなもの」

寂しさを吹き飛ばすよう彼女は一回手を叩いた。

「それから私はずっと京が大好きなんだ」

「……へ？」

澄んだ空気に昼休み終了のチャイムが、静かに響いた。

その音に思考を分断されてしまったみたいで、なにも言えずに、だらしなく口が開いてしまう。

「やっぱり気づいてなかったな」

さらりと、滅多なことじゃ聞けない、まるで颯爽と駆け抜けるF1カーのような、……自分でもなに言ってるのかわからなくなってきた。

「橋本裕貴は、長山京を、ずっと好きだったんだ」

立ち上がった裕貴は僕の目を睨みつけ、昔話をするように、繰り返した。

「お前の鈍感なところも、ズボラなところも、根性がないところも、……優しいところも、全部、ぜんぶ私は、好きなんだ」

「ぼ、僕は、」

水飴みたいにでろんでろんに溶けた思考回路はうまく繋がらない。裕貴はじつと僕の言葉を黙って待っている。二人の間を流れる沈黙が辛かった。

僕は、知っていたはずだ。裕貴の気持ちに、じゃない。彼女が、女性だということに。



さばさばと裏表のない性格が異性から好かれる個性ということもよくわかっていた。口にしたことはなかったけど、裕貴の中性的でスツキリとした小顔と、シュツとしたスタイルはそれだけで魅力なのだ。

僕によくちよっかいを出す志茂田だって、その実裕貴と話がいだけみたいだし、……同性の友人みたいな感覚だったけど、裕貴は、身体はもちろん、心も、本当は女性なのだ。

「裕貴、その前に答えてくれ。いくつか質問があるんだ」

「一生一代の勇気を水に流すのか？」

「ちがう。そうじゃない。僕は愚図で鈍感だから、君の気持ちに気付けなかった。だけど、手遅れにはしたくない」

唾を飲む。

屋上、保健室、ハンカチ、柴崎陽太、非常錠、坂井珠希、女生徒

……。

「なんで、ここなんだ？」

真っ青な秋空から、僕らを取るに足りない存在だと知らしめるみたいに、冬の冷気を孕んだ風が屋上にはゴウゴウと吹き荒れていた。

## 19…少年チェック

緩慢に過ぎる時計の針は昼休みに終わりを告げ、時刻はゆつたりと五時限目に突入していた。言い訳もなしに二人もサボったとなると、ちよっぴり問題になるう数Aの授業だが、朴訥として争い事の嫌いなあの先生なら出席簿にペケ印をつけられるだけで済むだろう。優等生の裕貴がサボるなんて、僕の中では天変地異の前触れレベルの話なのだけど、僕ら二人がいなくても授業は何事もなく普通に進められる。そう、なにも問題はないのだ。

パイプに腰をおろしたままだった裕貴は目尻に溜まった涙をブレザーの袖口で拭うと、懺悔を始めるみたいにな、一回天を仰いだ。

「最低だ、私は」

10月の空は高く、雲がプラネタリウムの丸天井みたいに僕ら包みこんで広がっていた。

裕貴は耐えきれなくなったのか、やおら立ち上がると、縁に向かってふらふらと歩き始めた。頼りない足元に、なにがあっても対応できるよう身構えながらも僕は彼女の数歩後ろに続く。

大丈夫。大丈夫だ。

屋上は緑色の針金で編まれたフェンスに囲まれている。乗り越えようとしても、それ相応の時間がかかるだろう。

「ここで坂井珠希と楽しそうに話してるのが、耐えられなかったんだ」

「坂井、さん？」

「最低なやつだよ、わたしは。思い出を塗りつぶそうとしてるんだ」裕貴が言った名前は、柴崎陽太ではなく、坂井珠希。なぜだ？

金髪の少女の顔が浮かぶ。さっき手を掴んだ時も、裕貴は彼女に謝っておいてくれと、叫んでいた。

混乱は混乱を呼び、ぶちまけられた玩具箱のように僕の脳内をグ

チヨグチヨする。

「がむしゃらに走ってたらいつの間にかB棟の廊下だったんだ。でも京に呼び止められてから、私はここに足を運んでいた。誰にも聞かれなくなかった、ってのももちろんある。だけど、やっぱり負けたくないってのが、一番の理由だったんだと思う」

「ちよっとまってくれ、裕貴」

たまらず僕は声をかけた。

手のひらに網目を食い込ませたまま校庭を見下ろす彼女が、飛び降り进行うと考えているようには、どうしても見えなかったからだ。

「君は屋上が封鎖されてないことを知ってたな」

「教えてくれたのはお前だろ。ガラスカバーがハズされていたって」

「そう、非常錠だ。このドアノブはちよっと前までそれで固定されていた。だけど裕貴、そもそも君はなぜ非常錠の存在を知っていたんだ？普通屋上に来る機会なんてないはずだぞ」

違和感の正体はそこだ。

まず、自殺した三年生である柴崎陽太の名をかたり、屋上の鍵を手にいれた生徒がいる。そいつは屋上を開放した後、鍵を職員室に返していない。それを知った事務員らは、代替措置としてガラスカバーでドアノブを回せないようにしたのだ。

ここまでの事情すら僕は坂井珠希から教えてもらうまで知らなかった。朝礼で言われた記憶もないし、この情報に精通している時点でおかしいのだ。

それに、ここからは僕の憶測だが、ドアの鍵自体、カバーでドアノブを覆う前にかけられたはずだろう。柴崎陽太の名をかたる生徒に本体キーが盗まれていようと、合い鍵かなんかはあるはずだ。

そのカバーとドア本体のロックすら解かれていることを知っているのは、僕と坂井珠希を除けば、屋上の鍵を持っている柴崎陽太の名をかたった飛び降り志願者以外いないはずではないだろうか。

「私は園芸部員だぞ。屋上を使ってた部はうちくらいのもんだ」

裕貴は迷いのないはきはきした口調で、そう答えた。

「お前が言ったんだ。高校に入ったばかりの私に、『女らしい趣味を持ったら』って。だから私は空手をやめて、園芸部に入部したんだ。花言葉を必死になって覚えちゃって、ばっかみたい」

自虐するみたいに吐き出した裕貴は、芸が失敗したピエロみたいにぎこちない笑顔を作った。

「ま、まってくれ。園芸部と屋上、なんの関係が」

裏庭の花壇でパンジーを咲かせるイメージしかないそれが、なんで屋上なんかに。

「例えば、そうだな。今日の放課後、園芸部員で屋上の掃除をすることになってるんだ。カバーがなければ今まで通り屋上にいけるからね。お前からそのことを聞いてすぐに部長に提案したんだ」

「掃除？園芸部員が慈善事業？」

「下を見てしろ」

言われると同時に顔を下に向ける。アスファルトは土で黒ずんできて、よく観察してみると、鉢植えの跡らしきものも見えてくる。

そうだ、思えば変だった。始めて坂井珠希と会った時、彼女は上靴で土の塊をぐしぐしよにほぐしていた。それができるということとは、鉢植えが少し前まで並んでたということじゃないか。

「けっこう汚れてるだろ。雨で流されるの待ってたんだが、ここんとこ降らないから、仕方なく部員で掃除することになったんだ。こびり付く前にな」

「は、鉢植えが置いてあったのか」

「ああ、鍵がパクられて封鎖決定したけど、前まで許可さえとれば簡単に来られたんだ。日当たり良好だし、プランターでの栽培に最適だったよ」

「やけに君が屋上に詳しくあった理由はわかった。けどなんで鍵がかかってないことまで知ってたんだ？」

僕は間抜けなことに、自分の憶測がはずれて焦っていたのかもしれない。

裕貴は、一転感情を堪えるような表情で答えてくれた。

「見てたから」

「見てた？」

「好きな人が、別の女の子と話してれば、気になるのは当然だろ」  
照れる、というより、過去の自分を恥じるような顔で彼女は呟いた。

僕は、小さく「ああ」と出来そこなった返事を反射的に返すだけだった。

昨日の昼、踊場にしゃがみこんだ裕貴は、たしかに落ち込んでいた。

「さっきだって、朝のことを謝ろうと追いかけたのに、坂井珠希と一緒にいるのを見て、カッとなっちゃったんだ」

裕貴はくしゃりと破顔した。

「なんで鍵が開けっ放しになってるのか知らないけど、私から先生に報告しとくよ」

「あ、ああ助かる」

いつもの調子を取り戻したらしく、ひらりとスカートを翻して僕の方を向いた。

それから、数秒お互いににらめっこに近い状況で見つめ合う。先に口を開いたのは裕貴からだった。

「私は小学生のころからお前が好きだった。鈍感なのも大概にしろ」  
僕はなにも言えずに言葉を飲み込む。

「お前が別な女を好きだろうが、関係ない。私はお前が好きなんだ」  
「朝にも言ったけど、僕は別に坂井珠希が好きなのじゃ」

「ほんとかなぁ？」

僕を覗きこむように前かがみになった裕貴に押され、「う、あ」と空気を吐き出す。

「京、それでどうなんだ。私は自分の気持ち、すべてを吐露したぞ。付き合ってくれるのか？」

「ぼ、僕は」

始めて受けた告白が、気の合う友達だと思っていた少女からのものなんて想像したこともなかった。

なんて答えたらしいのかもわからない。裕貴のことは、好きだけど、この感情が友情と愛情の天秤どちらに傾いてるのか、自身のことなのにそれすらも脳を支配する熱でぼんやりしているのだ。

返事をできずに酸素を求める金魚みたいに口をパクパクさせてたら、裕貴はやがて呆れるように息をついた。

「まあ、いいさ。ただこれだけは知っておいてくれ。私はこの思いを風化させる気はない」

「裕貴……」

「京は恩人であると同時に、憧れの人でもあるんだ。返事は今してくれなくて構わない」

「ごめん、僕が優柔不断なだけだ」

「ずっと待ってるよ。今までだってそうして来たんだ。たとえ10年後だろうと、私は待ってる。いいか京、私はいつか必ずお前を振り向かせるからな」

彼女はその後「坂井珠希より先に」と小さく語尾に付け加え、

「宣戦布告だ」

舌をだして、あっかんべーをした後、スタスタと普段と変わらぬ調子で出口に向かって歩きだした。

「どこにいくの」

咄然としかけた僕は裕貴の背中にそう質問を浴びせていた。

「今更授業に出るわけにもいかないしな。少し一人でぶらぶら歩いて頭を冷やすよ」

「そう。僕も適当に時間潰したら六時間目に出るよ」

お互い一緒になって教室に帰る気にはなれないらしい。僕の場合は気恥ずかしいからだが、裕貴はどうなんだろう。

ドアノブに手をかけたままピタリと動きを止めて彼女は物語の続きを朗読するように口を開いた。

「両親との話をしたのは京が始めてだよ」

「裕貴……」

「だけど不思議だな。前々から、こうなることを予感してたみたい  
に今は落ち着いている」

「力になれないかもしれないけど、僕にできることがあったらなん  
でもする」

「まったくお前は卑怯だ。そんなこと言われたら頼りにしちゃうじ  
ゃないか」

「あー、と。まあ、問題解決には力を合わせるのが近道になるしさ。  
もし苦しくなったら、背中をさするくらいなら僕にもできるよ」

「京、私は必ず、女らしさを磨いてお前を落とす。今日この時を忘  
れるなよ、タコ」

彼女は最後に振り向きもせずひらりと手をあげて屋上からでて  
いった。

裕貴らしい退場の仕方に僕は苦笑して、一人になったことで気が  
緩んだのか、崩れ落ちるようにその場にしゃがみこんだ。

裕貴と知り合ったのは、僕に自我が芽生える前のこと。そんな昔  
のこと、もう忘却の彼方だし、もし仮にタイムスリップできたとし  
ても、僕に当時の長山京の行動は読めないだろう。もはや別人なの  
だ。

もし裕貴が過去の人物像としての僕を好いているのだとしたら、  
今の僕を『好き』というのはお門違いもいいところだ。

回顧趣味はないけれど、確かにあの頃は、無邪気で自分の底を自  
分で決めるなんてことはしなかった。将来の夢の欄に書いたことは  
覚えてないけど、間違いなく今からみたらバカげた夢に描いたに違  
いないだろう。

理想と現在の狭間で揺れていた、あのころに戻りたい、と願うわ  
けではないが確かに言えるのは、どこかドライになった今の自分は  
あまり好きじゃないことくらいだ。

裕貴は変わろうとしている。男勝りとからかわれた自分の女を磨  
こうとしている。幼なじみが改革中だというのに僕だけ成長しない

というのはあまりに寂しすぎるのではないか。

「恋の灯は時として友情の灰を残す」

声がしたので頭を上げた。いつの間に近寄られたのだろう、屋上に現れた人物は、確認するまでもないが、タオルケットを羽織った坂井珠希に他ならなかった。彼女もまた僕らと同じように五限目をサボったらしい。

「見てたのか」

「見てはない。断片的に会話が聞こえてきただけだ。出歯亀する気はなかったが、ただ素直に君の青春を祝わせてもらおうよ」

僕の正面にちょこんとしゃがみこんだタオルケットお化けは平坦な口調で続けた。

「お前が突然現れたあの女生徒、……裕貴、と言ったか？彼女の後を追いかけて駆け出すから何事かと思ったのだ」

「見せ物じゃないよ」

「そうカリカリするな。私とて心配していたのだ。あんな表情のやつをほっとくのは、忍びないだろ。まさか嫉妬心を燃やされてとは思わなかったが、彼女の隘路はなかなか複雑のようだな」

坂井珠希に嫉妬心を燃やす。考えてみれば妙な話だ。どこから誤解が始まったのかわからないが、あのハンカチのイニシャルが紛らわしいことに……、あ、裕貴にハンカチを返すのを忘れてた。

園芸部員で屋上に来る機会のある裕貴なら、これを落とすこともあっただろう。僕はポケットから取り出して、坂井珠希の推理力の高さを賞賛した。

「それにしてもこのハンカチの持ち主、裕貴だってよくわかったね」

「ハンカチ？なんの話をしている」

「だから裕貴のイニシャルの」

「落とし物のハンカチなら、持ち主は彼女じゃないぞ」

「は？」



会話が噛み合っていない。

「なに言ってるんだよ。イニシャルYHって縫われてんだろ。だって裕貴のじゃん。返し忘れてたけどさ」

「そのハンカチは男物だ」

たしかにデザイン的には、男物に間違いなかった。

「ましてや彼女がそんなの使うわけないだろ」

そうだ、裕貴は筆箱でさえ女の子っぽいものにしていたんだ。

「ハンカチの持ち主は、柴崎陽太の名をかたったやつだ」

彼女はきっぱり言い放った。

## 20…糾明ポートフォリオ

耳に響くは風の音のみ。青春の騒がしさは授業中には起こらない。世界にいるのは僕らだけと錯覚をするみたいに静まり返っていた。

「君がどうやって屋上にたどり着いたのか僕は知らない。だけど僕と会話してたさっきの生徒、橋本裕貴って言うんだ」

「お前に追いかけられた彼女は、必然的に人が少ないところに行くだろう。自分の泣き顔を多くの人に見られたい、っていうタイプじゃないさそうだったからな。そうになると、女子トイレ、または特別教室の続くB棟か、その辺にアタリをつけて私は追跡したわけだ」

「そういうのを聞いたわけじゃなくて」

「む。なんだ」

「イニシャルがYHなんだよ。屋上にもよく足を運んでたみたいだし、ハンカチは自殺志願者とはまったく関係なかったんだ」

「橋本裕貴がハンカチの持ち主だと風紀委員はいいたいのか。私はそうは思わないな。聞き耳たてたことは謝罪するが、女らしくなりたいと願う彼女が男物のハンカチを使うとは考えづらい」

「君だって想像だろ。まあいいよ、あとで直接聞いてみるから」

さっきはそれで納得しそうになったけど、裕貴は性格的にはボーイッシュだし、男物の衣類品を持っていたってなんら不思議ではない。

「そこまで言うなら私の推論を聞かせてやる」

自信たっぷりの声音で彼女はタオルケットの隙間から、僕にホッチキスでとめた藁半紙の束を差し出した。

「君が昨日だか読んでたやつじゃないか」

受けとって一回表紙に目を通すと、やっぱり『図書便り』とある。一部のページが折り曲げられていた。付箋紙代わりのドッグイヤーということだろう。この薄さでまさか朶とは言うまい。

間違っ て折れたか、もしくは僕にわかりやすくするため、彼女が折ったか。

「七不思議？」

「うむ。1から七まで十和森に伝わる怪奇談。5、6は欠番だが、目を通してくれ」

「昨日読み上げたやつか。古井戸に死体、イチヨウに恋まじない、合わせ鏡の悪魔、図書室に魔本、七不思議の秘密、これがどうかした？ なんの変哲もない下らない作り話の羅列だ」

怪談なんだろうが、僕の背筋に悪寒が走ることはない。21世紀の科学時代を生きる者として、陳腐だと鼻で笑いたくなる内容だ。

「そう作り話だ。私も少し調べてみたが、他でその七不思議という記載を見ることはなかった。5、6が欠番なのは、あえて未完成にすることで信憑性を増すためだろう。では次にそのページ左下の編者を見てくれ」

僕はクエスチョンマークを浮かべながらも彼女の命令従い、見開き左下に目を落とした。

「君は、……柴崎陽太が好きだね」

その時の僕はきつと呆れ顔だったに違いない。

「皮肉なら犬にでも食わせてろ。重要なのはその七不思議は柴崎陽太が集め記載したという点。加えて言うならその会誌は毎月15日に貸出カウンターに並ぶ」

「だから？ それ知ったところで利益なんてないじゃないか」

「私は勘違いしてた。三年の卒業式は3月初旬、15日に作られるそれは入学生に向けて作られているんだ」

「今年の一年に柴崎陽太は七不思議をプレゼントしたわけ？ センスを疑うね」

「その会誌を作るのは二年生までで、三年になったら図書便りにはノンタッチだ。つまりそれは彼のラストメッセージになるわけだな」  
あまりの下らなさにめまいがしてきた。

柴崎陽太と面識はないが、僕と気が合うことはなさそうだ。

「その5つの不思議の中に違和感を感じる箇所がある。風紀委員、わかるか？」

1、裏庭の古井戸の底には死体が埋まっている。

2、大イチョウに好きな人の名字と自分の名前を彫ると結ばれる。

3、4時44分44秒に家庭科室で合わせ鏡をすると悪魔が出てきて願いを叶えてくれる。

4、図書室には魔本があり、一人になった生徒の血を吸う。

7は七不思議全てを知った者は、呪われる。

こんなかに違和感？

僕はしばらく考えて、ぼそりと思ったことを呟いた。

「3番目の不思議なのに4時44分に合わせ鏡をする、ってのは変じゃないかな」

「至極どうでもいい点に気づくなお前。まあ人によって思うところは違うからいいだろう。私は2番目の不思議が変だと思ったんだ」

「大イチョウに好きな人の名字と自分の名前を彫ると結ばれる、ってやつ？」

「そうそれだ。七不思議全てオーソドックスでどこにでも有りそうな内容にも関わらずそれだけ妙に浮いている」

「そうかなあ。魔本なんてめっちゃ凝ってると思うけど」

ネクロミコンとかだろうか。あいにくクトゥルー神話には疎いからわからん。

「単純にみるとただの恋まじないのように思えるが、ほかの4つに比べ、それだけ設定じみたものを感じる。例えば、そうだな。男の子が女の子を好きでその噂を実行したとする。すると女の子の名前で男の名前の組み合わせになるわけだ。これでは婿入りではないか」

小学校の時、消しゴムに好きな人の名前を書いて、誰にも見られずに使いきると成就するってジンクスがあったな。関係ないけど。

「現に、他の3つは別の文集などに載っているなか、2の大イチョウだけ見当たらなかったんだ。おそらく柴崎陽太は学校に蔓延る怪奇を7つ集め、自らの手で七不思議というくりに当てはめようと

したのだろう。しかし思った以上に怪談話が十和森には少なかった。だからオリジナル一つと、7つ知ると呪われるという有りがちな設定を加え、3つの不思議を5つに水増ししたのだ」

「そうまでして会誌を作る意味がわからないな。それに全部君の妄想かもしれないじゃないか」

「その通り、妄想だ」

きっぱり肯定されるとは予想外だ。

「だからこそ気兼ねなく垂れ流すことができる。続けるぞ風紀委員」  
「どうぞ勝手に」

「次に考えるのは、内容だ。まずうちの高校の大イチョウはすでに、切り倒されている。おそらく古井戸の怪談を見つけた時に柴崎陽太は大イチョウがあったことを知ったのだろう。これを組み入れることで、さらなる信憑性の強化をはかったわけだ。それに、実際に試される心配もない」

僕だったら自分の作った噂の効果を目で見てわかるカタチにするのに、柴崎陽太は違うのだろうか。

「名前を彫るという行為は極めて一般的だ。呪いたい相手を強く思う時、名前ほど重要なものはない。名はその人物全てを表す」

金木犀の香りがどこからかしてきたような気がする。屋上まで届くはずがないのはわかってはいるが、秋の日の風にその香りを思い馳せるだけで気分は陽気になってくる。

「幹に名前を刻むというのは木の成長を脅かし傷つけるという点でマイナスかもしれないが、伸び伸びと育つ植物に名前を刻むというのはプラス面の効果も大いに持つだろう。しかしながら、考えるべくはこの不思議、刻む名前をごちゃごちゃにしている」

「結婚後を意識してるだけだろ。それにただの学生の噂にそこまで考えるやつがいるかよ」

「そう深くは考えない。作り話なら尚更だ。だからこそ語り継がれる物語には芯がある。この話にはそれがないのだよ」

彼女の言いたいことはわかるけど前置きが長い気がする。

「例えば図書室。たくさんある蔵書の中になにか一冊不思議な本が混じってても不思議はないという好奇心が軸だ。井戸の底に死体というの古くから考えられてきたことだ。水には不浄なるものが寄り来るといふ。井戸の底の骨に魂が宿ったという狂骨や、番町皿屋敷のお菊さんなどな。合わせ鏡では、4という不吉な数字の羅列、無限に続く鏡の世界は異次元に繋がるという深層心理をともなつて、」

「も、もうわかったから、結局君はなにが言いたいんだよ！」  
タオルケットをすっぽりかぶって顔を見せない彼女が一番不気味だ。そのくせ、目があつてさえいなければ結構よく喋るし。

僕の言葉に「うむ、そうか」と曖昧に頷いた仕草を見せたあと彼女はいつもの調子で続けた。

「好きな人の名字と自分の名前だな。ハンカチに刻まれていたイニシャルはなんだ？」

Y H。

「また柴崎陽太？ Yが陽太ならHは誰だよ」

ヨウタのY。でも坂井珠希の今までの言い分だと素直に考えることは許されないのだろう。となるとHが名字の人物が、謎解きには必要になってくる。

「フダだ、布田美月。美術部一年、私の睨んだ通りだとな」

なるほど、と一瞬納得しかけた自分を振り払い僕は声を大きくする。

「なんか無理やりすぎない？普通のイニシャルで良いじゃないか」

「私の予想では布田美月が柴崎陽太にプレゼントしたのだろう。作られた七不思議になぞらえて。彼が死んで彼女の持ち物になり、それを落とした。私はそう考えている」

「なんか納得できないな」

「つふ、まあ妄想するのは誰にも与えられた権利さ」

僕の心とは違い爽やかな午後だった。

あと2ヶ月もすれば寒さ辛い冬がやってきて屋上で彼女と話をすることもできなくなるだろう。

僕はすぐそこまで迫る新たな季節を思い、空を見上げてため息をついた。

季節は巡り、時間は過ぎる。僕がどんなに願っても15歳は16歳になって、一年生は二年生になる。1ヶ月は1年に1年は10年に。

「時間の矢は止まらない……」

「っ」

思っていたことを、ぼそりと呟いてしまった。タオルケツトの中から一瞬、驚きの声があがったような気がする。

「どうしたの？」

「いや、なんでもない」

彼女はなんだか震える声音でそう応えた。まあいきなり独り言を言えば大抵の人はひくだろう。

それでも僕は、その過ぎ行く時の中でも、僕をずっと思い続けると言ってくれた少女の顔を思い出す。

無益な会話で自らの心象をごまかしてはいるが、僕の脳内に掠めるのは幼なじみに他ならなかった。

問題を先送りにするわけにはいかないのだ。

そういう思いが伝わったのか坂井珠希はのっそり立ち上がるとタオルケツトを羽織ったまま屋上の出口に向かって歩きはじめた。

「……では私は保健室に帰るとする。なにかあったらまた来い」

結局、屋上で、この時間で彼女の金髪を見ることはなかったわけだ。

「ああ、そういえば今日はなんで屋上を見張らないの？」

「言わずもがな、人の出入りが激しい今日に飛び降りようとは考えづらいだろ。なら見張りもいらぬというわけだ」

キィと怯える子ウサギみたいな音をたて重たい扉は開かれる。

「園芸部員の清掃のことを知ってたんだ」

「そういうことだ」

扉は数回バウンドし、重く鈍い音を幾度響かせたが、やがて収ま

り、再び孤独の静けさに僕は包まれた。さっきまで二人分あった呼吸音はいまや一つ、なんだか少し寂しい。

それでも考えをまとめるのに、一人きりというのは好都合だった。裕貴とわかれたばかりでは考えすぎてしまっただろう思考も、しばらく時間をおいたからかどこことなく好調だ。

坂井珠希はそういうところもわかっていて、僕に話かけたのだろうか？なんにせよ彼女は天才だ。



## 21…墜落スタンバイ

放課後、屋上に清掃に向かった裕貴と別れ、僕は再び美術室に足を運んでいた。

別れ際の表情を見る限り、渦巻く暗い感情からは、抜け出せたみたいだ。

ただ試しにハンカチを見せてみたが、裕貴の落とし物ではなかったらしい。予想がはずれてガツカリすべきなのだろうが、僕の頬は自然と綻んでいた。仲直りできたからだろうか。

「失礼します」

緩んだ口角を引き締めるように気合いを入れてから、冷たい窪みに手をかけ、美術室の扉をスライドさせた。

「やあ、また来たのか映画研究部。なかなか熱心だね」

一番近くの丸イスに腰掛けていた部長の稲木さんが、朗らかな笑顔で級友にあった時みたいに、手をちよいとあげた。

「あれ、でも昨日、全部撮り終えたとか言ってなかった？

「映研の方で来たんじゃないんです。少し頼みたいことがあります  
て」

「頼み？あつ、もしかして入部志願に来たとか」

「はい」

冗談めかしてヘラヘラしていた稲木さんの表情が一瞬こわばる。

「え、まじ？」

「あの、映画研究部が廃部になったら入れさせてもらいたいです」  
「も、もちろんいいよ！いやあ、大歓迎だ。嬉しいねえ」

「もし廃部になったらですよ」

肯定が予想外だったのだろう、稲木さんは驚きと喜びが混じった笑顔を僕に向けた。

「君には見込みがあると思ってたんだ」

「そ、そうですか。えっと、見学させてもらってもいいですか？」

「おお、思う存分見ていってください」

廃部になったら、とは言っているが、僕にはすでに部を無くす気などなかった。

部員集めの案件を今も必死に練っている。規定の部員数さえあれば、生徒会も考えてくれるはずだ。

僕の思考の変化は裕貴の影響によるところが大きかった。

変わろうとしている裕貴は、それでも過ぎ行く年月の中、変わらず僕を思い続けてくれていたのだ。

流れに流されてあらがおうともしなかった僕とは違う。

「それじゃ挨拶だけしとこうか。昨日も軽く紹介はしたが、今度はきっちりだ」

「はい」

成長する。肉体的にじゃない、精神的に。肉体が成長してもそれに宿る魂は健全でなければ意味がない。

そのために、僕は柴崎陽太の自殺に関する件を、解決とまではいかない、納得行くまで見届けようと思ったのだ。

「んじゃ、いくか」

よほど驚いていたのだろう、持ちっぱなしにしていた鉛筆を近くの机においた彼に連れられ、作業をする他の部員に挨拶をする。

「見学に来ました長山京です。よろしくおねがいします」

その中には布田美月の姿もあった。

教室にいる部員は稲木さんを含め、5名。昨日よりも人数が減ったわけを、稲木さんは頭を抱えながら、教えてくれた。

「中間が近いからね。勉強という大義名分でサボってるみたいだ。それから、昨日も説明したと思うけど、地元の絵画教室とで掛け持ち入部してくれてるやつらもいるからさ。最近そっちの方も忙しいらしくて」

サボったメンツのなかに、布田美月がいなかったことを、自分の

行動が徒労に終わらずに済み、静かに喜んだ。

「ところで長山くんは入部するとしたら、何を主に活動する気だい？」

「そうですね」

語尾を間延びさせ、不自然に時間を稼ぎながら、思考を回転させる。

「やっぱり絵ですかね。てんで素人ですけど、上手になりたいんで」

「いい気概だ。君なら絶対にできる」

「や、やめてくださいよ」

実力未知数の僕にたいし、そのおべんちゃらはお世辞にもなっていないだろう。

自己紹介をかねた挨拶を何度か繰り返し、ようやく心地ついた僕は作業をする布田美月の後ろにイスを置いて腰を下ろした。同じ1年生で絵を描いているのは、今日いる部員の中では彼女だけだったから、というもっともらしい理由をつけてだ。

「見させてもらっていい？」

「どうぞ」

こだましそうなほど、悲しく澄んだ声だった。

制服の上から作業用のエプロンをつけており、それが色気を閉じ込める役割を果たしているみたいだったが、それでもなお、彼女には言葉で表せない不思議な魅力を放っていた。レンズの先の瞳は、いったい何を見ているのか、尋ねてみたい衝動に駆られる。

「綺麗な蝶だね。見てると虜になりそうだ」

そんな気持ちをグッとこらえた代わりか、彼女の筆が描き出す世界の感想を僕は呟いていた。

描かれていたのは、青い羽根をもつ蝶。

描き手は物憂いそうに僕の方をちら見すると、すぐにキャンバスに視線を戻した。無言の威圧を肌で感じる。

「ごめん。邪魔だったら、向こうに行くよ」

「別にいいです」

席を立とうとした僕に、冷ややかな声がかけられた。

「あ、ありがと。邪魔しないように気をつけるよ」

再び腰をおろす。どうやら雑談しながらも、彼女が集中を欠くことはなさそうだった。

僕は安心し、黄昏時のこの空間の居心地の良さを噛み締めてから、口を開いた。

「なんていう蝶々だっけ、それ。結構有名だよね」

鱗粉を振り撒きながら、緑の中を飛び回る青い蝶。

絵の具では、光によって変わり行くその美しさはなかなか再現できそうにない。曖昧な僕のイメージを固まらせたのは、ひとえに彼女の画力による。

「モルフォ蝶」

僕の質問に、彼女は端的に答えた。

「そうだ。南米にいる珍しい蝶々だよね。乱獲しすぎて数が減ってる」

彼女は小さく顎をひいた。テレビで何度が見たことがある。

「たしか森の宝石って呼ばれてるやつだ。本当にキラキラしてて宝石みたいなんだよね」

「モルフォ蝶の色は、羽根の表面の微細構造によって作り出されているんです」

彼女は筆を動かしながら、僕には一瞥もくれないで唇を開いた。

「普通の色じゃないってこと？」

「はい。羽根の微細な襞で青の波長の光だけを反射させるんです。光は強まったり、弱まったりして、色素では出せない色を作っているんです」

「難しいな。複雑な色合いなんだ。でも昆虫にも絵にも詳しくない僕でもわかったんだから、再現度は高いよ」

僕は誘うように笑いかけたけど、彼女がにっこりすることはなかった。

なにを考えているのかわからない仏頂面のまま、作業をただ続けるだけだ。なんだか坂井珠希を思いたしたけど、彼女とは全くちがった無言である。

坂井珠希の方は、何か考え事をしていて唇を結んでいるとわかるのだが、布田美月に至っては、重要なこととどうでもいいこと総てが入り混じっていて判断がつかない。なにを考えているのか、霞を掴むようだ。

「構造色っていうんです」

ぽつりと彼女が言葉を落とした。突然の呟きに僕は思わず「え？」と尋ねかえしてしまう。

「複雑に絡みあった、そういう色のこと。シャボン玉とか孔雀の羽根とか、外人の瞳の色とか」

僕は自分の息を飲む音を耳の奥で捉えた。

ジッとこちらを見つめる青い瞳のビジョンが浮かぶ。

「構造色か。絵で描けといわれたら、僕じゃ絶対に出来ないな」

「……」

「夢くて幻想的ないい題材だね。ぜひ完成品も見せてよ」

彼女の筆は一瞬止まって、微かだが、小さく頷いてくれた。

布田美月が学校の屋上から、蝶が舞い遊んでいるところを羽根を筆で取られたみたいに、地面に垂直に落下していく。

ごしゃ、という鈍い音をたてて、アスファルトに広がるのは赤い絨毯。

悲鳴はあがっていないのに、僕の耳にはいつまでも誰かの叫び声が響いていた。

「気持ち悪くなってきた」

全部嘘だ。考えうる中で最悪のイメージ。僕的能力は妄想しかない。

無理やり考えてみたが、違和感はなかった。

僕はそのイメージを引きずりながら、たくさん並んだスケッチブックから、柴崎陽太のものを選び手に取る。

昨日は結局中を覗くことはなかったけど、わざわざ言い訳までしてここに來たのだ。

「落とし物は見つかったかい？」

衝立のような壁を一枚挟んだ向こうから稲木さんの声が聞こえてきた。僕はそれに「まだです」と叫び返し、

「すぐ見つかると思うんで気にしないでください」

スケッチブックのページを開いた。

コンクールに出品されるレベルの持ち主だけあって中の絵は総じてレベルが高かった。

鉛筆でささったと流したようなものばかりだったが、どれも写真のように精巧で、思わず「ほう」と感嘆の息が漏れてしまう。

柴崎陽太のスケッチには、人物画が多く描かれていた。

僕の知ってる先生から、知らない彼の友達まで。その人物の近くには漫画家のネームのように短い説明文が添えられている。例えば養護教諭の山内教諭の側には『保険の先生』、彼の友人の近くには『友達 山田』、どれも日付とセットで綴られている。彼の癖なのだろうか。

スケッチには色んな人物が収められていた。モデルとなった人物は、誰もが自然体であり、おそらく許可をとっていないのだろう。写生といっても脳内のその人物を描くようにしていたのかもしれないが、技量もなにもない僕には検討もつかないレベルだ。

ページを捲る度に驚きが広がる。

『警官』『クラスメート』『消防士』『校長』『メッセンジャー』『警備員』『友人』『生徒』……。まるで画集を見ているようだ。

その内の一枚に僕は、思わず吹き出した。

それは椅子に座って分厚い本を読む坂井珠希の人物画だった。彼女の近くに綴られていた文字は『猫みたいな生徒』。さすが絵を描く人といったところで、よく観察できている。

僕はにやにやしながら、またページを捲り、視界から飛び混んできた情報で全ての思考が停止した。

「これ、は」

描かれていた人物は、布田美月。柴崎陽太からみて部活の後輩である彼女の説明文は、僕の考えるものとは大きく違っていた。今までの作品では、部員の説明文は決まって『部員 八谷』とか『副部长 稲木』とかだったのに彼女に対してはそうではない。『恋人』でもなければ、『友達』でもなく、ふざけてこんな表記にしたとも思えない。

何気ない微笑みを描かれた布田美月のスケッチは今の彼女と違い、穏やかな雰囲気醸し出していた。やはり整った顔立ちをしていることが、よくわかる画だ。だが、描かれた彼女の横に綴られた説明、これは、

「おーい。まだ探してんのかい」

「あ、いえ」

どうやら黙り込んでスケッチブックを見ていた僕を心配してくれらしい。

彼がスケッチブックが並ぶ水道前に顔を覗かせる前に、柴崎陽太のそれを戻して、ポケットから屋上で拾ったハンカチを取り出す。

「探し物は？」

「あ、はい、おかげさまで。やっぱりここで落としてました」

ひょっこりと現れた稲木さんは軽いノリで尋ねた。

「へえ。なにを落としたんだ？」

「えっと、ハンカチです。あの、それより、今から映研の活動もしなくちゃならないんでこれで失礼します」

「おお、そうかい。またきな。熱烈歓迎っすから」

「ありがとうございます」

無理やり切り上げるように僕は美術室を飛び出した。坂井珠希にいま知ったことを話したかったのだ。





## 22…泰然クレバー

用があるなら保健室に來い、という彼女の別れ際の言葉を思い出して、実際に足を運んだとはいいが、抜け殻のようなベッドがあるだけで坂井珠希の姿は見当たらなかった。

次に思いついたのは屋上だったが、清掃が終わり、鍵がかかったそこに金髪の少女がいるはずもなく、僕は途方に暮れて校舎を彷徨うように歩きだした。扉は予備キーで施錠したのだろう。裕貴の言葉を信じるのなら、再びドアノブにカバーがつけられる日もそう遠くない。

数分、オアシスを求める砂漠の商人のように歩き回ったが結局見つけることはできず、もう帰ってしまったのだろう、と無理やり結論付け、中途半端に余った時間を映画研究部の部室に戻り、動画チェックでもすることで潰すことにした。

廊下に響く自身の歩調が映写機に取り付けたフィルムを彷彿とさせ、瞬きをする度に瞼の裏のスクリーンに布田美月の儚げな姿が投影される。

スケッチブックに綴られていた柴崎陽太と布田美月の関係。脳内物質が出まくっているせいか、沸騰したみたいに頭が熱い。

僕に今必要なのは考え事を落ち着いてまとめられる、くつろげるスペースだ。学校という限られた場所でそれを持っている生徒はどれだけいるだろう。人によって教室だったり、図書室だったりするなか、僕のリラックスできる空間は部室だった。

元が物置部屋なので、両手を広げれば壁にゴツンとあたるくらい狭い部室だ。

そこには前いた部員が残した型の古いノートパソコンや、撮影器具なんかがごちゃごちゃと乱雑に置いてある。汚い空間ではあるが、殺伐とした空気が、秘密基地みたいで僕は好きだった。

ドアを引けば、僕だけの空間が広がる。もう半分自室のような感覚だ。だから、さっきまで捜しまわった坂井珠希がさも当然のように鎮座している目の前の光景は、初めて会った時以来の衝撃を僕に与えた。

「な、なんで君がここにいるのさ!？」

半ば怒鳴るような質問を無視し、坂井珠希はめんどくさそうに僕を一瞥してから、軽く息を吐いた。

「遅かったな。待ちくたびれたぞ」

「そ、そんなこと言われても、特に待ち合わせはしてなかったよね」「もっともだ」

イスから飛び跳ねるように立ち上がった彼女は、自分のお尻を軽く叩いてスカートの皺を伸ばした。

「風紀委員もとい映画研究部、老婆心ながら忠告させてもらうが、もう少し戸締まりに気をつかったほうがいい」

「マジックで『映画研究部備品』とデッカく書いてある10年前のパソコン盗むやつがいるなら会ってみたいよ」

「少し改造すればそれなりのスペックにはなるぞ。……脱線したな。そんなことはどうでもいいのだ」

鼻を鳴らし彼女は持ったままだった薄い文庫本を、机の上に放り投げるように置いて口を尖らせた。

「貴様がトロトロしていたせいで、私はこの本を二週してしまった」

「僕にだって都合があるんだよ。何しに部屋に来たのさ。君がわざわざ足を運んだんだからそれなりの理由があるんだろ」

再びの同じ質問に彼女は、どこことなく演技くさい、けろっとしたようすで応えた。

「ああ、今から布田美月に会いに行く」

「はあ？」

さっきまで話してました、と言いかけて、僕は首を横にふる。

「なんでまた急に」

「時間の矢は止まらない。行ける時に行っとかないと次のチャンス

はいつかわからない。千歳も頑張ってくれたし」

鳥山千歳の名が急にあがりポカンとしていた僕に彼女は説明してくれた。

「千歳が人払いをしてくれたのだ、いま美術室には布田美月しかない」

「え？あの人部外者だろ。どうやって」

「それは企業秘密。公には出来ないね」

「なんの企業だよ」

ふざけた発言に反論しつつも、さっきまでの美術室の惨状を思い出し妙に納得してしまった。

「確かに5人しかいないなんて、美術部みたいに盛んな部活にしては珍しいと思ったけど、まさかそれは千歳の仕業だっていうんじゃないだろうね？」

「その物言い。風紀委員、美術室にいったのか？」

鉄仮面のような彼女の表情が意外なものを見つけたみたいに歪む。「うん。僕も布田美月と話がしたくてさ。だけど実際どうなんだろう。ますますわからなくなったよ」

布田美月の醸し出す雰囲気は僕のような凡人にはミステリアスすぎる。

言わんとする意味を理解したのだろう、坂井珠希は誰を励ますでもない妙な調子で「そうか」と静かに呟いた。

だけど布田美月と柴崎陽太の謎を解き明かすヒントを僕は掴んでいた。

「そうだ。美術室で柴崎陽太のスケッチブックを読んだんだ」

「読んだ？観たではなく、読んだのか？」

「ああ、デッサンの横にその人物の説明文が軽く書いてあったんだよ。そこには布田美月も描いてあってさ」

異常に喉が渴いた。僕の急かされるみたいに焦ってまとまりの無い説明を坂井珠希は真剣な目つきで聞いてくれていた。

「彼女には、妹、と綴られていた」

僕が驚いた説明文に坂井珠希は淡泊に「ほう」と相槌をついて、ポケットから取り出した一口チョコを舌に乗せた。さっきまでの物怖じしない彼女の態度を見るかぎり、僕が来る前からチョコレートをつまんでいたらしい。

「これが本当なら柴崎陽太と布田美月は兄と妹という関係になるんだ」

「なるほどな」

「驚かないね。知ってたの？」

「いや」

彼女は飴を転がすように口をもごもごさせ、顎に手をあてたまま、首を軽く左右に揺すった。

「可能性の一つとして考えていた。恋人では腑に落ちない点がいくつかあったからな」

「そうかな、兄妹という関係の方が意外だよ。名字違うのは家庭の問題で片付けるにしろ、隠し通せるもんでもないし」

「下世話な噂の一つに、柴崎陽太と布田美月は同棲しているというのがあった。柴崎は父親と同居してるから、有り得ないとは思ったが、二人が兄妹なら不自然な点はない」

彼女は続ける。

「それから名前。美月に陽太。月に太陽。名前が対になっている。やつらにとって『名前』というのは特別な思い入れがあるらしいな」

「まさか、偶然だろ」

「私たちにはそれを知る権利はない。憶測を述べるだけだ」

彼女は端的にそう述べると僕の横をすり抜け、部室から廊下に出た。

「さあ、風紀委員。行こう」

舞台役者の開幕宣言みたいに荘厳さに満ち溢れた彼女の言葉に乗せられて、僕は美術室に向けて歩みを進めていた。その言葉は、

なんだか坂井珠希自身を鼓舞するように聞こえた。

先ほどの彼女の声にはいつも無駄に溢れる覇気がないように思う。気のせいだろうか。違和感を引きずったまま僕は彼女と一緒に静けさに支配された廊下を歩き始めた。

「まだ話してなかったな」

ふと、闇に溶ける薄紅色の唇を震わせて、彼女は懺悔するクリスチャンみたいに呟いた。マントのようにはためかせたタオルケットからは想像できない低い声音だ。

「なにが？」

歩きながらではうまく表情を窺うこともできない。日が落ち、廊下の白熱灯も役割を終えた薄暗い空間では、彼女もそのまま闇に溶けてしまいそうだった。

「私は柴崎陽太と会ったことがあるのだ」

「同じ学校だし、すれ違うくらいなら僕だってしてるよ、たぶん」

「自殺する一週間ほど前、私は柴崎陽太と図書室で会話を交わした」

「そう、なんだ」

街灯照らす車内で千歳から前に一度、その話をされたことがあったが、あえて僕は知らないふりをして彼女の声に耳を傾けた。

「やつは私に妙な質問をいくつかぶつけた。今でもたまに思い出す。もしかしたら、あの時、違った言葉をはいていたら、あいつは死ななかったのではないかと」

「僕は教師じゃないから偉そうなことは言えないけど、大切なのは仮定の話より、今をどうするかだろ」

「その通りだ」

彼女は僕の言葉に頷いた。

「その通りだが、風紀委員、勘違いしないでくれ」

のっぺりとした口調で彼女は続ける。

「人の寿命というものは、与えられて存在しているものだとは私は考えている」

「どういうこと？」

「自殺するやつは何をしても自殺する、と言っているのではない。病気や事故で死ぬ者の寿命は決められているとして、しかしながら、人の意思は変えることができる」

「それじゃ、柴崎陽太の自殺は」

「私が決心を変えるほどの、巧妙な言葉をはけなかった。それが一つの要因として存在している」

「考えすぎだ。そんなもの予想できるわけじゃないじゃないか。まさか柴崎陽太から死にたい、と相談されたわけじゃあるまいし」

彼女は気まずそうに無言になって目を伏せた。美術室までのただか5分の道のりが異様に遠く感じられる。

階段を下り、地階になっても、それは変わらなかった。

「バタフライ効果という言葉がある」

「風が吹けば桶屋がもうかる、っていうトンデモ理論だろ」

漫画や小説で何回か見かけたことがあった。ブラジルでの一羽の蝶の羽ばたきがテキサスで竜巻を起こす、とかいう眉唾な話だ。

「カオス理論の予測不可能性に比べれば、とても端的でわかりやすいサインだったのだ。それを見逃した責任は私にある」

「例えで全てを請け負おうとするのはよせ」

「所詮私に運命を変える力なんてないのだ。布田美月の心腹を暴くことなんて私には出来ない。柴崎陽太と布田美月の血が繋がっていると、私は考えながらも認めたくなかった。自殺を行った者と同じ遺伝子を持つ者は、そうでない者より自殺率が高い、そんなデータがある。血筋は思っている以上に我々を縛り付ける。柴崎陽太を止めることが出来なかった私に、同じ血を持つ布田美月を止めることが」

「君は神様か？」

「なに？」

苛立ちが言葉に現れた。

さっきからぐだぐだなに言ってるんだこのちんちくりんは、と

鍵括弧の暴言を無色透明の息でごまかして吐きかける。

「君は神様かと訊いたんだ。違うだろ。全ての責任を負うのは君じゃない、それをした自分自身だ」

「わたし、は」

続きの言葉が出なかったのだろうか、彼女は、考えこむように無言になってしばらくしてから口を開いた。

「違うんだ。風紀委員。私は神じゃない。ちっぽけな存在なんだ。それをたらしめる考えが私に渦巻いている」

涙のない泣き顔。地下のサンクガーデンは暗闇のベールに包まれている。

「人間の意味は私ごときじゃくじけない。決めきった心の頸木を抜くことなんて私には出来ないんだ」

いざ布田美月と会うとなると、やはり不安があるのだろうか。チヨコレートの興奮作用が効果を失ってしまったようで彼女の声に元気はなかった。

「正直言うとさ」

僕には上手い言葉が思い浮かばない。

「僕はまったく柴崎陽太に共感していない。語弊があるかもしれないがストレートに言わせてもらうなら、僕らは所詮他人なんだ」

「風紀委員……」

「だけど僕はこれ以上十和森高校の生徒が死んでほしいとは思わない。それだけは確かだ」

彼女は口を結んで僕の話聞いていた。偉そうな坂井珠希の姿は、ゴーストなしでみた水中の光景みたいにぼやけてしまっている。

「出来るだけのことはしよう」

たどり着いた美術室の扉を軽くノックした。

## 23…挫折リバウンド

目の奥に軽い痛みを感じながら、返事を待たずして白い光が溢れる美術室に足を踏み入れる。

布田美月は夕暮れ時と同じように扉側に背をむけ、せっせと筆を動かしていた。

美術部員の姿は彼女以外に見えない。独りきりの空間に現れた闖入者たる僕らに彼女は怪訝そうな視線をよこすだけだった。

「君に話があるんだ」

「どうぞ」

告白前のシチュエーションみたいなのに至ってクールに続きを促され、僕はなんだか出鼻をくじかれたみたいないな心もちになった。いや別に新鮮な反応を期待してたわけじゃないけど。

「えーと、言いづらいんだけど、」

「後ろにいる人は……」

僕に重なるように隠れているつもりだったらしい坂井珠希は、一発で看破されたのが不服なのか、どこことなく不機嫌そうに一步前に出た。

「いつぞやは世話になった」

「坂井さん？入学式のお詫びなら、別に」

「社交辞令は省略しよう。いくつか訊きたいことがある。まず確認させてくれ」

オドオドした態度ではない。チョコレート効果持続中の威風堂々とした調子で彼女はしっかりと立っていた。蛍光灯の光が彼女の髪に天使の輪っかを作り出す。

筆をとめた布田美月は、偉そうにしゃんと背筋をのばした坂井珠希と僕とを交互に視線をやり、どういう組み合わせだ、と言わんばかりに息を軽く吐いた。



「これはお前が落としたものだな」

いつの間にとったのだろう、屋上で拾ったハンカチを坂井珠希は軽く掲げた。

それを視界におさめた布田美月はピクリと微かな動揺をみせたが、質問には答えなかった。

「お前のものではないのか？人違いならそれでいいのだ」

母親が子供にする意地悪のように、くるりと踵をかえし、廊下側を向いた。違うなら帰る、と口には出さずに脅しているみたいだ。

「わたしの、です。どこかで落とした私のハンカチ」

少し慌てた様子で布田美月は声を荒げた。「ほう」と息を漏らし、坂井珠希は再び彼女の方を向く。

「それは確かか？これは男物だが」

「ええ、間違いありません。わざわざ届けてくれてありがとうございます。困ってたんです」

スラスラとお礼を述べながら立ち上がる。そのまま歩きだした彼女を、僕はよく出来た劇を鑑賞するように眺めた。

「どこに落ちていたと思う？」

ハンカチを受け取ろう伸ばした彼女の指は、メドゥーサに魅入られ石化したみたいにピタリと止まった。

「さあ。わかりません」

「屋上だよ。貯水タンクの下にな。風に流されたのだろうか、遠くに飛ばされなかったのは幸運だった」

「そうですか」

奪い取るようにハンカチを取り戻すと、素早く四つ折りにしてブレザーのポケットに大事そうにしまい、「どうも」と端的に礼を述べた。そのまま踵をかえし、再び絵に向かおうとした彼女に坂井珠希は確定事項を述べるように呟く。

「貴様は死のうとしているな」

一瞬にして空気が凍りつく。会話に参加してないのに心臓の鼓動

が、耳の奥でマグマみたいに胎動していた。

「意味がわからないです」

当たり前前の反応に僕はそっと胸を撫で下ろす。いきなり金髪の少女にそんなことを問われ、混乱しないやつの方が珍しい。

とぼけているのかもしれないが、ただの杞憂である可能性のほうはずっと高いだろう。

「なんなんですか。いきなり」

「いきなり、ではなからう。少なくともここ一週間は死のうという思いが強まっているのではないか」

「勝手に言ったらば」

冷ややかに布田美月は言い放った。僕はそれを合図にするように、帰ろうぜ。落とし物届けられたんだからそれでいいだろ」

小さな肩にポンと軽く手を置く。僕ら三人の他には並べられた石膏像の視線がなく、今の様子を言いふらされる心配はない。

「フェンスの一部が沈んでいた。乗り越えようとした者に体重をかけられたからだろう」

「……」

「学校から飛び降りるのに必要なものは覚悟と羞恥心、そしてタイミング。こいつに足りなかったのはどれだ」

僕の手を優しく振りほどいて坂井珠希は布田美月の背中にそう語りかけた。彼女は振り返ることなく俯いたまま足を止める。

僕はなにも言えずに目をそらした。

「お前は屋上の鍵を持っているな」

「なにを」

「ドアノブにつけられたカバーを外したのも」

栗立った両腕を庇うように抱く。

「だから、だからなんですか？」

面倒くさそうにだが、布田美月は否定をしなかった。認めたのだ、名をかたり屋上の鍵を無断で所有していることを。

「屋上の鍵とかカバーとか、その程度の事で私が死にたがってると

決めつけないでください」

開き直ったのか、彼女ははっきりと鍵の所有を認めた。驚いたのはこっちだ。まさか本当に予想が当たるなんて。

「陽向ぼつこというわけではあるまい。なんの目的があつて鍵を無断借用した？」

「答える必要ありません。ただの規則違反ですし。先生に報告するつもりなら、どうぞ」

ズバリと言い当てられたら、居直るくらいしか対処法がないのかもしれない。

「仮に私が死のうとしてるとして、無責任に他人の心情を語るなんて失礼極まりないです」

「私は説得したいのではない」

彼女はそう言ったが、僕らの行動原理自体がその二文字でなりたっていた。

「ただ言わせてほしいだけなのだ。突発的な決意で自らを死に至らしめるのは簡単だが、一時的解決にも救いにもならない。お前が死んでも世界は変わらないが、生きていれば変わるものもある」

「死のうだなんて考えていません。的外れな説得です」

「ほう。ではなぜ鍵を事務室に返さない。いつでも死ぬるといふ余裕が欲しいからではないのか」

「まさか」

振り向いた布田美月はおどけるように声を弾ませた。初めて彼女が楽しそうに笑った姿を見たが、どことなく作りかけのジグソーパズルのように歪つだった。

「カバーを外したのと鍵を返さないのは、いつでも気晴らしに屋上に行きたいからです。昨今の受験戦争がどれだけストレスになるか、ランクが飛び抜けてているあなたにはわからないでしょう」

「わざわざ屋上に足を運ぶ理由がわからないがな。高いところなんてこのあたりにはゴマンとある」

ドラマなんかでみる警察の取り調べよりよっぽど穏やかな声音で

あるが、坂井珠希の言葉の節々はナイフの切っ先のように鋭く彼女をえぐる、そんな風に思った。

「飛び降りなんて恐ろしいこと、しようとする理由がわかりませんね」

「なにかしらのメッセージがあるのかもしれない。本人以外にはわからないが」

「言いがかりはよしてください。長山さん、あなたからも言ってみてくださいよ」

急に話を振られて、僕は戸惑いながら、坂井珠希に視線をやった。「やっぱり勘違いだったんじゃない？」

僕は陰悪な雰囲気になるたけほどそうと軽い調子でそう言った。

坂井珠希は僕の方を見もせず親の敵のように布田美月を睨みつけている。

しばらくしてから、小さな口を開いて彼女は呟いた。

「柴崎陽太に頼まれたのだ」

「な、なんでッ」

不自然な笑い顔が途端に凍りつく。坂井珠希は首を吊りこの世を去った十和森高校の生徒の名をあげた。

実際のところ彼女が柴崎陽太に頼まれたのか、会ったこともない僕には嘘かどうか判断はつかない。だけどただの演技と割り切るには坂井珠希の瞳は哀しげだった。

「先輩が、なんで……、なんて言って」

震える唇で布田美月はそう尋ねた。実際は兄と妹の関係だと僕らは知っているが、学校では先輩後輩の仲で通していたのだろう。

「直接頼まれたのではなく、間接的にだがな。月並みな戯言でお茶を濁すわけではないが、貴様が死んだところで柴崎陽太は喜ぶはずがない」

「せ、先輩がどうだろうと私には関係ないです。突然なにを言い出すんですか」

ふるふると自らに確認するみたいに彼女は首を左右に揺すった。

「お前ら二人が兄妹だということを私はどうに知っている。それをひた隠しにする理由も想像くらいはな」

「さ、坂井さん。あなたは」

「だからこそ言うのだ。ただの思い過ごしなら聞き流してくれてかまわない。たが一抹でも死にたいと考えているのなら彼はそんなこと望んで」

「だまれ」

小さな呟きのような命令に、きよんとした表情で坂井珠希は唇を閉じた。

「黙れ！」

それを見計らったかのように堰を切った布田美月の叫びは僕らの肩をびくりと震わせた。

「あなたになにがわかるんですか！事情も知らないくせに知った風な口をきかないでください」

「いや違う、わたしは」

「彼のことを過去にしようとしている全校生徒に思い出させてやるだけです！それが罪なら、忘却のかなたに存在を追いやることは罪じゃないんですか！」

叫び。痛々しいまでに、生々しい叫び。

「安い命が屋上から鮮血な花びらを散らすだけで柴崎陽太を忘れなくなるなら、私はなんでもやります。無関係者がしゃしゃりでののはやめてください」

「死ぬことが悪いと言っているのではない。柴崎陽太の気持ちを汲んでやれと言っているのだ」

まさか本当に。

平静を忘れ駄々っ子のように怒鳴り散らす彼女は、自殺したがっているで自分で認めたようなものだった。

「お兄ちゃんのことをロクに知りもしないあなたが私に口出しする権利はない。自殺が駄目だと言うのなら、自由に死ねない世界が悪いと叫び飛び降りてやります」

「無関係でも他人が死ぬなんてこと、あまりにも救われないじゃないか」

「あなたが私たちを気にかけるなら、それは無駄なことだと鼻で笑って記憶に植えつけるだけです」

ダンと、足裏で床を踏み鳴らした。

「ありのままを受け止める気がないならほうっておいてください！」  
「ふざけるなよ。自分たちのことばかりじゃないか」

たまらずに声をあげた僕に布田美月は胡乱な視線を寄越した。

「柴崎陽太がなんだ、バカげた自殺で僕らの青春を汚す権利を君が持っているはずないじゃない」

「私が汚点だというなら、それで結構。これは私たちの責任なんです」

自虐的な彼女の瞳にはじんわりと涙の粒が滲んでいた。

「関わらないでください。それだけが願いです」

「死にたいと願うのは君の勝手だ。だが実行に移すというなら迷惑のかからない方法をとれ。ただでさえ敏感になってるんだ。簡単に死ぬると思うなよ」

彼女は救いを求めている。誰かに助けてと叫んでいる。その声は僕に、ましてや坂井珠希に向けられたものではない。叫びは常に退場者に向けられている。だからといって、どうしようもないと腕を組むわけにはいかないのだ。

「柴崎陽太の墓に花を手向けることが、君が死ぬよりよっぽど供養になるだろ。それに、約束したじゃないか、その絵の完成品を僕に見せてくれるって」

蛇籠の森の入り口でみた彼女の姿を思い出しながら、精一杯、正直に自分の気持ちを吐き出した。その方が、彼女の心に響くと思うたからだ。

「うるさい」

でも、駄目だった。

僕らの説得が彼女の心に響くことはなかった。

「……最後に一つ聞かせてくれ」

今にも泣き出しそうな表情で坂井珠希は、呟くみたいに尋ねる。

「いつ、死ぬ気だ？」

「フランダースの犬で」

落胆は濃い、僕は自分の無力さに崩れ落ちないよう足に力を入れながら、その奇妙な返答を聞いた。

「ネロは自分の絵が認められたことを知らずに、この世を去りました。アロアは彼の才能を信じそして結果を受けとった」

「そうか」

坂井珠希は静かに頷くと、数分前に見せた涙のない泣き顔で、ドアを開けて廊下に出ていった。僕は、自分がどうすればいいのかわからなくて、すがりつくように彼女に続いて美術室を後にする。

背後では再び書きかけの絵に向かおうと歩き出した布田美月の気配がした。

## 24…落胆シングル

練習に励む運動部の声が黒色広がる夜空のキャンパスに響いていた。市の競技場で走り込みをする陸上部、ライトの灯りで白球を追う野球部、混じり合った彼らの声は映画のワンシーンみたいに現実感をひどく希薄なものにしていく。

「どうする？」

聞こえるはずのない悲鳴、考えれば考えるほど頭を揺すりたくなる。腐りきったドラマの脚本のほうはまだしっかりしているだろう。

「どうする、とは？」

「だから、どうにかして布田美月を思い留めさせなくちゃ」

ひたひたと歩く坂井珠希は、真夜中の校舎を徘徊するセルロイドの人形にしか見えなかった。生気が感じられない。

「行動とは複雑なプロセスを経て行われる心理の因果だ。私の言葉が彼女の心にバグを生み出すに至らなかった」

「言ってる意味がわからない」

「もうすべておしまいなのだよ、風紀委員」

バサリとタオルケットを払い、顔を見せた坂井珠希は、その青い双眸で僕をジッと見据えた。窓からは月灯りが差し込んでいて、舞った埃がキラキラと光の筋を作り出す。

「私の声は響かなかった。潮時だ。お節介やきは幕を引くべきなんだろう」

「あきらめる、というのか？」

泣き出しそうな顔で彼女は詩でも詠むように、澄んだ声で呟いた。「世界は常に離れて落ちる。適当に生きたら適当に死に、今日の私は昨日とは違う。アポトーシスは繰り返えされ、世界は環の中で運命を待つ」

「真面目に答えろよ！人の命がかかってるんだ！まだ一回しか会っ



てなくて、諦めるなんて」

「11月3日は絵画コンクールの発表日だな。結果を見届けたら布田美月は死ぬ。これはもう確定事項なのだよ」

「なんで、11月3日……」

泰礼祭が予定されていた日。絵画コンクール。フランダースの……。先ほどの意味不明な発言が耳に蘇る。

「そうか。兄の実力を見届けたいのか」

「今の彼女にとってはそれが全てなのだろう。フェンスを乗り越えるほどの決心を持つものが思い留まるにはそれなりの理由が必要なのだ」

彼女は目を閉じ、再びタオルケットを頭から羽織ると、そのまま歩き出した。

僕は窓の外の夜空を一度だけ見上げて彼女を追いかける。欠けた月には叢雲がかかっていた。

「まだ時間はあるじゃないか。その間に説得できれば」

「無駄だよ」

タオルケットからはみ出した金色の髪が不可思議な色を放っていた。

「人の決意はそう簡単には変えられない。確定事項は揺らぐことなく、整った因果律の修正は、ただの人にはできないんだ」

「やる前から諦めてたらそりゃ無理だろ！やってみなくちゃわからないことだってある。まだ、自殺すると決まったわけじゃ」

綺麗事だとわかっていた。先ほどの布田美月の瞳には並々ならぬ覚悟があった。僕ごときじゃ彼女の岩のような心は動かせないだろう。坂井珠希でも、きつと難しい。

「私は知っている。人は常に死と隣合わせだ。権利を奪う権利など、誰にもないのにな」

行きは長く感じられた道のりが、帰りは短く感じられた。彼女の存在感が真夏の陽炎のように不確かなものになっていく。

「待ってくれ。坂井さん」

自分のクラスの下駄箱で靴を履き替えている間に、玄関のガラス戸を開けた坂井珠希は僕を無視して校舎の外に出ていた。慌ててローファーをつつかえながら、彼女の後を追う。冷たい夜風が僕の頬を殴った。

「おい、待てよ！本当に終わりにするつもりかよ！」

校門には見慣れた赤いセダンがあった。鳥山千歳の迎えの車だ。

「さよなら風紀委員。私たちの縁もこれまでだ」

「頼むからふざけないでくれ」

「相談に乗ってくれて嬉しかったし、不謹慎かもしれないがこの数日お前といっしょにいられて楽しかった」

振り返りもしない坂井珠希に追いつがるように、僕も足を動かす。「学校に行けばいつでも会えるのに今生の別れみたいな言い方はよせ」

「布田美月の件はこれでおしまいだ。だのに我々が会う理由もなからう」

彼女は振り返りもしないで後部座席に乗り越んだ。

「そんな終わり方ありえないだろ！」

僕の声は彼女に届かない。布田美月に、届かなかったように。車の横に立って携帯をいじっていた鳥山千歳はなにがあったのか、と僕らを見ていたが、説得に失敗したと想像がついたのか、少し悲しそうな瞳で駆け寄ろうとする僕と車との間に割りこんだ。

「どいてくれ、千歳。そのチョコレート症候群と話をさせろ」

「それはできないわ」

「どうして！」

声を荒げて長身の彼女を見上げる。

「今のあなたは先生を傷つけることがわかってるから」

「そんな、こと」

「ごめんなさいね」

「……」

軽く肩を押され、大人しく僕は後ろに下がった。

静かな予感があった。ここで別れたら、もう二度と会えないような、不吉な予感が。

だけど、それがわかっていても僕には、

「さよなら。あなたとまた調べ事でもしたいわね」

どうしようもなかった。

車は遠く小さくなっていく。

排気音が運動部の掛け声と混じって、切ない音色を奏でていた。

こうして、僕の体験した奇妙な4日間は幕を下ろす。

自殺志願者を止められず、坂井珠希の頬に笑い皺が刻まれることはなかった。

布田美月は11月3日以降学校の屋上から飛び降り、僕らの心に残味の悪さを植え付ける。

僕は、そんな彼女たちの無念を知らながらのうのと生き、平々凡々な人生をしっかりと歩んじゃうわけだ。体中に茨が巻きついていくのに気づかないフリして。

次の日は憂鬱をつめこんだチョコレートボックスのように、最悪な気分が僕の体内で沈殿していた。

机にだらけて、朝のホームルームが始まるのを待つ。退屈しのぎに首の位置をころころかえながら、死ぬ気もないのに、この奇妙な4日間を走馬灯のように思いだしていた。

1日目は実に濃かった。早朝、屋上で坂井珠希に会い、放課後にハンカチを拾い、帰宅途中に花を手向ける女生徒を見かけた。夜中には拉致られ、そこで坂井珠希と再会し事情を知った。

休日である2日目は、千歳と一緒に柴崎陽太の自宅や図書室に行ったり、彼が首を吊った現場に吊いに行ったりもした。

3日目は柴崎陽太の所属していた美術部を訪れ、下校中車内で坂井珠希の推理を聞き、自殺志願者は布田美月だと僕らは決めた。

そして、昨日。布田美月に問い詰めたのだ。予想は当たっていたが、残念なことに、自殺を心に決めているらしい。

説得しようとしたが駄目だった。普段気丈な坂井珠希も、落ち込んで、この件に関して諦めてしまったようだった。

あんなに止めてやるといきりたっていたのに、どういう心境の変化なのだろう。『運命』や『決意』というぼんやりとした表現を多用していたような気がするが。

僕も諦めるべきなのだろうか。布田美月の覚悟を決めた目を、なよなよとした僕の言葉で変えるなんて、きっと不可能だ。

ギュッと握り拳をつくる。

そう、僕じゃ、一人だけじゃ、後味が悪いけど、これで、おしまいなんだ。

「よお。長山」

整髪料の甘い香りを鼻で感知ながら声がかけられた方に首を回して見てみる。

「ああ、おはよう」

「少し話があんだけだよ」

「なに？」

親の敵のように僕を睨みつけ、クラスメートの志茂田は普段見せるチャラけた雰囲気を尖らせるように言った。

「ここじゃ話しづらいから、体育館裏に来いよ。教室じゃ誰が聞き耳たててるかわかんねーからな」

「いいけど、どうしたのさ、真剣な表情で」

「グダグダうるせーな」

舌打ち混じりの威嚇とも取れる声。肩を軽くすくめるだけで聞き逃し、なにも言わずに立ち上がる。何故怒っているのか知らないが、僕から積極的に志茂田にちょっかいを出したことはない。誤解は明白、無実だ。

「あっ、今じゃねえ」

声が一瞬にして、おどけたものになる。僕が「え」と呟くより早

く、またいつものにやけ面で彼は続けた。

「放課後に、な」

志茂田は、そう言い残すと、スタスタと自分の席に戻っていった。僕は彼の背中に小さく「了解」と告げる。

一体なんだというのだろう。まあなにを考えているのか知らないが、相手するのが面倒くさいことは確かだ。

生あくびをかみ殺して僕は再び席についた。そのままボーとしてもよかったのだが、退屈ほど時間の歩みを遅くするやつはいないので、なにか暇つぶしの道具がないかとカバンに手をつ込んだ。

坂井珠希と一緒に過ごす日々は、非日常的で、ただの学園生活じゃ味わえないスパイスの効いた4日間だった。なんだか自分が物語の主人公みたいに感じられ、きちんとした結末が訪れるもんだと勘違いしてしまったのだ。そうそう漫画やアニメみたいに上手くいくはずなのに。

柴崎陽太は首を吊って死に、妹の布田美月は飛び降りる。

誰にも止められないのだ。ただの、一般人の僕では。

カバンを漁って出てきた絵画コンクルールのパンフレットを、机の上に広げて、僕は悔恨の念を吐き出さないよう下唇を強く噛んだ。

柴崎陽太の『shelf』を眺め、固く拳を握りしめる。

蒼海のような澄んだ瞳。稲穂のように流れる金色の髪。

青い目に涙はなかった。だけど彼女は泣いていた。

「まだ、間に合う」

僕は自分に確認するように呟く。

11月3日まで、まだ一週間近くある。その間になんとしても布田美月を説得するのだ。

たとえ一人でも、このまま終わらせるのは、あまりにも報われない。

死ぬことがゴールではなく、死を受け止めた上で強く生きなければならぬことを僕は布田美月に伝えなくてはならない。

できるのか、一人で？

浮かんだクエスチョンを頭をふって考えないようにする。死生観について考えたこともなかった高一が、岐路に立つ少女に道を指し示すことがおこがましいということくらいわかっている。

それでも、僕は……。

「お前その絵好きだよな」

落ち込みはじめた思考を浮上させるように、心地よい声が耳に飛び込んできた。振り返ると前屈みになった裕貴が微笑を浮かべ立っていた。

おはよ、と軽く手をあげ、裕貴はカバンを自分の席に置いた。

「気が抜けたからか、今日は早起きできなかったぜ」

「ああ、一番登校だっけ。そういえば遅かったね」

「昨日はよく眠れたからな。ストレスフリーってやつ」

時計をチラリと見れば、ホームルーム開始時刻まで10分を切っている。いつも僕が学校に来るより先に教室にいる裕貴にしては珍しい時間だ。

「ストレスなんか感じてたんだ。テスト前だから？」

「お前……」

残念な子を見るような目つきで裕貴は僕を見た。テストは始まったでもないし、変なことを言った覚えはないのだが。

「どれだけ鈍感なんだよ、このバカ」

「あ」

間抜けすぎる自分の頭を殴りたくなった。昨日は裕貴が僕に思いを告げた日じゃないか。

こんだけ鈍い僕相手なら、そりやもう凄いストレスを感じていたに違いない。

「はあ、私の希望はいつ叶えられるんだろ」

「あ、えっと」

ため息まじりにそう言われて、僕は目をそらした。

「白にゃんこの絵が好きなくせして、京はちっとも叶えてくれないからな」

「ど、どういう意味さ」

「こないだ言っただろう。花菱草の花言葉は『私の希望を叶えてください』。ほんとお願いしますよ」

茶化した裕貴の声がプリントされた柴崎陽太の絵に染みこんでいく。

描かれたオレンジの花。

「それって」

青い眼の、猫。

「スケッチブックの!」

僕は叫びそうになりながら立ち上がった。

『猫みたいな女生徒』。柴崎陽太のスケッチブックに描かれた坂井珠希には、そう説明文が載せられていた。

「お、おい、急に立ち上がるなよ。びっくりするわ」

「裕貴、このオレンジ色の花は」

「あん?なんだよ気持ち悪いな。だからそりゃ花菱草だろ。花言葉は『希望』『和解』『私の希望を叶えてください』」

「それは間違いないの?」

「ああ、お前が女らしい趣味持てって言ったから、こっちも必死だったんだぜ」

坂井珠希は気づいていたのだろうか。この絵に隠されたメッセージに。

いや、多分気づいているに違いない。

その上で彼女は、あきらめたんだ。

## 25…放課後タペストリ

描かれた青い目を持つ白い猫。バックに段々に咲いた花菱草。これらがもし、僕の考える暗号めいた意味を持つなら、それこそ坂井珠希は救われない。

猫は異人を、花菱草は希望を託す意味を持つならば。

「裕貴、僕はもうしたらいいと思う？」

袋小路に突っ込み、行き先を見失ったまま、胸が締め付けられていた。

坂井珠希はきつと気づいている。柴崎陽太が託した意味に。

「事情が飲み込めないんだけど」

航路を見失ったまま波を漂い、僕の思考は助けを求めるように何も知らぬ裕貴に教えをこいていた。

「期待に応えることができなかった時、人はどれだけ傷つくの？」

「よくわからないが、自分なりの答えでいいんだな」

「うん。意見が訊きたいんだ」

自殺を止めるようにお願いされていたのだとしたら。そしてそれを叶えることが出来なかった時、彼女は何を思うのか。

僕は気張った関節の空気を抜くように、ゆっくりと席についた。

「そうだな、立場にもよると思うが、私なら、きつと落ち込む」

「プレッシャーとか抜きにして、期待に添うことが出来なかった場合だよ？」

「もの凄い落ち込むね。自分がやるせなくて。ほら、私もさ、両親とのことがあるじゃん」

裕貴は昨日見せた涙を忘れさせる純粹な微笑みを浮かべた。

「叶えられない希望を必死になって達成しようとしてさ。どう足掻いても無理なのに、頑張っちゃって、その結果自暴自棄ですよ。いや、ちよつと違うかな、心ここに在らず、みたいな状態」



「記憶がないからなんとも言いようがないけど、裕貴は昔から元氣澆刺だったと思うな」

「救われたからね、そりゃ」

絵が誉められた幼稚園児のように誇らし気に、彼女は鼻を鳴らした。

「あの時のお前の明るさに、私は眩しいと感じながらも、ただ無性に惹かれたんだ。友だちってのはいいもんだな、うん」

「やめてくれ、恥ずかしい」

耳まで熱く感じながら、僕は質問を続けた。

「そ、それで僕はどうしたらいいんだ？」

「期待に添うことができなくて落ち込んでるやつに、なんて言葉をかければいいのか、って聞いてんのか？」

「うんと……、まとめるとそうなるの、かな」

どうしようもない僕には、裕貴が光に感じられたのだ。相談というわけではないけど、彼女の言葉は僕に垂れる一本の蜘蛛の糸みたいなものなのかもしれない。

「最初の質問に戻ったわけだな。お前のことだから普通の答えは求めてないんだろ。励ますとか、見守るとか、そういう次元の回答はお呼びじゃないと」

無言で頷いた。事情を知らない裕貴に言う気はなかったが、僕の質問の対象には坂井珠希はもちろん布田美月も含まれていたからだ。

「簡単だよ。お前は考えなくていい」

「見守るといふことか？」

それではダメなのだ。それではいずれ、布田美月は死んでしまう。

「違うよ、京。お前が考えなくても落ち込んでるやつは、勝手に助かるんだ。だからお前はそいつが助かるまで道標になっていればいい」

抽象的な表現が、僕には理解できなくて、なにも言えずに言葉を飲み込んだ。

「京の明るさに私が助けられたように、お前はただ出来るだけのこ

とを身の丈にあつたやり方で示してやればいい」

「僕に、僕にそんな器用なことは出来ない」

「出来るよ、出来たんだ。過去のお前に出来て、今の京に出来ない道理はないだろ」

「裕貴は過大評価してるんだよ。僕には指をくわえて眺めることくらいしか、出来ないんだ」

悔しいが、僕は、観測者に憧れるだけの観客でしかなかった。済まし顔で劇を評価する、キツネ野郎だ。

「だから言っただろ。身の丈にあつた方法で、って。お前はお前が出来る最大限のことをなにも考えずにやればいい。それが良い結果に繋がるのは私が身を持って経験している」

「僕が、出来ること？」

それはなんだろう。

答えは、みつからない。いや、きっとそんなもの、ないのだろう。

「うだうだ面倒くさいこと考えてると、若ハゲになるぞ」

私、ハゲはちよつと、とおどけた裕貴に眉をしかめながらも、僕は彼女に感謝していた。

「……」

机に広げたままだったパンフレットをカバンにいれ、立ち上がる。今度は裕貴を驚ろかせないよう、ゆっくりだ。

「わかったよ」

「うん？」首を傾げた彼女に、僕は、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「僕は、僕が出来るだけのことをする」

「それでいいんだ」

方法の一つじゃない。無数ある選択肢のうち選ぶのは、一番手っ取り早いものだ。

「さしあたっては、裕貴、僕は早退します」

「ほわいっ!？」

バカにされても構わない。出した結論が、どんな結果を生み出そうと、僕は後悔はしないだろう。

「やることが見つかったんだ」

笑いたければ笑えばいい。間抜けな観客の僕にだって、納得のいかない劇に飛び込むだけの覚悟はある。

「お、そうか。なら帰れ。今ならまだ欠席扱いになるだろうし、なんか言われたら私が言い訳しといてやるよ」

「ありがとう、裕貴」

それは純然たる感謝だった。彼女は僕の中で一つの道を示してくれたのだ。そのプロセスがどんな因果を導こうと、この心からの気持ちは変わらない。

カバンを手に持ち昇降口に向かおうと歩き出した僕の背中に、裕貴から声がかけられた。

「一つ私からも質問」

正面を向いて奇妙な笑みを浮かべる裕貴がいた。

「いまの問いかけは坂井珠希関連？」

僕の方は向いていない。黒板から視線をずらさない彼女の言葉には穏やかな重みがあった。

「あ、えっーと、違うと言えばそうだし、そうだと言えばそうともとれる」

「なるほどね」裕貴はしたり顔で頷くと戸惑う僕に容赦なく続けた。

「坂井さんに伝えといて」

「え、なんて？」

「負けないから、って」

「う、うん」

「そんなじゃ、また明日な」

やっぱり勘違いしているな、と頷いた僕に朗らかな別れの言葉が紡がれる。

時計の長針は6を指している。

ともかく僕は一度家に帰らなければならないのだ。

教室の扉を閉めた僕の背後で「飼ってるペットのウサギが危篤らしい」とクラスメートの無粋な質問に言い訳する裕貴の声が聞こえ

た。なんだその乙女設定。戻ってきた時気まづくなる言い訳は勘弁してほしい。

それから一時間もしないうちに、自宅のドアに鍵を差し込み早すぎる帰宅をした僕は、まず職員室に電話をし、頭が痛いから休むと担任に伝えた。裕貴にはメールでその旨を連絡し、教室に顔を出していることで発生するクラスメートと教師との情報の齟齬をなるべく抑えるようお願いしといた。

なんだかんだで顔がきく裕貴なら簡単にやってのけるに違いない、と信じている。

親には悪いが、共働きという家庭環境はサボリの時に優位に働く。親と教師に若干の罪悪感を感じながら僕はパソコンの電源をいれた。完全に起動するまでに、部屋から持ってきたビデオカメラをケールで繋げ、全体の構造を再び頭の中でまとめることにした。帰り道で漠然と考えてはいたが、実際にカタチになるとなかなかな大変なのだ。起動しきったら、次はすぐさま撮り溜めたデータを編集ソフトに送る。

そこからは作業の繰り返しだ。タイムライン上を切り張りしたり、雑音をシャットアウトしたり、特殊効果を使って、シーン切り替えの違和感を無くしたりと、興味がない人が聞いたら眠くなるような単調さだ。

でも僕はそんな繰り返し作業が嫌いじゃなかった。

小学校の時、一番好きな科目は図工で、中学生の時は情報だった。だから入らなくてもいい高校の部活に映研を選び、楽しみを感じていたのだ。

なにかを作るという感覚が、胸に懐かしい感情を呼び起こす。さながらそれは、浜辺で作るサンドアートに似ている。土台を創り、城の完成を目指す。次はなにをしようか、どんなシーンを入れたら視聴者は飽きずに興味を持ってくれるだろう、世界を創りだしているはずの僕が一番、次になにが起こるかわくわくしていた。

裕貴に言われて気がついたこと。僕に出来ること。

そんなに多くない。

言葉なんてなくていい。

坂井珠希は下らないと笑うかもしれない。意味がわからないと吐き捨てるかもしれない。

構わない。評価を気にするやつに、作品なんて作れない。

ただ僕は、観てほしいから、創るのだ。

すべてを失ったと勘違いしてる馬鹿どもに、失ったなら創ればいいと教えてやりたいだけなのだ。

「あっと、忘れてた。尺も考えなくちゃ」

楽しさにかまけて継ぎ接ぎを続けるだけでは、良いものは産まれない。

最高の間というものがある。長すぎる映画は退屈だし、小説では重くなる。逆に短いものの足りないし、印象も軽くなってしまう。

どんなに独創的なものを創る上でも、守らなければならない最低限のルールというものがある。

「そうだな、この場合は」

動画に流すBGMに合わせた長さが適当だろう。

問題はずばらな僕は未だに流す曲を決めてなかったところにある。

「なにがいいかな」

口ではそう言いつつも、半ば感覚的に決めていたものがあった。

『tapestry』

キャロル・キングが1971年に発表した革新的なポップアルバムで、4つの賞を獲得し、未だに根強い評価をもつ。洋楽をあまり聞かない僕だが、名盤といったらこれが一番に浮かぶ。

収められた曲で捨てられるものはなく、いずれも名曲ぞろいだ。

彼女の歌う独特な孤独感は世界を虜にし、遠い島国の日本にも絶大な影響を与えた。

直撃世代でない僕の心をも、ここまで揺すぶったのだ。

『私の人生は豊かで気高い色合いのつづれ織り』で始まる表題作の

tapestry。僕の人生だって、誰の人生だって、きっと、つづれおりなんだ。

「……」

音楽データを動画に合うように変換する。

流れの中で僕は、タイトルを考えていた。

僕のネーミングセンスは皆無だ。だからいままで自分の撮ってきたものに名前をつけたことはない。だからこそ、意味があるのだ。名前のあるものにはなにかしらの意味が必ずある。きっと、どんなものにも。

僕の、放課後などの余った時間で学校を写して回った作品と叫べない稚拙なものにだって産まれてきた意味はきっとあるんだ。そう信じている。

「浮かんだ」

僕は一生忘れない。坂井珠希と一緒に過ごしたこの4、いや5日間を。だからこそ、つけるタイトルは、僕と彼女のつづれおりなんだ。

「……」

エディターに打ち込もうと思ったが、やっぱりタイトルをつけるのは恥ずかしいので、心の中に届めておくことにした。

## 26..爆発ジェラシー

休憩を挟んだり、細かい調整を繰り返したりと、気付いたらお昼休みと同じ時間になっていた。

完成させることができたが、抽出を繰り返したこの作品が、どのような評価を受けるか全く予想がつかなかった。

「ふう」

完成の安堵が喜びの溜め息をつかせる。曲が3分ちょっと短いので他の曲と合わせてなんとか7分にしたが、ショート作品としてはまあまあ長さだろう。

ともかく、完成したのだ。

撮影編集技術は稚拙、内容もあってないようなもの。それでも僕が創ったショートフィルムだ。

「学校にいるかな」

DVDに焼き、出てきたディスクをケースに入れて立ち上がる。

彼女の携帯番号を知らない僕には連絡の取りようがないので、運否天賦しか方法がなかった。

だけど、ここでグズグズしていても変わらないのは確かだ。

保健室でごろごろしている姿をイメージしてパソコンの電源を落とす。

「つて、ちよつと待て」

思わず声に出していた。そうだ、忘れていた。確かに僕は坂井珠希の連絡先は知らない、だけど、

慌てて自分の部屋に行き、机の引き出しから取り出したメモ。そこにはアルファベットの羅列で構成された、鳥山千歳のメールアドレスが記されていた。

そうだ。僕は鳥山千歳のメールアドレスを入手してたんだった。ムカつく事を言われながらも手に入れたメルアドだが、まさかこん

なカタチで役に立つとは思わなかった。坂井珠希の付き人的存在のこの人なら彼女が今の状況を知っているだろう。

件名に自分の名前を入力し、本文を打ちこむ。

『坂井さんは学校にいる？彼女に伝えたいことがあるんだ』

送信ボタンを押すと同時に僕は、玄関に行き靴をはいて、外に飛び出した。

学校に戻ることにしたのだ。

昼下がりの通学路は喧騒とは無縁で、この時間の登校が始めての僕には新鮮に感じられた。

先生には体調が良くなったと言い訳して授業に参加することしよう。放課後を待つのが一番だが、学生の本分は勉強、真面目な生徒で通っている僕には、サボりは罪悪感が激しすぎて合わない。何だかんだで昨日も五限目をサボっているし。

学校に着いたのは、ギリギリ昼休み中で、僕はその足で職員室に向かい、担任に考えていた言い訳をかまし、授業参加の了承をえた。素直に心配をしてくれた先生の優しさに、胸が締め付けられるような思いがした。

そのついでに放課後の視聴覚室の利用許可を取り付け、ひとまず教室に戻る。

「あれ、大丈夫？体調悪いって聞いたけど」

「ん、よくなったから戻ってきたんだ」

クラスメートの心配に適切な相槌をうちながら、机の上に五限目の教科書を広げる。

「お早いお帰りで」

裕貴の軽口を聞き流し、僕は持ってきたパンを頬張った。まだ先生が来るまでいくらか時間がある。

あとは、空き時間に坂井珠希を探すだけだ。

僕の甘い考えが砕かれたのは、英語の文章を子守歌に、うとうし



かけた時であった。ポケットの携帯が震え、目覚まし時計の代わりをはたしたからだ。

鳥山千歳からの返信だった。股の間でこっそり確認した内容に落胆する。

件名の『なんであんたがあたしのメルアド知ってんのよ?』はいとして、問題は本文だ。

『先生なら学校さぼってるわ』

ふざけるな。あの引きこもりが、と舌打ちしそうになって今が授業だということを思いだす。

さすがサボリのエキスパートだ。予想をしてはいたが、一番厄介なパターンだ。

『アパートに行っても大丈夫?』

数秒考えてから、そう返信することにした。

時間はゆっくり流れていく。英語の授業は暗号にしか聞こえない。

高校生の日常は大それたことなくただ緩慢に過ぎていく。それがおかしいことだと指さして糾弾する人はいないだろ。これから先の未来なんて、曖昧模糊だが想像はつく。受験して大学に行って、就職うまくいくとは限らないけど、僕の人生、よっぽどのがない限りこのレールからはずれることはないだろう。

『べつにいいわよ。ただし、ちゃんと授業をうけなさい』

五限目の終わりにそのメールを確認した僕は、携帯を先生にバレないようにしまつて柴崎陽太について考えていた。

十和森高校の偏差値は平均よりも少し上くらいだ。自殺というマインスの風評で、来年の受験者は減少が予想されるが、酷い状態にはならないだろう。

柴崎陽太は三年だった。学校の看板を背負う最上学年だ。彼がこの学校でなにを学んだかは僕は知らない。だけど彼が十和森高校に通っていたのは事実である。

彼を死に追いやったのはなにか、布田美月を残してまで、あの世

に旅立った彼の覚悟を僕は無責任と言えるのか、今の僕にはまだわからない。

放課後、ホームルームが終わると同時に、蛇籠の森へ向かった。柴崎陽太が首を吊った場所。そして僕が拉致された場所でもある。そこから位置を確認するように、4日前の出来事を思いだす。千歳の車がどの方向に向かったか、記憶ははっきりしないけど、歩いていけない距離じゃないはずだ。

始まりはいつもここだった。僕の退屈な人生に刺激を持ち込んだ嵐もここが始点だったんだ。だから終わりの幕を引くのは、ここが一番だろう。

途中までは見覚えのある道だったし、方角さえわかっていたら坂井珠希と鳥山千歳が住むアパートにたどり着けるはずだ。森は中継地点だが、僕の高校一年生的一幕の終わりに、蛇籠の森の木々のざわめきは教会の静謐さ通じるものがあるだろう。

二人の住むアパートに向けて、歩きだそうとした時だった。

「見つけたぞ、長山」

聞き覚えのある声をかけられ、僕は視線をやる。駆け足で教室を出ていった僕に「さようなら」を言い忘れた、というわけではないだろう。苛立ちを隠そうともしない表情の志茂田が立っていた。

彼の後ろには、顔は知ってる程度の他クラスの生徒が二名立っている。

「やあ、志茂田。どうした？」

「なにをふざけたことをぬかしてやがる。体育館に来いって言ったじゃねえか」

「体育館？ ああ」

言われて今朝の記憶が蘇る。そういえば朝、机にだらける僕にそんなこと言ってたな。

「悪い、すっかり忘れてたよ」

布田美月の件で頭がいっぱいで他に気を配る余裕がなかったのだ。  
「怖くなって逃げたんじゃねーの？」

志茂田の後ろでへらへらしていた男子が茶化するようにそう言った。  
意味不明な笑い声に、僕は純粹に首を傾げる。彼はそんな僕を小馬鹿にするみたいにニヤニヤしながら続けた。

「はは、呼び出しにビビって逃げたのに、捕まるなんてかつこわりいな」

「逃げる？」

放課後、体育館裏？

ああ、なるほど。ベタな場所を選んでくれたものだ

「喧嘩の呼び出しだったのか」

合点がいったと手を叩く、その手垢のついたジェスチャーは、精一杯の虚勢だった。

「まさか、ほんとに気づいてなかったのかよ。うけるわ」

「悪い悪い。結構鈍いんだよ」

和やかにジョークを飛ばしあっているようにみえるが、内心竦みあがっていた。

まさか3対1で喧嘩しようってんじゃないよな。それは随分と卑怯じゃないか。

「でもなんで僕がリンチに合わないといけないわけ」

「てめえのそーゆー態度が鼻につくんだよっ！」

志茂田が怒りを爆発させるみたいに怒鳴った。負けん気強さ担当が、脳内でおやおやと肩をすくめる。

「愛しの裕貴ちゃんがチミに泣かされてんのを、見たからだよね」

「ああ、昨日の話ね」

志茂田の後ろのおちゃらけた男子が彼に代わって返事をしてくれた。先ほどから気さくに会話してくれる彼とは、うまくいけば友達になれたかもしれない。

「余計なことやってんじゃないやねえ。俺はただ単に長山をボコしたいだけだ！」

「誤解してるみたいだから言うけど、別に僕が裕貴を泣かしたわけじゃないよ」

100パーセント僕のせいだが、我が身可愛さに嘘をついた。それくらい許してほしい。昨日の追いかけて色んな人に見られただけで、ある意味罰は受けている気がする。

「橋本は関係ねえってんだろ！ムカつくんだよてめえはよおっ！」  
裕貴を好きな志茂田が、僕にジェラシーを抱くのは無理のない話かもしれない。

「それなら謝るから勘弁してくれないか。痛いのが嫌なんだよ」  
「ぶっ、お前おもしろいなあー」

志茂田はピクリともしなかったが、後ろの彼は心底おかしそうに笑ってくれた。

「いやあ、でも悪いねエ。志茂田との付き合いのが長いからなあ。  
許してやれねえんだわ」

「そのところをうまくやって下さいよ。お金ならないけど、頭ならさげるんで」

僕の軽口が気に食わなかったのか、曇り空に志茂田が怒鳴り声が再び響いた。

「ふざけんなって言ってんだろお！」

「あー、もう君はどうしたら許してくれるんだよ。裕貴を譲れってか？そういうことは本人に言ってくれよ」

場がこじれるから昨日裕貴から一種の告白を受けたことは秘密にしといた。まさか裕貴を取り合ってこれから殴り合いが始まるなんて彼女は思ってもいないだろう。

「土下座して泥に額をなすりつけるんなら考えてやるよ」  
ふざけた提案に反射で「嫌だよ」と応えていた。

「なんで僕は悪くないのにそんなプライドをかなぐり捨てたような事しなくちゃならないんだ。頭を下げるとは言ったが土下座まではしたくない」

「ぜってー許さねえ！」

思ったことをすぐ口にしてしまうのは僕の悪い癖だ。

「ま、そういうわけだから堪忍してくれ長山京クン」

「……」

志茂田の後ろの二人もやる気満々みたいだ。1人は結局一言も口を開かなかったけど。

僕は喧嘩が得意ではない。女である鳥山千歳に負けるほどだ。万に一つも勝ち目はないだろう。

だけど展開を少しでも有利に進めたい僕は考えうる最大の戯言を吐き出す。

「3対1じゃさすがに勝てそうにないね。だから僕は一番最初に殴りかかってきた人だけを相手することにしたよ」

「はぁ？」

「簡単だよ。僕は全身全霊を持ってそいつの生爪をはぐ、目潰しをする、指を噛み切る。言っておくが、僕は本気だ」

「はっ、つまんねー脅しだな！」

「志茂田、君が一番か？ 3対1なら正当防衛だろ。他の二人に殴られながらも、僕は君しか相手にしない」

いい感じに場が凍りついた。

「君は早めに僕が気を失うことを祈るんだな。さっき言ったことは最低ノルマだ」

「その前に殺してやるよっ！」

下手な挑発は志茂田には通用しなかったみたいだ。他の二人は少し体を強張らせていたけど、日頃の恨みか、志茂田だけは怒りの力をガソリンに僕に元気一杯に向かってきた。

僕は、数秒後、ぼろ雑巾みたいにされた自分のイメージを振り払い、精一杯の抵抗を見せつけてやろうと静かに気合いをいれる。

まあ、死にはしないだろう。

## 27…逆転パラレル

アーメンと心の中で十字を切り、右足で蹴りこんでやろうと身構えた時だった。

「っあ！」

志茂田の体が宙を舞っていた。我が目を疑う。だけど確かに、僕に飛びかかろうとしていた彼の体は、ドシンと大きな音をたてて地面にとき伏せられている。

「千歳!？」

志茂田を叩き伏せたのは華奢な体つきの女性だった。びっくりして急に姿を見せた彼女の名前を呼んでしまう。

「あんたなにしてんの？」

「がはっ！」

きょとんとした表情のまま彼女は転がる志茂田に肘鉄を食らわせ、立ち上がった。

「いや、そ、それは僕のセリフ……」

志茂田の仲間であるはずの二人も助けるということを忘れて、ポカンと急な乱入者を眺めている。

「学校に行ってやろうって思ったんだけどね。楽しそうなことしてる連中がいたから、顔を出してみたってわけ」

笑顔で蹴りを加えている。志茂田は敵意まるだしの瞳で必死に千歳を睨みつけ、蹴りを食らう度に小さく唸った。

「お前えなにやってんだっ」

凍りついた時が流れだすように、仲間を助けるためか、志茂田の友人二名は、彼を足蹴にする千歳に走りよった。

千歳は涼しい顔で後退し志茂田から離れる。

「平気かつ、しも」

心配の声が最後までかけられることはなかった。空中に飛び上が

った千歳の強烈な足蹴りが首筋に叩きこまれたからだ。

演技くさいほど大きな声で、一撃をくらった彼は「おげえ」と志茂田の上に崩れおちる。

「戦いの最中に敵から目を離しちゃだめよ」

襟元を鷲掴みにし、サツマイモを引き抜くようなアクションで、千歳は彼を文字通り放った。下敷きになっていた志茂田が、ようやく呼吸を整えたのか、唾を飛ばしながら怒鳴り声をあげる。

「なんなんだっ、てめえ！」

「長山京の……友達？ うーん、ま、一応縁があるから」  
「くそ女あつ！」

腹部のダメージからか、声を上げるしかできない志茂田に代わって、無口な彼の友人が千歳に殴りかかる。

「おっと」

それを紙一重でかわし、手の甲で彼の顎をアップーのようにすくいあげた。

「……ッ」

「あら」

歯がカチンと鳴る音がしたが、彼が倒れることはなかった。それが意外だったのか、素っ頓狂な声を上げた千歳に、横からバットのように太い腕が襲いかかる。

「あなたボクシングかなにかやってる？」

頭を下げる簡単なアクションでそれをかわした千歳は、バスケットレーヤーが敵選手を抜くように華麗なステップで彼から距離を取った。

「あ、あのさ、暴力はやめようぜ？」

バトル漫画みたいな展開についていけない僕の正論は、間合いを図りつつ睨み合う彼らの耳には届かないようだった。

「ガタイがいいわね。少し骨が折れそうだわ」

「……」

ファイティングポーズを取ったまま、お互いにジリジリと距離を

詰めていく。

千歳が相手している男はかなり大柄で、ただの高校生には見えなかった。同じ制服を着てるのが奇跡みたいだ。

「っ！」

先に動いたのは男の方だった。シュという風切り音が、千歳の肩を掠める。ギリギリかわした彼女は、また彼から距離を取った。

激しい追撃が降り注ぐ。千歳はそれらすべてをバックステップでかわす。華奢な彼女の矮躯になぜそんな動力があるのか不思議でしようになかった。

「おい、やめろ木偶の坊！相手は女の子だぞ！」

見ているだけでは、だらしかなさ過ぎると、出来るだけ注意をひくように大きな声をあげながら、僕は彼に飛び蹴りを食らわせようとした。

「フ」

「どわっ」

鼻で笑われ、足を叩かれる。バランスを崩しすっころんだ。最高に惨めだった。

「ちえい！」

隙ができたとき千歳が雄叫びを上げて彼の腹筋に掌底をくらわせた。  
「う」

「目を離しちゃだめだって。喧嘩は試合じゃないんだから、イレギュラーがあるものよっ」

小さな呻き声を上げて、彼がよろける。

チャンスとばかりに千歳はむちゃくちゃな打撃を浴びせている。もうすでに護身術の域を脱していた。頭部鳩尾脇腹と連続で鋭い攻撃が叩き込める。足を碎かんばかりのローキックが決まり、彼は倒れこんだ。

それに踵落としてトドメをさした千歳は、蟻の巣を観察する無垢な少女のように、振り返り志茂田を覗きこんだ。

「あんまり京をいじめちゃだめ。窮鼠は案外強いんだから」



よくわからないが、感謝すべきだろう。僕の弱さは置いて、今は素直に千歳の強さに驚嘆だ。

勝てるわけがない。あんなキレのある動き、初めてみた。本当にテレビの向こう側の人みたいだ。

「誰だよてめえ！調子こいてんじゃねえ！」

「さっきも言ったけど友達だって」

見たままの感想を、包み隠さず言うなれば、志茂田の虚勢はひどく惨めだった。女性に助けられた僕に言えたことではないが。

「うるせえ！関係ねえ部外者が首を突っ込んでんじゃねえよ！」

志茂田の発言が、昨日の布田美月の言葉呼び起こす。関係ないから放っておいてくれと彼女は言っていた。

「それこそ関係ないわね。私がしたいからしただけ。友達助けるのは当たり前でしょ」

どこからどこまでが友達なのか、その線引きは曖昧だ。だけど、僕は坂井珠希はもちろん、布田美月も友人だと思いたい。当然、目の前で志茂田に説教たれる千歳もだ。

「私の力が必要だと思ったから、助けにはいっただけよ。京が断っても出来るだけのことはしたはずよ」

「気持ちわりいんだよ。うすら寒い友情ごっこがよおっ」

「結構よ。冷めているのがカッコイイと思うなら、あなたは私より悲しい人ね」

尚も言葉を紡ごうとした彼の肩に、先ほどまで地面でノビていた彼の友人が手をおいた。

「帰ろーぜ」

へらへらしていた、一番に千歳に吹き飛ばされたやつだ。リベンジする気はないらしい。

「ちっ」

立ち上がった志茂田は舌打ちし、僕などまるで無視するように痛み体を引きずり立ち上がった。同時に無口だがガタイの良い彼も立ち上がる。

彼はふらふらとよたつかず、歩くのが難儀そうな二人にしゃつきりと肩を貸した。タフだ。

とぼとぼと無言のままその場を後にする三人の背中に、

「ねえ、覚えてろよー、って言わないの？」

「うるせえ！死ね！」

千歳は無邪気に声をかけた。バカにする感じではない、驚くべきことに天然だろう。志茂田たちは、そのまま空き地の出口までたどたどしくも、歩いて行った。

「さて、それじゃ行きますか」

彼女は振り返り、エステ帰りのOLみたいにさっぱりした表情で提案してきた。鳥山千歳に逆らうのはよそう、僕は今日の出来事からそう胸に刻みつける。

「行くって、アパートですか？」

「いいえ、学校よ」

自然と敬語になっていたのに気づいていつもの口調に慌てて戻す。

「え、なんで。もう放課後で、なんにもないよ」

「先生をさっき十和森高校にお送りしたの。メール送ったんだけど届いてない？」

言われて携帯を確認して見れば、確かに連絡が入っていた。気づかなかったのは、きつとあの連中と絡んでたからだ。

「あ、わざわざありがとう。それじゃ十和森に戻ってみるわ」

「車だし送っていくわよ」

空き地から歩いてそんなに距離はない。親切心はありがたいが無用だろう。

「大丈夫だよ。歩いていける。君だって暇じゃないだろうに」

「今日は必修がないし平気。そうそう先生なら、あなたのクラブの部室にいるってさ」

「そうか。でもやっぱり車は遠慮させてもらおうよ」

大学生だったのか。モデルみたいにするりとした人だから、なん

だか意外だ。

僕らはそのまま歩いて道路脇に停車された彼女の赤いセダンの前で別れることになった。

「あ、あのさ」

「ん？」

車に乗り込もうとした千歳に僕は慌てて声をかける。振り返りざまの瞳に射抜かれなんだか気恥ずかしくなってしまう。

「き、今日はありがと」

クスリと見る者を虜にするような綺麗な笑顔を浮かべて、

「どういたしまして」

彼女はそう言い、ドアを閉めた。

十和森高校はどんよりとした雲に覆われ、なんだかいつもよりくすんで見えた。数時間で天気は下り坂にむかっているらしい。千歳と別れてすぐに到着した我が高校、郷愁的になるほど年月など経過していないが、校舎は僕の心に言い表せられない懐かしさを沸かせていた。

雲のむこうはきっと血のように赤い夕焼け空に違いない。それにつけてもネズミ色の空は恐怖を感じるより切なさを植え付け、ひんやりしだした空気も、一足早い冬の到来を告げるものみたいで物悲しいさを覚えさせた。

そんな感情をふりはらい、校門から一気に部室に向かう。

始めて坂井珠希と合った時に街を照らしていた朝日、美術室で布田美月を赤く染めた夕日、太陽は今日は輝いていない。だからこそ、失敗だらけだった僕の選択を洗い流すに絶好なのだ、と自分に言い聞かせ、所属部員僕一人の映研部部室の扉を開ける。

パキリという板チョコを噛み砕く音とともに、

「遅かったな」

昨日と変わらぬ口調で僕を出迎えた坂井珠希は、本に落としていた視線を緩慢に僕にむけた。

「繋がりなど断ち切れた関係だ。要件なら端的に言え」

冷たい仮面のような無表情で、彼女は僕を見上げている。

綺麗な青い瞳と流れるような金色の髪、無表情な彼女も女優のように様になっていたが、ロボットののように暗い坂井珠希はあまり好きになれなかった。仏頂面のなかにもコロコロ変わる百面相が彼女のいいところなのだ。そもそも小学生みたいな体格で笑顔がないのは不自然極まりなかった。

「完成したんだ」

いきなり言われても、意味がわからないだろうと、詳しい説明を加えようとした僕より先に、彼女は口を開いた。

「映画研究部の活動のことか？」

「あ、うん」

「よかったな」

素直な言葉に僕はたじろぐ。てっきり罵倒されるもんだと思っていたから、「それで？」と尋ねるように彼女は軽く首をひねられるとそれはそれで反応に困る。僕は慌てて言葉をつむぐ。

「見てほしいんだ」

「私にか？」

「うん」

「そうか」

彼女の続きの言葉が怖かった。断られるのか、承諾されるのか。どっちに転ぶのか不安だ。

「なにをしてるんだ風紀委員」

「え」いきなり沈黙を破るみたいに言われて驚く。

「早く見せてくれないか。お前の作品を」

「み、見てくれるの？」

「お前が見てほしいなら見るさ」

気のせいかな彼女の頬は赤かった。夕焼けはではないので、きっと照れているのだろう。

「ありがとう。それじゃ視聴覚室に行こうか」

今朝登校した時、部屋をとつといて良かったと、僕は自然と笑っていた。部室のパソコンで見てもよかったが、どうせならスクリーンで見てほしい。

「よかろう。風紀委員、よっぽどの自信作なのだろう？ 言っておくが私は辛口批評家だぞ」

「どんな内容か君は知ってるだろ」

なんだかわだかまりみたいなのが溶けて嬉しかった。

## 28…理論アナクロニズム

視聴覚室の防音壁が珍しいのか、金髪の少女は好奇心を隠そうともせず、あたりを忙しなく見渡していた。

端に置かれた再生機にディスクを挿入しボタンを押して、スクリーンを下ろす。

「なんだか緊張するな」

「どっしり構えてろ。観客のことなど気にする必要はない」

消灯し暗幕が下ろされ、外の明かりが徐々に切り取られていく。

白い壁に写しだされる映像だけが燦々と辺りを照らしてくれていた。パイプ椅子の山から、二脚だけ持ってきて、組み立て、坂井珠希に座るように促した。彼女は小さく顎を引いて、そこにちょこんと腰をかける。

プロジェクターが映像を流し始めた。

ゆったりとしたメロディーが聞こえてきて、十和森高校がスクリーンいっぱい広がった。

校門から玄関、廊下から教室、カメラは順繰りに進んでいく。普段見慣れた光景から、一般生徒は知らないであろう裏スポット的なところまで。

「青春に代替はない、とは言うけど、僕は学校があまり好きじゃなかった」

小さく囁く。鑑賞中のお喋りはマナー違反だが、製作者の品評くらいは許してほしい。

行動を拘束され他者と協調しなくてはならない学校という枠組みが、僕は好きになれなかった。

「だけど映研の活動を通して、自分の生き方が学べた気がするんだ。僕は、僕に良くしてくれる友達と一緒に、これから先も生きていきたい」

写し出される光景は、倶楽部活動に興じる生徒たちや、校庭を樂しそうに駆け回る同級生たち。

あの環の中の懐かしい感覚をとり戻したくて、僕はこんなことを始めたのかもしれない。

「……」

坂井珠希は無言で、食い入るように映像を観ている。少なくとも我らが学びや、退屈はしていないだろ。

映像は特別教室を映すようになった。理科室や家庭科室、……美術室などだ。順々に巡った動画が、やがて図書室についたとき、小さく息を飲む音がした。気になるものでもあったのか、と隣に視線をやってみたが、彼女は左手を顎にあて、口を結んだまま動画を見ているだけだった。気のせいだろうか。人気のない本棚を撮しただけのものが、彼女の心の琴線触れたとは思えない。

映像はまた校舎に移る。朝焼けに輝く廊下、階段。それに呼応するかのようにどこことなく切なげに坂井珠希が呟くみたいに言った。

「風気委員には私の出自を明かしていなかったな」

スクリーンから目を離さぬまま、彼女は続けた。

「私の家系は有名な資本家で、古くは武器商人として大成した一族であった」

いきなりの自分語りに、僕はポカンと彼女を見た。呆れたからではない、淡々ではあるが、一言一句に血の滲むような辛い感情が含まれていたからだ。

「海の向こうの広大な土地に、城と称しても相違ない屋敷を構え、私はそこで産まれ育った」

「突然、なんだ？」

「聞いてくれ、懺悔だ」

伸びる光の筋が、粒子のように細かい埃を照らしている。彼女の瞳はその光を反射して、僅かだか潤んでいた。

僕はなにも言えなくなって口を噤んだ。

「私には双子の妹がいた。両親と私たちとで4人家族だ。厳格な父、

包容力のある母、利発な妹、それが私の関係領域だった」

双子の妹、その新たな情報は、想像力を限界点に追いやった。彼女の妹がどういう存在がまったく思いつかないからである。

「妹とともに私は高水準な教育を受けた。それは、けっして生優しいものではなかったが、自我の目覚める前の私にとって、世界はその全てだったのだ」

僕のような日本の一般家系には想像がつかない話だ。彼女の持つ独特な風格はひとえにその教育方針にあったのかもしれない、と無粋な想像をめぐらせるだけだった。

「6つ目の誕生日を迎えた日のことだ。父に呼び出された私は、すべてを奪われ、冷たい牢獄に閉じこめられた。自由を失い、世界を闇に閉ざされ、畜生にも劣る生活を強要された」

「……え？」

「幸せの絶頂から絶望の底。与えられたのは、死なない程度の食事とありとあらゆる痛みの連鎖。無機的な石造りの牢屋はそれまでから想像できないくらいに地獄だった」

「ちょよ、ちょっと待ってくれ！」

僕はたまらずに声を上げた。ジェットコースター並の急展開に脳が回らない。

「話が見えないぞ。君は、……虐待を受けていたのか？」

彼女は「少し違う」と小さく呟いて、瞳を閉じた。その沈黙には、覚悟を固めるという意味合いがあったのかもしれない。数秒して彼女は口を開いた。

「風気委員、犬神憑きというものを知っているか？」

「犬神……？」

池に頭を突っ込んで足をV字に開く映像しか浮かばなかった。

「四国や九州に伝わる一種の憑きもの。血筋に与えられる呪いのようなものだ」

オカルティックな話とはかけ離れた切ないメロディーが室内には流れている。口は動かしつつも彼女はしっかり映像を観てくれていた。



「犬神を持つ者は、望みを他者の不幸という形で叶えられるそうだ。それが血筋に脈々と受け継がれる。初め犬神との契約は、諸説いずれも犬を惨たらしく殺し、その強い怨みのエネルギーが必要とされている」

「なんでそんな民族学的解説をしているんだ？」

「私の産まれた国では、これに似たことが行われ、私の血統がそうだったのだ」

現実的じゃないことだけは確かだ。だけど彼女が冗談を言っているようには見えなかった。

「ただし我がクロウリー家に関しては使い魔はなく、共通するのはエネルギーが怨念という点のみ。怨みが強いほど、一族に栄耀栄華がもたらされたという」

「クロウリー家ってのは」

「私の実家だ。ねじ曲がった伝統をもつ血統の末裔。恨まれることで栄華を誇れると信じる腐朽の一族のな」

坂井珠希、ってのは通名なのだろう。

「怨み、ってのが、君が虐待紛いな目にあつた理由なのか。僕には全く理解できないが……」

「我が家に産まれた双子は、片割れを日本でいう犬神としての人柱にたてるのがきまりだった。そうしてクロウリー家は繁栄してきたのだ」

「時代錯誤な。君がどこの国の産まれかは知らないが非人道的だ」

僕の声は軽く流され、彼女は平然と言葉を続けた。

「とはいえ伝承通りの双子が生まれ、父は冷酷にも我が娘を生け贄にたてることを選んだ。私が、一族を憎めば憎むほど、クロウリー家には栄光をもたらされると言われたよ。首輪に繋がれ、安寧な日々を羨むように私は強要され、実際私は彼らを憎悪するようになっていった。人柱に必要なのは憎む事。ありとあらゆる拷問を受け、無事なのは顔と手くらいなものだ。この服の下の皮膚はただれてとても見せられたものではない」

「嘘だろ？」

彼女は小さく自嘲ぎみに鼻をすすると、パイプ椅子の上で膝をかかえた。ただ単に赤面症が原因だと思っていたが、思えば彼女の肌の露出は極端に少ない。

「父を母を妹を、強く憎むように私は成長していった。なんで私が、なんで妹じゃないんだ、とな。幽閉される前に、私は自身の命の期限を明かされ、その時まで震えて待てと言われたが、いつしか処刑日が救いの日のように感じるようになっていた」

「冗談だろ？常軌を逸してる」

「痛みに私は慣れることなく、苦しみだけが蓄積していった。今でもトラウマだよ。たくさんの下品な視線が私を射抜くんだ。品定めするようにね。胃酸で喉が灼けたよ」

フィクションの中の出来事を彼女は淡々と語っていく、そう信じなくて、聞いているだけの僕の方が狂ってしまいそうだった。

「死ぬことだけは、許されなかった。救いの日まで、私の命は長らえなくてはならなかった。成人年齢とされる18歳まで私の地獄は続くはずだった」

救いの日、それはすなわち処刑日を意味する。彼女の辛苦は死をもって終わりを告げる、予定になっていた。

「だけど、君は救われたんだろ？じゃないと今ここに坂井珠希がいるはずがない」

「私の自由は犠牲の上になりたっている」

それは、僕が生きてきた中で聞いたこともないような、深い絶望の一言だった。

「15になったばかりの頃か。暖かな陽気の日だった。父が異国に赴いている隙をつき、母が私を逃がしてくれた。罨かと思ひ警戒したが、それは母性愛から来た行動だったと今にして分かる。当時は、父からあらぬことばかり吹きこまれていたからな」

「よ、よかったじゃないか。君は地獄から生きてでられたんだから」  
「純粋な愛情で私はたしかに救われた。久方振りに会い、痩せこけ

た私を強く抱きしめ、今まで助けられなくてごめん、と謝られた。その時の私は終始腹の底で現実を疑っていたよ。幸福から不幸ほど、憎悪の念を抱くことはない、何回かやられたパターンだったからだ」  
えげつない。だけどそんな壮絶な現状を作りだした彼女の父が、一番の悪人なのではないだろうか。

「母は私に一切れのチョコレートと、柔らかな水色の毛布を与え、車に乗せた。車が出る寸前に、遠く屋敷の窓から私を眺める妹と目があつた。待機していたらしい。あいつは、私に小さく、手をふると、静かな微笑みをたたえた」

坂井珠希のしゃっくりが耳に響いた。とてもじゃないが聞いていられない悲しみの鳴咽。干上がった浅瀬の生き物のように彼女の呼吸は荒かった。

「身代わりだ」

やっとそれだけ言う彼女は、すすり泣いた。

映像は終わり、室内に暗闇が落ちる。再生音がやんでから、少し落ち着いたらしい彼女は続きを話はじめた。

「手引きにより、母の極東の知り合いである『鳥山家』に私の身柄は引き渡された。今の私は母や妹の犠牲の上に成り立っているのだ」  
「……」

僕はなんだか気まづくなって、暗くて見えるはずもないのに彼女のいる方向から目をそらした。

「私は妹を助けなくてはならない、それ故、まだ死ぬわけにはいかないのだ」

それはいつか彼女の言っていた、生きてやらなくてはならないことの答えだった。

暗闇に沈んだ声に僕は返事もできずに、椅子から立ち上がる。

なにも言えなかった。

僕のような普通の高校生にかける言葉なんてあるはずもない。

「電気をつけるのはもう少し待ってくれ」

鼻を吸る音とともに彼女は言った。

「完成度は未熟だが、とても素晴らしいものだったよ。流れている曲、なんていうんだ？」

「タペストリーっていうんだ。キャロルキングの」

「お前は巧みだな。風紀委員、すまなかった。身の上話をしてはいたが、作品はちゃんと観させてもらったよ。良いものだ」

作品の品評は、泣いている姿を見られるのが恥ずかしいからの、照れ隠しにしか聞こえなかった。僕は、蛍光灯のスイッチに伸ばしていた手を止め、口を開いた。

「君は……」

布田美月を、説得できなかった。

だけど坂井珠希といっしょなら或いは、と考え彼女に声をかけたんだ。

「君はどうして僕にそんな事言ったんだ」

「どうしてだろうな」

いつもの落ち着きある語調で彼女は続ける。

「お前には聞いてもらいたかったんだ」

そう言われても僕は、なにもできない。

「君は、君はそんな辛い目にあったのに、柴崎陽太のことを悔いるのか？」

「……あいつはあいつで生きていたんだ」

僕はいつのまにか泣いていた。

「他人を救うのは、難しいね」

それは、エゴなのだろう。僕のエゴだ。

「僕は、なにも考えずに今まで生きてきた。だけど……」  
続きの言葉は出せないまま、部屋には沈黙が落ちた。

切り離したように存在している視聴覚室には、外の音がまったくしない。耳に痛いほどの静寂だ。

「風紀委員、行こうか」

それを切り裂くように彼女が立ち上がる音がした。僕は自分のま

なじりを拭ってから、蛍光灯のスイッチを押す。チカチカと点滅してから明るくなった室内に、金色の髪を靡かせた坂井珠希がいた。

「行くなってどこへ」

微笑みを浮かべ、坂井珠希はこちらを眺めていた。

「死者の墓を暴きに」

意味はよくわからなかったが、彼女の言葉は、悲しみなどの負の感情ではない、優しい光に満ちていた。

## 29…涅槃ジャメヴユ

「一つ疑問に思っていたことがある」

誰もいない薄暗い廊下を、彼女の後に続き歩く。音がないので僕らの声だけが虚しく響いていた。

「柴崎陽太の絵には数字が記入されていた。三桁の数字」

このタイミングで切り出すということは、意味のない雑談ではないのだろう。

「たしかにあったね。なんだっけ七百……」

「724。この数値の意味するところが曖昧だったのだ」

彼女の言う通り、柴崎陽太が描いた『shelf』という絵には、プリントされた小冊子ではわかりづらいが、確かにその数値が記入されていた。

「日付じゃないの？スケッチブックにも似たようなこだわりがあるみたいだったし」

「かとも思ったが、おそらく違う。タイトルを思い出してくれ」

「shelfだろ。724となんの関係があるのさ？もしかして語呂合わせ？……なによ、かな」

「そうではない」

呆れるようなため息とともに説明するのも面倒くさそうに彼女は続けた。

「十進分類法というものがある」

「聞いたことがないな」

「日本で使われている図書分類法のことだ。お前も見覚えあるだろう。図書館の案内標識はいずれも三桁の数字で記されている。100番台は哲学200番台は歴史、といった具合にな」

千歳といっしょに行った図書館を思い出してみる。

前々から、へんな分類のしかたとは思っていたが、国の規定でキ

チンとしたルールがしかれているなんて知らなかった。整理整頓がしやすくするために、そういった番号が用いられるようになったのだろうか。

「柴崎陽太の724がそれだって、十進分類法に当てはめろってこと？」

「そうだ。番号が示すカテゴリーをみるのだ」

「根拠は？」

「タイトルと数字で柴崎陽太は、一種の暗号を記した」

無理やりな気がしたけど、shelfの日本語訳は『棚』、724が棚番号を意味するのなら、一応筋が通っているように思える。

「でも番号は全部キリがいい数字じゃなかったっけ。十進法ならなおさらだ。724なんて細かい数値、僕は見たことないよ」

「学校の図書室などは蔵書数を考え、そこまで詳しく分類はしない。しかし、一桁までで表す分類がある」

「724番は……」

「7類は芸術美術のカテゴリーで、7類2綱4目は絵画の材料や技法をあらわす」

柴崎陽太は美術部だった。だからだろうか。

「いやでもちょっと待ってよ。柴崎陽太の絵が、図書番号を表してるからって、なにかあると決まったわけじゃ」

彼女に聞かなくても、ここまで来れば行き先が分かっていた。僕らの向かう先、それは図書室だ。

「風紀委員、君のショートフィルムを見ていて気がついたんだ。7類の美術の棚の中で、広辞苑のようにケースに収められた本が写っていた。一瞬でタイトルまでは読みとれなかったが、絵画技法について記した本だった」

「まさか、とは思うが」

視聴覚室で彼女が言った言葉を思い出す。死者の墓を暴く、死者は柴崎陽太のことだろう。

「なんらかの意図が私はあると思う」

彼女は呟いて図書室の扉を開けた。

放課後の図書室には人気がなかった。十和森高校には自習室があるので、受験に備える三年生はみんなそっちに行っているのだ。だから放課後まで図書室にいるのは純粋な読書好きくらいなものだった。

慣れた様子でスイスイと棚の間を通り抜ける坂井珠希の後に続いて、僕は迷い子のような心持ちになった。DVD鑑賞などで図書室を利用することはあっても、本が収められている棚に足を向けることはめったになかったからだ。馴染み深い学校の施設だが、初めて訪れたかのような感覚に陥る。こういうのなんていったか、既視感を表すデジャヴの反対語で、たしか未視感、ジャメヴュだっけ。この間の撮影の時に、確かに来たはずだから、その感覚はほんとに不思議だった。

「7類はここだ」

足が止めた坂井珠希にぶつかりそうになる。ぐっところえた僕を、彼女は怪訝そうな瞳で見上げた。

「芸術系の棚だよ、風紀委員。そしてそこが、絵画のコーナー」  
小さな人差し指が示す一番上の棚の一角に、何冊か日本画や洋画について書かれた本が並んでおり、廊下で彼女が言っていた本があるのを見つけた。

ケースに納められた太い辞書みたいな本だった。タイトルは『絵画材料辞典』、僕には一生縁がない本だろう。少なくとも読書という件に関しては。

間抜けにも口を半開きにしてその本を眺めていた僕の袖がちよいと引かれ、坂井珠希はどことなく頬を赤らめて「とってくれ」と言った。チョコレートの効果が切れたのかと思ったが、子どものような背丈の彼女じゃ届かないから、恥ずかしかったのだろう。

僕はなにも言わずに背伸びをしてその本を棚からとった。あまりの重さによろけそうになったが、なんとか体勢をととのえ、ハイと



差し出す。

両手で受けとった彼女は下唇を噛んで、僕をキッと睨みつけた。

「な、なんだよ。取ってあげたんだから、お礼くらい言ってくれたっていいだろ」

感謝こそされても睨みつけられるいわれない。

「重い！」

やっとこさそう呟くと、みるみる赤くなっていった。片手だったとはいえ男の僕でさえふらつく重さの本だ。非力な少女には無理があつたのだろう。

「ごめん」

「っっ」

我慢比べをする子どものように小さく唸りはじめた彼女に謝罪をしてから、本を受けとる。

覚悟していたから、よろけることはなかったけど、やっぱり重かった。

外観だけを眺めていてもしかたないので、左手でケースを支えながら本体を引き抜く。思ったよりもすんなり抜けた。空のケースを目の前の本棚の隙間にぽんと置いてから、坂井珠希に見えるようにペラペラと捲る。

「なんにもないみたいだけど」

二度三度パーっと捲ってみたけど、ページの合間に葉が挟まれているなんてこともなければ、誰かが押し花を作っているというわけでもなかった。最適な太さだとは思うのだが、よくわからない絵の具についての説明が延々とされているだけだ。仮に僕が美術部に入ったとしてもこの本を借りることはまずないだろう。

「むう。ケースの方はどうだ？」

「ケース？」

本体とは違い、驚くほど軽い空のケースを手にもって、マジマジと見てみる。ISBNコードもなければバーコード表記もない、ずいぶんと古い本のようなだ。

むき出しの本体だけを先に棚に戻し、空のケースの内側を眺めてみる。「あ」っと声を出していた。

「どうした？」

「封筒が貼り付けられてる」

「ほう」

感嘆の息の横で僕は指を精一杯突っ込み、マスキングテープでとめられた茶封筒をなんとか取り出した。本を痛めないように粘着性の弱いテープを選んだのだろうか。そういえば柴崎陽太は図書委員だった。

「なにが入っている？」

「ちよっとまって二枚あるぞ」

「二枚？」

「ああ、ほら」

二通の封筒を受けとった坂井珠希は、しげしげと眺め、一枚を本棚の上におくと、もう一枚の開け口に止められたセロテープをピリピリとはがしはじめた。

「開けるの？」

「ああ、そっちはダメだが、こっちは大丈夫だ」

「……それってどういうこと？」

よくわからない返答に首を傾げた僕に、彼女は鼻をならして、「そっちには親展って書いてある」手に持った封筒の裏を見せてくれた。『見つけてくれた人へ』と、坂井珠希の開けた封筒に書かれている。

「親展って、誰宛だったのさ」

手紙の作法に詳しくはないが、親展はたしか宛名の人以外は開けないで下さい、の言付けだったはずだ。

「妹君だ」

柴崎陽太の妹は、布田美月。中に入っていたレポート用紙を広げながら、彼女は答えてくれた。

「これが一枚目だな」

そのレポート用紙は、手紙だった。

遺書ではない、手紙だ。

絵に暗号めいた意味をもたせ、示した先が、この手紙だったのだ。回りくどくてイライラしてくるが、柴崎陽太の謎は、ある少女にだけに向けられていたのだから、難易度的にはちょうどいいのだろう。とにもかくにも、僕はようやく、素の柴崎陽太と会うことができたのだ。

### 30…贖罪レター

夏の夜に、これを記す。

今これを読んでいるあなたがどのようなプロセスを経て、どうやってこの手紙を見つけたのか俺にはまったく想像がつかない。偶然だろうと構わない。小説を読むように、寝転びながら、鼻で笑ってくれても別にいい。何かを書くことが俺は好きなんだ。

名前を明かすことはできないが、十和森高校の人には多大な迷惑をかけたことを、まず謝っておきたい。三学期の終わりに図書室の本は一斉処分される。この辞典もだ。4月までに誰かの手に渡れたことを、次に感謝しよう。

だからその幸運に敬意を払い、自分語りが嫌いなら、その時点でこれをビリビリに引き裂いてほしい。

俺の一番古い記憶は、父のゴツゴツした手に引かれ、近くの神社にお宮参りに向かっている映像だ。

母親は俺が小さい時、別の男を作って出ていったらしい。寂しさは感じなかった。男手一つで俺を育ててくれた父には感謝している。そんな父に憧れ、というよりも影響されてか、俺も絵を習うようになった。父は腕のたつデザイナーだったのだ。

山下清のように精巧ではないし、サヴァンの人みたいに天才的ではないけれど、俺には映像記憶という目で見た出来事を写真のように頭の中で再生することができた。飛び立った鳩が何羽だったか数え直せる程度の能力だが、模写は純粋に楽しかったし、記憶にアレンジを加えられることは嬉しかった。

しかし好きと才能とは違う。目指していた美術コースがある高校の試験に落ち、進路について頭を悩ませていた中学三年の時だった。顔も知らぬ産み母親が、どこか遠い片田舎の県道で、崖から車ごと滑り落ちて死んでしまったそうだ。俺を捨てるように囁いた男と、いっしょに、二人してあの世に旅立ったらしい。

それにより、一つ困ったことが起きた。俺には、いわゆる種違いの妹というやつがいたのだ。正直いうなら彼女がどうなろうと知ったこっちゃなかった。駆け落ち同然の二人の残された愛の結晶に、身よりが無かろうと、所詮血が半分つながっているだけの他人。会ったこともない妹に兄妹の情がわくはずもない。

だけど親父は違ったらしい。愛した女の子もだからと、もっともらしい理由をつけ、その子を引き取ることにしたのだ。兄妹ができるという喜びよりも、好きにしたらいという思いの方が強く、2つ返事で俺はその旨を了承した。

中学三年の1月のことだ。受験という一種の節目、私立の願書受付まで幾ばくもない苛立ちが積もる時期だった。

初めて会った妹の第一印象は、暗い、だった。今にして思うがそれは当たり前なことだ。いきなり両親が死に、自分の引き取り手が母の昔の恋人ときた。落ち込まない方がおかしいだろう。親父と母は離婚済みだったので、戸籍上はウチの養子、ということになる。そういう手続きには絡まなかったのだ、よくわからないが。

とにもかくにもこうして我が家は三人家族となり、二歳下とはいえ、いきなり見知らぬ異性と同居することになったのだ。受験という言い訳をつくり、彼女とはろくに会話をしなかった。

両親が死んで絶望の淵から立ち上がるとする妹など、俺にとって邪魔でしかなかったのだ。

妹と話をするようになったのは、進学先を決め、心に少し余裕ができたところからだ。

「飛んでいない」

それは辛辣な評価だった。

俺のスケッチブックを覗き見た彼女の一言を今でも鮮明に思い出  
すことができる。

「あなたの絵は少しおかしい」

美術科のある学校に落ちた一つの理由が、欠如したオリジナリテ  
イだった。

頭の中の映像を模写するという過程に置いて、映像記憶は役にた  
ったが、そのイメージに引っ張られて、自分の心情をうまく表現で  
きなかったのだ。

短所の改善を心がけ、テレビで見た早駆けの馬と、凶鑑の鷲の翼  
を合わせて、歪なキメラを生み出していた俺に、妹は率直な感想は  
とても耳に痛いものだった。

「違和感がある。馬なのか、鳥なのか、あなたの絵は写真にしか見  
えない。上手いけど、心には響かない」

下書きなしに書き出した落書きのような絵でも、把握している弱  
点を大っぴらにされ、怒りの感情がこみあげた。

「そんなことは、とうの昔に気づいてる」

「だけど、私は好き」

俺は啞然とした。脚色はしていない。あいつはたしかにこう言っ  
たんだ。

「あなたの感情が隠されているみたいで、見ていて面白い」

妹はよくも悪くも正直者だった。

それから俺は描いた絵を、たまに見てもらった。はじめはホーム  
ステイに来た少女に感想を求めるみたいで、恥ずかしかったが、い  
つしかそれが当たり前になっていった。

妹のアドバイスはどれも的確でわかりやすかったのだ。

噛み合っていなかった関係が、油をさしたみたいにかっちり動  
きだすのがわかった。

ハタからみたら、おかしい兄妹だっただろう。一年経つころには、多少なりとも妹に情というものを感ずることができた。

この頃からだ。親父が少しづつおかしくなっていたのは。

近年の不況に煽られてか、仕事がうまく回らなくなってきたのだ。とはいえ腕は確かだ、収入がゼロになるなんてことはないし、著しく減った、というわけではない。ただうまくいかなかったただけなのだ。親父はそのイライラを酒にぶつけた。よくある話である。

育てられてきた十数年、荒れた父を見るのは初めてのことだった。考えてみれば、苛立ちの元は妹だったのかもしれない。妹は他界した母に似ていたのだ。

酒に酔った父は暴力をふるった。といっても被害者は俺じゃない。高校に通う俺と中学生の妹では、どうしても帰宅にタイムラグがある。半分以上が在宅勤務の親父は、その間に妹に暴力をふるったのである。腕力で五分五分になった俺を殴る勇気がないところがあの人らしい。

妹には庇護欲をそそる不思議な魅力があり、まあ当然だとは思いますが、俺は親父の暴力から彼女を庇うようになっていった。

父が自棄酒を呷る夜、暴行を恐れた妹は、俺によく助けを求めた。震えが収まるまで、一晩中彼女の手を握る日も多々あった。妹はなにかを失うことを異常に恐れていたのだ。

ギクシャクとした親子関係のまま月日は流れ、俺は高三に、妹は新入生として、この十和森高校に通うようになった。兄妹仲良く同じ高校に通うようになって他人からは、つき合っているように見えたりもした。引かないでほしいが、満更ではなかった。兄妹としての愛情の枠を、俺は多少飛び出していたのかもしれない。

事件が起きたのは夏休みだった。その日のことは、最初から最後まで鮮明に思い出することができる。

夏なのに、湿気が強く、ジメジメとして気持ち悪い日だった。大会用の絵を仕上げるため、俺は学校にいた。部活の後輩といっしょに息詰まる空間で活動していた時、煮詰まったらしい後輩は、

雑誌や広告を切り抜いて、コラージュを作りはじめた。コラージュといっても規則性のあるものではない、ただがむしゃらにノリで切り抜きを貼り付けるだけだ。幼稚な遊びに気付けば俺も夢中になって参加していた。

その日はろくに課題を進めることなく、俺はいつもより早い時間に帰路についた。

玄関扉を開け、少し薄暗い廊下を歩き、リビング前で俺は我が目を疑った。

妹が半裸で歯を食いしばって、泣いていた。あいつはいつもそうだった。引き取ってもらった恩を感じているのか、近所の目が白くなるような、決して泣き叫ぶようなことはしなかったのだ。

頭にカッと熱いなかがこみあげてきた。

その時の自分の咆哮が今も耳の奥でこだましている。気付けば俺は親父に殴りかかっていた。馬乗りになって、殴って殴って殴って殴って、殴り倒した。

反撃をうけた。胃をこみ上げる膝蹴りをくらい形勢逆転をいとも容易くうけ入れた。今度は俺が殴られる番だった。

朦朧としていく意識の中、妹の泣き声だけが俺の耳に響いていた。もし、という言葉で時を遡ることが許されるなら、この時素直に俺は、親父に殴られているべきだったのだろう。

父のしていることは間違っていると、真摯に、言葉で伝えるのが、息子の役割だったのではないか。母に似ていく妹に、恨みを抱くなと俺は、伝えるべきだったのだ。

カッターナイフが父の胸に刺さっていることに気づいたのは、飛びかけた意識がはつきりと戻ってきてからだった。

ポケットに、無意識のうちにいれてあったカッターを、俺は、自分の命を守るために、父親の心臓につきたてたのだ。

妹のかん高い叫び声だけが、俺の耳に張り付いた。



冷たくなった父親と、黒く乾き始めた自分の手を眺め、俺は呆然と現実には打ちひしがれた。

一時の怒りで、すべてを塗りつぶしたのだ。赦されることではない。ましてや、自分の父親を。

妹は、ずっと泣き続けていた。

警察も、救急車も呼ばなかった。我が身可愛さもあつたのかもしれないが、ただ守りたかっただけなのだ。

父を布団とビニールシートでぐるぐる巻きにして庭に埋めた。夏だ。張り付いたシャツと異常に渴く喉がそれを象徴していた。

それから先、俺は、人間としてやってはいけないことをした。

それから数週間後、遺体を隠蔽したのだ。方法は易くない。ただ自宅の庭から場所を移すだけにしても。

父の動かぬ体からは虫がわき、黒い液体がシートから漏れていた。隠しきれなかった臭気が俺の鼻を刺激した。将来を守るため現在を犠牲にしたのだ。

俺は最低を通り越した。

自分でやって吐き気がする。

父親の臭いじゃない、手のひらについた錆びた鉄の臭い。鼻の奥がつんといったむ。

目をつむってても、ご飯を食べてても、焦点の合わぬ親父の瞳が俺を射抜くのだ。

父は一応失踪というかたちで処理された。

幸いにも俺たちの扶養主として、遠方の祖母が名乗りあげてくれた。妹も俺もそれには感謝している。

あと数ヶ月もすれば、俺たちの住んでいた家は売りに出され、この街ともおさらばだ。家族の思い出はどんどんなくなる。父を失って、俺の心は擦り切れていった。口に出すことはなかったが、寡黙で不器用な父を、俺は尊敬していたんだ。

すべてを忘れて新天地、というわけにはいかない。祖母の好意に甘えることを、俺は赦されない。

どんなに悔やんでも謝っても、足りないのだ。

もう限界だ。あの日のことが網膜にやきついてはなれない。忘れる気なんてないのに、過去にすることを神さまはゆるしてくれないみたいだ。

くだらない俺の人生を、ここまで読んでくれて感謝する。

感謝ついでに一つ頼まれてほしい。俺の望みは妹の幸せ、ただそれだけである。きつとあいつは背負いこもうとする。責任はすべて俺にあるのに。

直接頼める立場じゃない。専属殺人罪は問答無用で死刑だ。それでも俺は、これ以上あらぬ風評で妹に迷惑をかけたくなかったんだ。だからこんなまわりくどい手紙、懺悔、遺書を残している。妹に直接手紙を残しても、意味をなさないだろう、誰かの強い言葉じゃない、あいつの胸には響かない。この手紙を見つけたあなたなら、俺が誰か、妹が誰か、大方の予想がついているだろう。拙い望みを、あなたなら、かなえてくれると信じている。

責任を押しつけることをゆるしてほしい。手紙を託し、多少の希望を抱かせてもらい、俺はいこうとおもう。

もし、うまくいかなくても気にしないでくれ、全部俺の責任であり、運命なのだから。

### 31…若輩ロマンチスト

残されたメッセージには、首を括るまでして、とらなければならぬ責任というものが綴られていた。

手紙は小説のように淡々とした文章で語られており、それゆえ、事情を知らぬ者が読んでも真に受けることはないだろう。

だけど、僕にはわかる。

これは、この震えるボールペンで綴られたB5のレポート用紙は、彼の魂の墓碑銘なのだ。

「我々は勘違いしていた。柴崎陽太の父親が失踪したのは、彼が自殺する前の話、だったのだな」

坂井珠希が言葉は、僕の鼓膜を揺らしているはずなのに脳に届くことはなかった。思考が追いつかない。

何度目になるかわからない挫折感がひしひしと追いかけてくる。

布田美月に、言葉をぶつけ、彼女を救うことができるのか。

袋小路に突っ込んだ自問自答に相對し、強く下唇を噛んでいた僕に、坂井珠希は、涼しげな視線をよこした。

「世界の終末を前に、君はなんて声をあげる？」

びくり、と自分の肩がふるえるのがわかった。それからすぐに、風雪にあてられたかのように、全身がぞわりと粟立つ。彼女の声は、完成された詩を朗読するみたいに澄んだ響きを持っていたのだ。

「想像がつかないよ」

「なら質問を代えよう。閉塞された世界からの脱出をはかり、部屋に火をつけた男がいた。お前は彼をバカだと笑うか？」

「笑えるわけないだろ。誰だって、締め付けられていると感じているんだ」

「白銀の世界に足跡をつけて歩く猫を、お前のせいで自由を失われたと糾弾するのか？」

「そんなことするわけない……さっきからなんだ君は。哲学のお勉強か？意味がわからない」

「私もわからない」

「はぁ？」

僕の素っ頓狂な声を受け止めるのが恥ずかしかったのか、彼女は外界をシャットアウトするみたいに肩にかけていた水色のタオルケットを頭から羽織った。

「つまるところ、意味なんてないんだ。よく偶然は必然だと言われるが、物事が決められていてそれに従っているとするならば」

まだ哲学のお時間は続いているのだろうか。首をひねった僕に彼女は続けた。

「それに抗って、奇跡の偶然を造り出すだけだ」

彼女は突然歩きだした。立ちつくしていた僕は我にかえって、慌てて彼女の後を追う。

僕らが再び美術室の前についた時、ちょうど稲木さんが中から出てきて、ドアに鍵をかけているところだった。

「言い方ってもんがあるだろ」

「だってよー……」

どうやら美術部の今日の活動はもう終わりのようだ。中間試験がもうすぐだから、活動時間を短縮させたのだろうか、時間的には少し早い。

「でも死んじまった人の絵を対象にしてんのはやっぱりおかしいじゃない」

「布田の気持ちを考えろって言ってんだ」

稲木さんは他の部員に少しでも語気を荒げて注意をしている。なんだか話かけづらい状況だったので、僕らは階段の影に隠れ、二人の言動を窺った。

「布田がおかしいんだって。先輩の絵が対象外になったっていうだけでショック受け過ぎなんだよ、あいつ」

「八谷、お前バカだろ。布田と柴崎先輩は付き合ってたんだぞ」

「えっ、まじ？……悪いことしちゃったかな……」

とぼとぼとこちらに向かってくる二人をやり過ぎたため、慌てて上階の物陰に移動した。

辺りの静けさに伴い、空気を震わせる会話は僕らの耳によく届いた。

「俺、謝って……」

「よせよ。飛び出した布田がどこ行ったかわかんないだろ。それに、誰にだって一人になりたい時くらいある」

稲木さんは優しく隣の男子生徒にそう言った。二人はそのまま下駄箱に向かっていく。

隠れて彼らの会話に聞き耳をたてていた僕とタオルケットはお互いに顔を見合わせた。

「ねえ、いまのどういう」

「どうやら柴崎陽太の絵がコンクールの対象作品から除外されたみたいだな。その報告を受け、布田美月が部室を飛び出したらしい」  
穏やかな波長を保っていた僕の脳内に、彼女の言葉が投石となって波紋が広がる。

「まずいだろ！だって、彼女は、昨日ッ」

結果を見届けたら、死ぬ。

彼女はそう僕らに暗喩していた。

「ああ、まずいことになった。11月3日を待たずして、布田美月は死ぬ気やもしれん」

「どうにかして彼女を見つけなくっちゃ。柴崎陽太の手紙を渡せば、きっと思ひ留まるはずだ！」

図書室の本に隠された二通の茶封筒、内一枚は彼女宛だったのだ。僕らの足りない言葉を、これならきつと補ってくれるはず。

「つう」

ぺたしぺたしとタオルケットを羽織ったままの坂井珠希が、小走りに廊下を走り出した。

昨日、僕を置いてけぼりにしたのと同じくらいの速度だ。

「どこにいくの？」

「き、決まっておろうが」

僕の質問に息をきらして、坂井珠希は答えた。

「屋上だっ！」

「ああ」

そうだ、きっと、そうに決まっている。

布田美月はやけに飛び降りにこだわっていた。失意の彼女がそこにいる可能性は高い。

「なら、早く！急ごうよ！」

歩くよりちょっと早いくらいの速度だ。これでは日が暮れてしまう。坂井珠希のスピードに合わせて早歩きしていた僕は彼女を急ぎ立てた。

窓の外に目をやれば、どんよりと分厚い雲が広がっている。ここから屋上は見えない。

「いやみか！？」

「なにがさ？」

「これが私の、ぜ、全力疾走だっ！」

「タオルケットをどかせよ！」

壁に注意して走るから遅くなるんだ。

「さ、先にいけ、風紀委員！」

彼女はそう言ってタオルケットの隙間から柴崎陽太の記した茶封筒を僕に差し出した。

「ああ、君も出来るだけ急げよ」

受けとって、屋上に向かって走り出す。

布田美月がいるかなんて、わからなかったけど、彼女に渡さなくちゃいけないのは確かだった。

廊下は薄暗い。階段を駆け上る僕の足音だけが虚しく響く。

屋上まで、僕は休憩なしに、疾走した。

立ち入り禁止を乗り越え、5日前なんの気なしに開けた屋上扉の前に、僕はいま再び立っていた。

ドアノブにカバーがかけられていない。

鍵がかかって閉まっていれば、布田美月は屋上にいないことになる。本当ならそっちのほうがいいのだろう。

だけど、僕が手をかけたドアノブは容易く回り、蝶番は悲鳴をあげながら内と外とをつなげた。

湿った匂いが鼻腔を刺激した。小雨がぱらついていた。屋上のコンクリートは黒くくすんでいく。

僕は肌に張り付いた髪を払いながら、辺りを見渡す。

そこまで広くない。

夜に近づいて、暗くなっても、雨が辺りを濡らしても、彼女の姿をすぐに捉えることができた。

「布田さん！」

フェンスをつかんで泣いていた彼女はその声でこちらを振り向いた。

「また、あなたですか」

蚊の鳴くような声で彼女は呟いた。

小雨が降るなか、屋上にいるなんて、誰が見ても異常だろう。

「やっぱり君は、死のうと……」

駆け寄りたい、という感情を抑え、彼女を刺激しないよう僕はゆっくり歩いた。

「来ないで」

ぴしゃりと言われて自分の歩みを止める。

「もう一度話をさせてくれ」

「嫌です。私の目の前から消えて」

「断る」

街灯の届かない屋上、日の光は雨雲に遮られている。加えて、日没までの時間もない。開けっ放しのドアから入る階段の灯りだけが、頼りなく僕らを照らしていた。

—



### 32：節制ジャジメント

僕はブレザーの内ポケットに、柴崎陽太の茶封筒をしまい、キツと布田美月を睨みつけた。むき出しのままではインクが雨に滲んでしまうかもしれないからだ。この手紙を濡らすことだけはしてはならない。

シトシトとした小雨が校舎を灰色に染めていく。

「あなたに関係はない。ほうっておいてと何度言えば理解してくれるんですか」

「一生涯理解できないだろうね。僕は鈍感だから」

肌をうつ雨を鬱陶しく感じながら、僕は彼女に歩み寄る。

「そこで止まって」

無視だ。

「止まって」

無視。

「止まれッ！」

彼女の小さな握り拳がフェンスを揺らし、一つ一つの網目が子蠅の羽音のようにジイジイと響いた。

気迫におされ、立ち止まってしまう。

「……近寄らないで。あなたの心配なんて、慰めにもなりません。いい加減にしてください」

「こっちのセリフだ。死に場所くらいまともなところを選べ」

学校で死ぬ。

「青春を汚すな」

説得じゃない、ただの本音だ。

「……他人にとにかく言われる筋合いはありません。今すぐ私の目の前から消えてください」

「君は結局どうしたいんだ？死にたいのか？罪を償いたいのか？柴崎陽太に負い目を感じているのか？」

僕の質問のラッシュに布田美月は眉をしかめた。

耳にはアスファルトをうつ雨の音しか響かない。僕は彼女の返事を待たずして言葉を続けた。

「柴崎陽太の、遺書を、見つけたんだ」

「……」

「机の中にあつたふざけたやつじゃない。ちゃんとしたのだ」

僕は自分の体が傘代わりになるように前屈みになって、内ポケットから茶封筒を覗かせた。ネクタイの前のそれを視界におさめた布田美月の、微かに息を飲む音がした。

「布田美月宛だ。死ぬだなんて、一時の判断で決めることじゃない」「おにい、ちゃんのか？」

彼女は遠くを見るような、ぼんやりとした視線を僕にむけた。雨や暗さでよくわからなかったが、涙を流しているわけではなさそうだった。彼女の瞳が、狂気に歪んだからだ。

「おもしろい、ことをしますね」

「なにを、言ってる？」

「くっ、くく」

彼女の齒の隙間から、笑い声が漏れる。

「うっくく、くは、はは」

「お、おい！」

「はははは、はは、ふひ、はは」

彼女の哄笑が不気味に響きわたる。

「おい、どうしたんだよ！」

「あはははは！ははっ、はは、ふ、うっ、う、ん、んん……っ、う」

彼女の笑い声はやがて嗚咽へと変わっていった。

「っう。ううっ、……さ、坂井さん、ですか？」

「な、なにが？」

口元を押さえて絞り出すように彼女は言葉を吐き出した。

「ひ、酷いイタズラです。反吐がでる。お兄ちゃんの名を出せば、私など容易く懐柔できるとでも、思っ」

「違う！これは確かに図書室に残された柴崎陽太のラストワードだ！嘘なものかっ！」

「あなたが軽々しくお兄ちゃんの名を呼ぶな！」  
場が震えた。

真実を語っても虚構と裏切られ、手段もなにも、手足を奪われたムカデはどうやって歩けばいい？

「ほ、本物だ。彼は僕らにこれを残すために色んな仕掛けを残したんだ」

「……もう、いいです」

まずい、勘違いされている。

絶対すぎるのタイミング、逆の立場だったら、間違いなく僕も疑うだろう。だけど、タオルケットの下の少女が起こした奇跡は本物、本物なんだ。

「柴崎陽太のコンクール用に出品された絵には」

「もう、やめて下さい……」

「聞いてくれ！先輩は君に生きていてほしいと、」

うろう、と地の底から響くみたいに暗い嗚咽が響いた。僕は、吐きかけた言葉を飲み込み彼女を見る。布田美月は、顔をくしゃくしゃにして泣いていた。

「もう、やめて……」

途切れ途切れの言葉に僕の方が泣きそうになってしまう。だけど、言葉を止めるわけにはいかない。

「柴崎陽太は、布田美月が大好きだったから！君を信じて、」

「私は、常に、落としてきたんです」

僕の言葉を遮って、彼女はぼそりとささやいた。

「過去を、思い出を、感情を」

睨み付けるように彼女の視線は何処か遠くをさ迷っていた。

「あなたたちが私や兄を思ってくれている、それがわかっただけで、もう、お腹いっぱいです」

うなだれる彼女が、頭をさげて礼をしていると気づくのに、僕は

時間がかかった。

「私の落とし物を拾ってくれたあなたたちには感謝してます。あのハンカチは、私から兄へのプレゼントだったんですよ」

坂井珠希と初めて会った日の放課後、貯水タンクの下に落ちていたハンカチ。

「二人でよくふざけあいをしました。お互いの名前を取り替えたり、アイデアを出し合って勝手に七不思議を作ったり。だけど、もうお兄ちゃんはいない」

「死んでいい理由には」

「もう、いいんです」

吐き捨てるような一言。

「忘れてください。私とお兄ちゃんは、償わなければならないんです」

「ちんけな言葉で誤魔化すな！君はただ逃げたいだけだろ！」

叫んで、足を前に出す。小さな水溜まりがパシヤリと跳ねた。「来ないで！」という彼女の声を無視して一気に距離をつめる。

白状しよう。僕はムカついていた。いつまでもウジウジと、埒があかないこの状況に。強引過ぎると叱ってくれてかまわない、誰かに責められなければ、変わらない状況というのは確かにあるはずだから。

「死ぬなよ！」

肺に溜まった空気が、辛うじて言葉となる。

「君の中で光がなくなっただとしても、君が誰かの光になっているかもしれないだろ！」

金網にがしりと足をかけた彼女の細い肩をつかみ、引き剥がす。恨みがこもった瞳が僕を射抜いた。「離して！」もう言葉じゃだめだ、強行手段でも、なんとかしなければ。

「ばかやろう！」

雨の隙間を縫ってパシンと良い音が響いた。初めて人を叩いてしまった。しかも女性をだ。

世のフェミニストには一生顔向けできない。

「っ」

僕のビンタを食らった布田美月は、頬についた水滴をほったに広げるように呆然とさすった。

「死んだら痛みを感じることもできないんだぞ！君が死ぬべきなら、僕は止めない。だけど、君が死んでもいい理由なんて一つもないじゃないか」

「知らないだけなんです！私がいかに卑怯で狡猾な女か！」

下らない懺悔をしたところで、神様が耳を傾けるはずがない。とうの昔に、彼女の神は死んでいるのだから。

「罪を知れば私は死ぬべきだとあなたも指をさすは」

「知ってるさ！」

僕は怒鳴った。思う通りにいかなくてイライラしてきたのだ。

「柴崎陽太の手紙で読んだ。君と先輩がどのような苦しみを味わったか、僕は知ってるんだ」

「な、なん、で」

呆然と夜の闇を映していた彼女の瞳が、はっ、と明るい色を宿す。

「だ、だったら、わかるでしょ！」

「その上で言ってるんだ。責任なら柴崎陽太が引き取った。彼が死ぬことで詫びることを選んだなら、君は生きること、罪を償えよ！」

認めたくないけど、犯してしまった罪は、覚悟をもってして、清算されている。

「君を亡くしてしまったら、責任はどこに行けばいいんだよ！僕らは生きてるんだ！生きてるからこそ、罪を償えるんだろ！違うのかよ、布田美月！」

「だって、」

「生きることが免罪符であり、贖罪なんだ！生きるのが嫌なら、死ぬまで生きて意味を探せよ！僕も、僕も」

泣きたくなんてなかった。

「手伝うから……っ」

言葉が涙で滲んでしまうから。

フラフラと濡れたアスファルトにしゃがみこんで、彼女は力なく虚空をみつめた。

「わたしは、」

雨足が強くなっていく、世界がぐんぐん加速していくようだった。布田美月は雪を手のひらで弄ぶようにひろげ、ポツポツと優しく弾ける雨の滴を呆然と眺めた。

「わたし、は」

彼女の頬に、涙か雨かの滴がつうと流れる。

審美眼なんて持っていないけど、僕は純粹に、その光景が美しい、と思った。

「未来が怖いと彼は言った」

「！」

屋上に鈴を転がしたような声が、夕闇を切り裂き雨の隙間を塗って僕らの耳に届いた。坂井珠希だった。

「いまの積み重ねである未来ほど不安定なものはない、と悩んでいた」

扉から出ることなくタオルケットをはためかせて、彼女は光をバツクに僕らに言葉を与えた。

「時を観測できるのは意識があるからだ。生きているから時間を感じるができる。私は彼にそう言った。あいつはそれを理解した上で、自らの罪を償ったのだ。やつが死のうと考えているとわかっていたなら、もっと別の言葉をかけた」

「坂井、珠希……」

「乾いた土地を潤す雨があり、草原をなでるそよ風がある。世の美しい流転を見ずに死のうなどと愚かなことだ」

「お兄ちゃんは……」

「信念を持って、あいつは自らの墓標をたてた。墓守は、我らの仕

事だろう。彼の見れなかった景色を見て、彼の分を、生きなくてはならない」

「……」

「死とはあらゆる可能性を断つ残酷な手段だ。だがな、墓の上にも春の日射しは降り注ぐのだ。今が長い冬だろうと、春は必ずやって来るのだ。彼が生きた過去を今にするのは、お前の仕事じゃないのか？」

「……」

布田美月の返事はなかったけど、僕は心配なんてしていなかった。もう、大丈夫だ。きっと、彼女なら、奇跡を起こせる。

力なくフラフラとした足取りの布田美月を階段の踊場までつれてき、扉を閉めて、外の空気を締め出した。景色を失った僕らの世界は、それでも確かな輝きを誇っている。

「濡れたな」

階段に座らされた布田美月は小刻みに震えていた。秋とはいえ、冬の寒さをはらんだ冷たい雨だ。小雨でも、長い時間あたっていれば全身ずぶ濡れになってしまう。体温低下は免れない。

「顔をふけ。私の宝ものだぞ」

坂井珠希はそう言って、水色のタオルケットを彼女にぼすんと落とした。

頭からそれを羽織らされた布田美月は小さく「ありがとうございます」

「と囁き、緩慢な動作で髪をふいた。

「風紀委員は悪いが自然乾燥を待ってくれ」

「……別にいいけど」

少しだけ嬉しそうな表情で板チョコにかじりついた金髪は、僕にタオルケットを貸す気は毛頭ないらしい。

「そうだ。手紙」

胸ポケットから、封筒を取り出し、ぼんやりとしている布田美月に差し出す。彼女は力無くそれを受けとった。

「本当に、お兄ちゃんの……」

確かめるように見ていた彼女は、しばらくしてから僕たち二人を交互に見て、

「ありがとうございますっ……」

押しつぶれるような声で礼を言い涙の粒を拭ってから、強い意思を秘めた瞳で封筒の止め口に手をかけた。

迷いなき動作、戸惑ったのは僕らのほうだ。

「い、いま開けるの？ 落ち着いてからの方がいいんじゃないの」

「今見たい気分なんです。私は、ずっと柴崎陽太を思ってきたんですから」

気丈な気配を纏った少女は力強い手つきで、丁寧に封を解いた。中には、折りたためられた二枚の紙が入っていた。それらをゆっくり広げていく。一枚は文字がびっしり書かれた手紙だった。

僕らが読んだのと同じ、ボールペンの殴り書き。それを読むことが許されるのは、彼の妹だけだろう。立ち入ってならない領域くらいキチンとわきまえているつもりだ。

チラリと確かめてから、彼女はそれに目を通すことなく早々にポケットにしまった。

「疑っていたわけではありませんが、確かに、これは兄さんの書いたものです」

すっとすんだ瞳でこちらを見上げ、彼女はまた小さくお辞儀をした。

「お二人には悪いと思います。ですが、この手紙は」

「構わん」

チョコレートをかじりながらふんぞり反る金髪に、布田美月は微笑に微笑んだ。

「あとでゆっくり読むといいよ」

何を偉そうに、と思いながら僕も笑ってしまった。

残ったもう一枚をいそいそと広げ布田美月は「あ」っと息を飲んだ。



不粋かもしれないが、僕と坂井珠希も、そつとそれを覗きこんで見ている。

羽のはえた馬が蝶に囲まれ颯爽と天を駆けている、躍動感溢れる絵だった。

鉛筆で描かれたもので、色合いなんてなかったけど、僕の目には確かに、青い蝶と一緒に飛ぶ、ペガサスの姿を映っていた。

布田美月は耐えきれなくなったのか、唇をギュツと噛んで、ポロポロと涙をこぼした。

「綺麗だな」

坂井珠希は笑顔とも泣き顔ともとれる曖昧な表情で、そんな彼女は優しい瞳で見つめている。

「ええ、本当に」

柴崎陽太は、確かにそこにいた。生きていた。絵を書いていた。

「飛んでいます」

文字はなかったが、なによりも強いメッセージがあった。

### 33：終結エピローグ

秋が冬に変わろうとしている放課後。11月に入って世界はがらりと変わってしまった。

階段で布田美月に手紙を渡してから二週間たつけど、彼女はまだ生きている。

たぶんもう二度と、自ら死を選ぶとすることはないだろう。彼女の件で手をこまいていたせいでテストは散々たる結果だったけど、地頭の悪さを嘆いてもしかたない。とりあえずは目先の問題を解決しなくては。

僕と裕貴は映画研究部の部室で作戦会議を進めていた。中間の失敗を期末で取り戻そうと対策を練っていたわけではない、映研の存続に必要な『部員』と『実績』をいかにしようと頭を悩ませていたのだ。

「やっぱりオーソドックスにポスターじゃないか？」  
手に持ったカラフルなペンを器用に指で回しながら裕貴は提案した。

「僕か裕貴に絵心があればだけどね」

タイムリミットまであと二週間ちよつと。12月に入るまでに残り部員一名と活動実績をどうにかしなければならぬ。

「んじゃ校内放送とか朝礼ジャックとか」

「過激だな。実行は君がやれよ」

会議は踊るされど進まず。二人の部員では、ろくなアイデアがないのが原因だろう。このままでは実質的に廃部は免れない。

だけど、せっかく裕貴がかけもち入部してくれたのだ。どうにかして存続させたいところではある。

「思いついた！」

「んー、とりあえず聞こうか」

「京を裸にして素肌にボディペインティングするんだ。その状態で校門で勧誘を行う。活動実績も部員も確保できるし、なんて一石二鳥な案だろう！」

「まさかの逆セクハラに僕は目から鱗が落ちそうだよ！」  
「ともかくにも、僕らの未来は苦悩だらけでくすぶっていた。」

「相変わらずのらくらしているようだな」

狭い部室にパキリとチョコレートを噛み砕いく音が、幼子のように明るい声とともに響いた。

顔をあげて、声がした廊下側を見してみる。

「あ、てめえ坂井珠希！」

女らしくなる宣言はどこに行ったのかと疑いたくなるほど乱暴な語調で裕貴が金髪の少女の名を叫んだ。

「久しぶりだな」

「ああ、久しぶり」

無視すんなあー、という裕貴のかん高い声を無視して彼女はその青い瞳を僕に向けていた。

実際僕と坂井珠希が会うのはあの屋上での一件以来である。会って話をしようにも、彼女は引きこもりに戻ってしまい、学校に来てさえいなかった。試験期間中は保健室でテストだけうけて早々に帰宅してしまいうらしく影さえつかむことができなかった。なぜかそのあと千歳とはちょいちょい会ってるけど。

それにしても今になってなんの用だろうか。そう首を捻る僕の疑問など知らぬという顔で、裕貴の方を向いて板チョコ片手の彼女は口を開いた。

「む、お前はたしか橋本……なにがしではないか。入部したのか」

「裕貴だ、ゆーき！会うのは初めてだが、貴様に一つ言いたいことがある。いいかよく聞け、宣戦布告だからな」

「そんなことより風紀委員」

無視すんなー、という裕貴の発言を無視して、坂井珠希は再び口を開いた。

「まだ廃部にはなっていないようだな」

「ああ、生徒会との約束は一応11月末までだからね。猶予は少ないけど頑張ってるよ」

「ふっふふふ」

「な、なんだよ気持ち悪いな」

プレゼントを前に笑いをこらえきれなくなった子供みたいに、肩を揺らしながら坂井珠希は、にやにやと僕に二本の指を突き出した。  
「良い知らせが2つある!」

「へ、あ、なに?」

安楽椅子探偵みたいに千歳や僕を使いぱしりしてた癖に、基本的に彼女の精神年齢は幼いのだろう。「ひとっつ」と楽しそうに声をあげながら、僕にA4サイズのプリントを差し出した。

「なにそれ」

「あつ、入部届けじゃないか!」

ぽかんとした僕に代わって裕貴が大きく声をあげた。思わず「え」と言いながらプリントに書かれた文字を追う。

そこには確かに、入部届と書かれており、保険の山内先生の許可印と坂井珠希の名が綴られていた。

「私が新入部員になってやろう。感謝しろ」

「ほ、ほんとっ!?!」

「ああ、お前にはささやかだか世話になったからな、その恩返しだ。勘違いしてほしくないが、私が寛大だからこそその特別措置なのだからな!」

少しおかしくなった彼女の日本語に野暮な突っ込みをいれずに、立ち上がって彼女の手を握る。

「ありがとう!」

桜色だった坂井珠希の頬はみるみるうちに赤色に染まっていく。

「おことわりだぁー！」

裕貴だけがなにやら叫んでいたけど、「無視すんなぁー！」無視だ。

せっかくの新人部員を逃すわけにはいかない。

これで最低部員数の問題を無事にクリアすることができたのである。万歳。

「もう一つの良い知らせってなんだよ」

僕に手を握られてパニックになっていた人見知り、裕貴のその声で我にかえったのか、握りしめたままだったプリントとチョコをポケットにしまったから、人差し指をピンとたてて、目の前の僕を威嚇するよう大きな声をあげた。

「そうだ、そうだぞ。喜べ風紀委員！もう一つの問題も解決だ！」

「え、それって活動実績ってこと？ま、まさかだって僕まだなにもしてないよ」

「むふふー」と妙な含み笑いをしてから、坂井珠希は僕の胸にトンと何かを押し当てた。

「え、なにこれ」

「千歳にやいてもらったDVDのコピーだ」

「DVD？なんの」

僕の肩ほどもない身長で、大きく胸を張って彼女は言った。

「お前の自称暇つぶしだよ」

まさか、

「タペストリーの！？」

そういえば、あの日布田美月と別れたあと、貸してほしいと頼まれて彼女にDVDを渡したんだった。次の日に千歳の手から返却されたけど、まさかコピーしていたとは。

「だ、けどなんでコピーまで差し出すのさ？」

「文字を入れたりと多少改変したからな。最後に制作者の許可を頂こうというわけだ」

「許可、ってなんの？」

「喜べ風紀委員。学校のHPでこの映像が試聴できるようになったのだぞ」

「はぁあ？」

意味不明な発言に思考停止する。ホームページ？それって十和森高校公式サイトってこと？

え、なんで。HPってことは、色んな人に観られるってことで、先生とかも観て、受験生や在校生や卒業生もみんな時々覗くってこと？

「PR用動画ってわけか」

「ご明察」

裕貴は平然とした表情で答えを述べた。

「って、つまり、これが映画研究部、最初の活動実績になるのか！」  
「ふふ、その通りだぞ、橋本なにがし。すべては校長に掛け合った私の手柄なのだ」

「裕貴だ、ゆーき！つうかどんな動画なんだよ。一回見せてよ」

「よからう」

ごそごそと部の備品であるノートパソコンを起動している裕貴の手に坂井珠希からDVDが渡される。

僕はその光景を、喜劇でも鑑賞しているみたいに呆然と立ち尽くしていた。

部員と、実績と、映画研究部存続に憂いていた問題2つが坂井珠希の手によって一挙に解決したらしい。

「ふふ、私の活躍に声も出せないようだな。これからの私のことは敬意を払い救世主と呼んでくれていいぞ」

「そんじゃ私は部長ってよんでくれ。京は副部長ね。それより坂井さん、DVDプレーヤーってどれかわかる？」

「それだそれ、そのアイコン」

なんだかんだで仲良く肩を合わせてディスプレイを眺める彼女たちに、僕は騒がしいと感じるより、嬉しさを感じていた。これから

僕たち三人で映画研究部をやっていくんだ、部長として、僕が頑張らんくちや！

「……」

自分に嘘をついて、耳まで真っ赤になったであろう僕を青いビーム玉みたいな瞳が見ていた。

「宣伝用動画、に僕の、」

気づけば独り言まで震えている。

「めっちゃくちや恥ずかしいんだけど……」

呟きに坂井珠希は、無邪気に微笑んだ。

「自分の作品を公表するというのは、得てしてそんなものだよ」  
その発言は妙に格言めいていた。

### 33：終結エピソード（後書き）

というわけで、放課後タペストリー完結なわけです。

なんだかんだで長くなっちゃいましたがお付き合いありがとうございました。

青春ミステリっぽいのが書きたいという衝動から始められた物語でしたが、いかがでしたでしょうか？

多少なりとも面白いと思われたなら作者冥利につきます。

読了感謝です。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3060r/>

---

放課後タペストリー

2011年9月10日03時29分発行